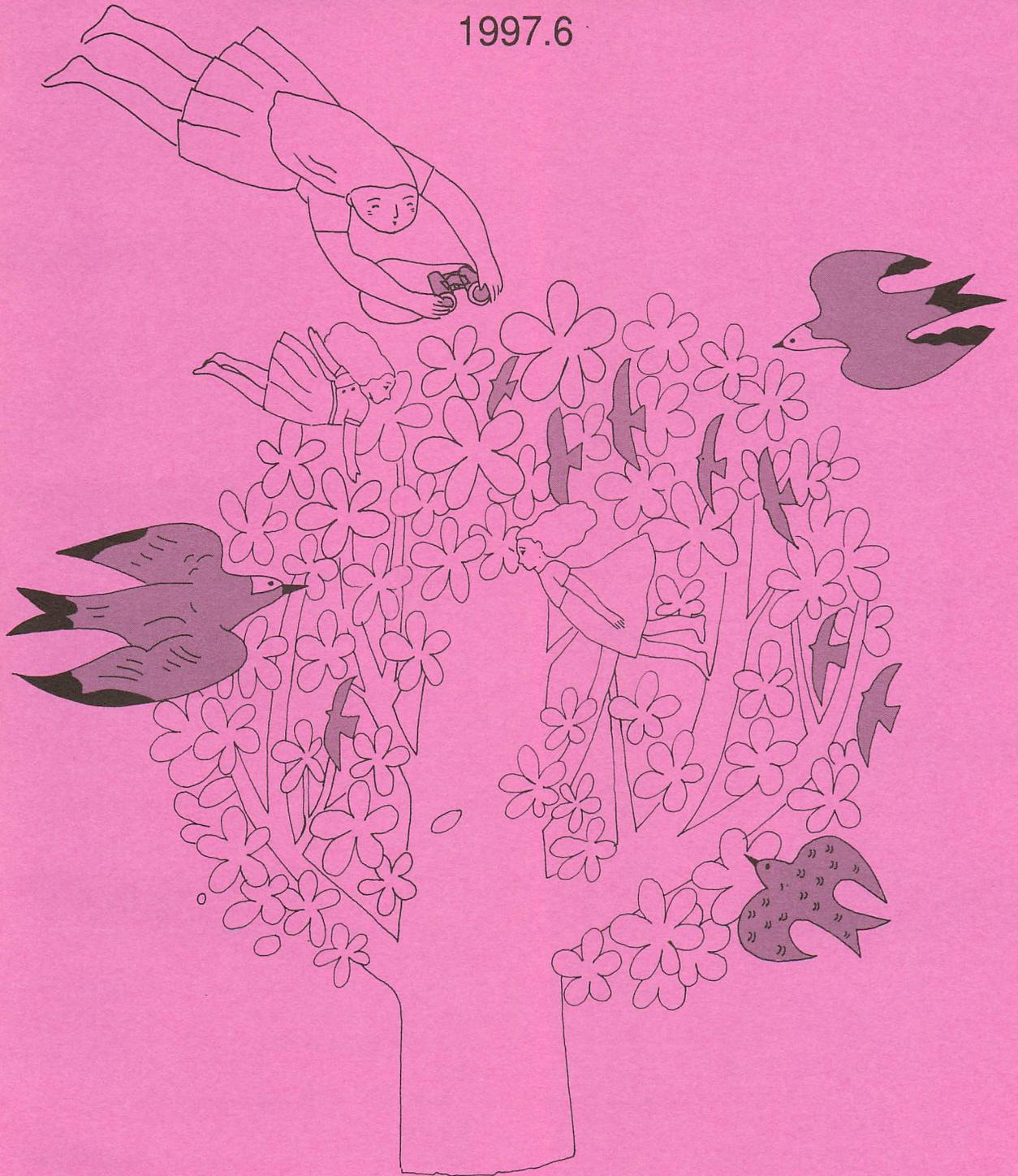


50号

愛鳥教育

1997.6



全国愛鳥教育研究会

愛鳥教育 No.50 1997.6

目 次

巻頭言

第50号に想う

— 下田澄子先生を偲んで — 江袋島吉 3

第50号に寄せて

鳥と子どもたちに支えられて --- 国松俊英 4

『身近な野鳥シート』から ----- 松原巖樹 5

全国愛鳥教育研究会

— 発足当時の背景 — ----- 松田道生 6

愛鳥教育50号に寄せて ----- 斎藤一紀 9

愛鳥教育研究会発足のころと

戸倉小学校の今昔 ----- 梅本 登 10

特集 自然教育園を造ろう

「自然教育園」について ----- 平田寛重 12

上福岡市立第七小学校

学校ビオトープ ----- 佐藤邦彦 19

新潟県長岡市川崎小学校

「第3の教室」としての

「森」と「川」を生かした

教育活動の展開 ----- 米山忠彦 25

横浜市立大道小学校

しぜん広場創造の取り組みと

活用の実践から ----- 尾上伸一 33

神奈川県立厚木西高等学校

学校敷地内に残された

雑木林の利用 ----- 阿部健太郎 46

校庭改造・ビオトープ・教育園・生態園造りのた
めの文献紹介 ----- 49

座談会

50号発行をふりかえって ----- 52

全国愛鳥教育研究会沿革 ----- 58

『愛鳥教育』総目録1～50号 ----- 66

平成7年度 事業報告 ----- 箕輪多津男 98

平成7年度 収支決算報告書 ----- 98

平成8年度 事業計画 ----- 箕輪多津男 99

平成8年度冬期研修会の御案内 ----- 100

'97身近な生きもの調査に

参加しよう ----- 平田寛重 101

ひとりでも迷子じゃないよ！ --- 平田寛重 102

平成8年度夏期研修会報告 ----- 長屋昌治 103

論説

環境教育と自然教育園 ----- 平田寛重 105

編集後記 ----- 106

愛鳥クイズ ----- 107

巻頭言

第50号に想う

— 下田澄子先生を偲んで —

会長 江袋島吉

きびしい寒さの中で、ツバキやシャクナゲが葉を丸めて耐え、落ち葉の蔭ではカタクリ、フクジュソウ、スマレ等が芽をふくらませ、ヒヨドリもシジュウカラもウグイスもオナガも、そして子供達も、近づいて来る春を待っているこの頃です。

皆様には、日頃子供達の自然学習への関心を高め、愛鳥活動を推進されていることと、深く感謝申し上げます。

さて、新しい小学校理科学習指導要領の目標では、特に“自然を愛する豊かな心情を培う”とあるが、自然愛護の心をすべての人が持たなければ、資源不足のこの地球では、今や人類の生存が危ぶまれるまでに至っています。

皆様には純真な子供達に自ら自然に働きかけ、自然に学び、楽しい学習の中で豊かな人間性を育成するという立場を、自然観察や愛鳥活動等各学校の実態に応じてお進めのことと存じます。

しかしながら、自然愛護の心情が、子供の心につつと盛り上がるためには、長い間繰り返し自然の中で観察学習や保護活動を進めていく他に道はなく、そしてその事は反面時間的な問題、子供の興味の持続、理科教育とのかかわりあいなど、多くの工夫と困難が存在します。

さらに、学校全体で取り組むとなると、その方法や共通理解の持ち方にも多くの悩みがあり、その上、野鳥や植物等そのものの実態把握や観察方法、子供の可能な学習内容や、それらの指導援助のあり方その他非常に多くの課題を持っています。

従来も、これらの成果については、全国鳥獣保護実績発表大会などで発表があり、多くの示唆を受けましたが、やはり会場の関係で一部の者に限って知らされる現状になっています。

そこで、なんとか全国各地の多くの学校の試みを、同じ志を持った人たちで知らせ合い、時としてはその上でどうするかなどの意見を交換する意味で、愛鳥教育に力を入れている学校や、教師間の横のつながり、組織作りをしたいものと考えます。

全国一円という形で、すぐにそれが可能ではないでしょうが、どうしたら情報交換ができたり、また、子供の研究の発表場面（口頭発表とは限らな

い）が持てるかなど、それらの規約・組織・財政の裏付け・その他について話し合い、あるいはアンケート方式でご意見をお寄せ頂く等、五月のバード・ウィークをめぐりに、何らかの形で組織を発足させたいものと存じます。

つきましては、本趣旨をご諒解の上、貴職ならびに管下教職員の中から、発起人としてお力添えを下さいますようお願い致します。

については諾否、意見等について、期日までにご返事下さいますよう、重ねてお願い致します。

昭和五十五年一月三十日

北海道倶知安町立比羅夫小学校長 松岡秀郎

東京都 五日市町立戸倉小学校長 下田澄子

同 世田谷区立二子玉川小学校長 江袋島吉

三重県 名張市立滝之原小学校長 宮本敬一

千葉県 千葉市立 土気中学校長 吉田重男

(財団法人) 日本鳥類保護連盟 柳沢紀夫

思い起こすと、昭和51年度に愛鳥モデル校の指定を受け、当初指導を仰いだのが故下田澄子戸倉小学校長（本会第2代会長）、日本鳥類保護連盟柳沢紀夫指導部長、同松田道生指導部長だった。

お陰で昭和53年度の実績発表大会に出場して、環境庁長官賞を受賞することが出来た。多謝。

昭和54年の11月に、下田先生より全国組織創設に際し、発起人要請の電話があり了承をする。

昭和55年1月、本研究会の原典とも言うべきこの趣意書を関係者に送り、着々と準備を進める。

昭和55年5月17日、山階鳥類研究所で創立総会を開き、田村活三氏を初代会長に船出をする。

昭和63年2月27日、当時第2代会長だった下田先生急逝さる。年若くしかも不測の創設者の訃報に茫然自失、会の前途にも憂色が漂ったが、関係各位のご支援ご協力により今日に至っている。

以上、第50号の刊行に際し、改めて原典に触れ、思いを新たにしたいと考え、本趣意書を紹介した次第である。創設者下田先生の霊よ安らかに。

なお、本研究会の発会に当たり、陰の力となって下田先生をお助けし、多大のご苦勞をいただいた当時の戸倉小学校木下教頭、梅本教諭、連盟の松田指導部長には改めてお礼を申し上げます。

第50号に寄せて

鳥と子どもたちに支えられて

国松俊英

1996年10月はじめ、ニューヨークへ旅行した。その一日、機会があってニューヨークの日本人学校を訪ねた。

この学校はニューヨーク周辺に在住する邦人の子どものために設立された学校で、ニューヨーク州と接するコネチカット州の最南端の町グリニッチに位置していた。マンハッタンまで列車で約40分の所だ。

前は私立の女子高校だった所を買い取ったもので、緑あふれる広い敷地の中に古い味わいがある校舎がならんでいた。そこに小学生・中学生合わせて約280人の子どもが通って勉強していた。

私は、小学2年生の子どもたち20人に、野鳥の話をし、持参していった紙芝居をやった。ちょうど、アホウドリのデコイ作戦の本を書いている途中だったので、鳥島のアホウドリを中心に、追いつめられている野生生物のことについて話した。

紙芝居のひとつは鳥の昔話を紙芝居にしたもの、もうひとつは宮沢賢治の「どんぐりと山猫」だった。父兄の人も少し参加して、話を聞いて下さった。

私の話と紙芝居が終わった後、子どもたちからいっぱい質問が出て、なかなかおもしろかった。質問がいつまでも終わらず子どもたちは教室に帰ろうとしないので、つぎの授業を気にしている先生だけが落ち着かないようすだった。

子どもたちだが、絶滅に瀕している生き物の話にみんな興味をもっており、アメリカで少なくなっている野生生物のこともちゃんと勉強していたので、私は感心した。

目を輝かせて話を聞いてくれる子ども、私をはっとさせるような質問をする子ども。生き生きした子どもとのふれあいの中で、私はここでも元気をもらい、いろいろと学ばせてもらった。それにしても、ニューヨークの日本人学校の子どもたちとこんな時間が持てるなんて、思ってもみなかったことで、すばらしく貴重な体験となった。

私が児童文学の創作を初めて出版したのは1975年のことだ。私の出身地である琵琶湖のほとりの

町・守山を舞台にした作品で、「ホタルの町通信」(偕成社)という物語だった。守山は大正時代からゲンジボタルの群生地として知られ、ホタルのすばらしさは日本一といわれた。けれど、私が中学生の頃、住宅がふえ工場ができ、川の水が汚れてしまい、かつては多くいたゲンジボタルは、滅びてしまった。だれも、ホタルのことなんか考えなかった。私はずっと心の中に、滅びていったホタルのことを抱えていて、児童文学を書き始めた時、それを作品にしたいと思ったのだ。

その作品では、町が都市化していく中で滅びようとするゲンジボタルをなんとか守りたいと、一人の青年が人工ふ化や人工飼育などを試み、懸命に努力している。青年に出会ってホタルのことを知った小学生たちが、町にホタルを残そうと、子どもならではの行動を展開する物語だった。

その本が出版された頃、私は千葉県船橋市の東京湾のそばに住んでいた。そこで東京湾の自然を守る運動を続けていた<千葉の干潟を守る会>を知り、活動に加わった。そしてある日、会が主催した海辺の自然観察会に参加した。

望遠鏡を使って野鳥を観察するのはその時が初めてだった。干潟いちめんには散らばって、歩いたり休んだりしている鳥が、じつに生き生きとしているのに驚いた。よく見ると、大きな鳥、小さな鳥、くちばしの長い鳥、短い鳥……、とさまざまである。歩き方もえさの取り方も鳥によって違い、なんとおもしろいのだろうと思った。

私の家は、東京湾の干潟のすぐ近くだったから、すぐに望遠鏡と図鑑を買い、通いはじめた。この干潟のつき合いの中から、渡り鳥の生きる厳しさやたくましさ、また自然の大きさ豊かさを学んだように思う。また自然を守ることの大切さも教えられた。

野鳥を観察する一35歳にして初めて出会った楽しみが、その後の私の児童文学の世界をも大きく変えたのである。心の中のホタルは、生きた野鳥に変わったのだ。

東京湾を出発点にして、私は日本各地の野鳥や野生生物の生息地や保護の現場を訪ねていった。ちょ

うどその頃、日本鳥類保護連盟の機関誌「私たちの自然」に連載記事を書かせてもらっていた。そして日本の各地で野生生物が追いつめられていること、またそれを守ろうと努力している人たちのことを知った。

その時に感動したこと、共感したこと、考えさせられたことなどを、子どもたちに伝えたいと思った。それが、密猟者からオオタカを守る人たちを書いた物語『はばたけオオタカ』や、絶滅に瀕したトキがたどってきた道を書いたNF『トキよ舞いあがれ』の本になった。

またその後、滋賀県多賀町の山中の小さな分校の子どもたちがダムにくる水鳥を守った作品『オシドリからのおくりもの』、湾岸戦争のために原油で被害を受けた水鳥たちを助けるため、サウジアラビアまで飛んで行って働いた人たちを書いたNF『ベル

シャ湾の水鳥をすくえ』も出すことができた。

野鳥と関わり、鳥や生き物について書く中で、命のすばらしさや生きることのたいせつさなど、どれだけ多くのものを学んできたことだろう。子どもたちに向かって語りかける中で、子どもたちからどれだけ多くのものを教えられてきただろう。

あらためて自分のやってきた仕事、やっていることをながめた時、子どもたちや鳥たちに教えられ、導かれ、しっかり支えられて生きているんだと強く感じる。

その幸せに感謝しながら、もっと努力していい本を書いていきたいと思う。子どもたちが大きくなって、心の片隅にずっと残っているようなものを書きたいと思う。

(児童文学作家)

『身近な野鳥シート』から

松原 巖 樹

研究機関誌『愛鳥教育』第50号の発行を心よりお祝い申し上げます。

思い起せば19歳のとき、ゴーストライターならぬゴーストイラストレーター？で権威ある出版社の図鑑に、数点の植物標本画を描かせてもらった時から踏み込むことになった今の道。学識も人格も備わっていない、教育者には縁遠い私ですが、40年に亘って描き続けた教科書や図鑑・辞典・絵本の絵が勝手に子どもの教育と深い係わりを持っていました。そしてそのことは大変幸せなことだと感謝しています。

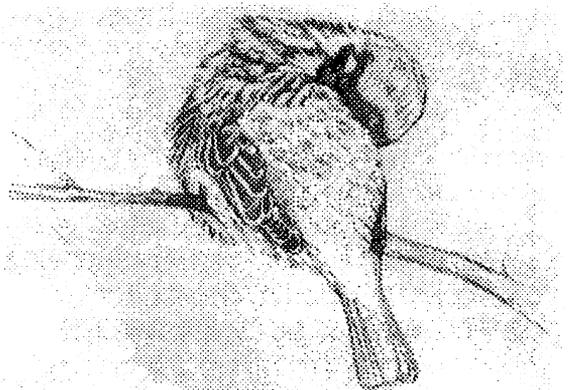
全国愛鳥教育研究会との係わりもまた私の作品からはじまりました。直接的な作業は『身近な野鳥シート』のご依頼が最初です。B5判面にスズメを主体にした5種類の野鳥を実物大に描くものでした。

生物を平面上に描いて実物大に見せるということは、実は案外厄介な注文なのです。植物や昆虫のように実物標本を机上に置いて実測しながら描いても、確かに計れば正しいのですが、色や陰影の加減、あるいはバックの状況で大きく見えたり、逆に小さく見える(この場合のほうが多い)ことが普通なので、ラフスケッチでも必ず彩色を施して、実感

としての実物大に微調整しなくてはなりません。実感としての実物大がまた人それぞれという部分があって、厄介でいいかげんなものですから悩みは最後まで残ることになります。完成のあいまいな大変拙い仕事振りですが、熱意は失っていないつもりですので、今後共宜しくご指導を賜わりたく存じます。

記念すべき機関誌に駄文の参加をお許し頂きまして有難うございました。

(画家)



第50号に寄せて

全国愛鳥教育研究会—発足当時の背景—

松田道生

日本鳥類保護連盟の活動

私が(財)日本鳥類保護連盟(以下、連盟)に入るきっかけを作ってくれたのは、お亡くなりされた高野伸二さんだった。たしか『私たちの自然』の発送のアルバイトの時に、「連盟の職員にならないか」ととつぜん話をされた。私は「同年代の鳥仲間にもっと熱心で鳥に詳しいものもいるのに、私ごときものでいいのか。」と、たずねたのを覚えている。

高野さんは、当時理事長だった「山階芳麿先生が、学校教育の中で野鳥の保護の思想の普及をはかりたいという意向がある。趣味で野鳥をやっているものでなく保護運動をやっている君に頼みたい。」といわれた。

私が「千葉の干潟を守る会」で仲間とともに署名運動や自然観察会を指導していたことを認めてくれたのだろう。給料の安いことが少し心配だったが、自分のやりたい自然保護を仕事にできるということで翌日には了解の返事をしたと思う。だから面接だけで試験はなかった。

1972年4月、連盟に入ってみると会員の管理から雑誌の編集、そして当時は全国干潟の調査に追われた。そうこうしている内に、あっという間に数年が経ってしまった。いつかなくてはいけない仕事として、私の頭のなかには高野さんがいわれた「学校教育の中で野鳥保護の普及」が、絶えずひっかかっていた。

連盟の目的は「野生鳥類の保護の思想の啓蒙」である。そのため、愛鳥週間の「野鳥保護のつどい」や「鳥獣保護実績発表大会」などの行事を主催してきた。

私も一時編集に携わった機関誌の『私たちの自然』は、この目的を色濃く表していた。創刊は1960年11月。B5判、12ページ。当時としては、写真やイラストが豊富なグラビア印刷で豪華な印象がある。そして、隔月に『私たちの自然』リーダー用として『CONSERVATION教育』を発行していた。この頃は、愛鳥教育という言葉は見あたらず"CONSERVATION教育"という言葉で語られている。CONSERVATION=保護ということだが、現在

はPROTECTION=保全という考え方をする方が多くなった。しかし、当時は保護という言葉が一般的だった。

『CONSERVATION教育』は、6号で「月報」というタイトルになるが、"CONSERVATION教育"というコーナーが設けられ「鳥の野外での見分け方」などが連載されてる。本誌は子供向き、月報は教師などリーダー向きと差別化されていた。

これらの経緯は、『私たちの自然—400号記念号』に寄せられた創刊に関わった編集委員の方々の原稿からもうかがえる。当時、編集委員は10名ほど任命されていた。なかでも、教師経験もある横須賀博物館の柴田敏隆さん、鎌倉高校(後に新羽高校)教諭の金田平さん、自由学園教師の吉良幸世さん、自然教育園の千羽晋示さんと矢野亮さんが中心で、この5名の先生方は編集会議には必ず出席していた。

編集会議は月1回、水曜日の午後6時から9時。渋谷区南平台にあった山階鳥類研究所の1階にあった連盟事務所で行われた。当然、皆さんのお仕事を終えてからの会議である。柴田さん、金田さんとも遠方に関わらず、よほどのことがない限り遅くなくても駆けつけられ会議に参加された。

結果として、連盟の保護活動の理念や実際の活動は、この編集会議で議論され『私たちの自然』を通じアピールされていた。とくに、当時あった「論説」欄については会議時間の半分を費やすほど議論したこともある。

そして、陳情を行うなどの事務的なアクションを私など職員が行った。今思えば、編集会議は私にとっては勉強の場であったが、連盟にとっては重要な意志決定機関であった。なぜ、長々とこのような『私たちの自然』の編集会議について書くのかというと、愛鳥教育研究会(以下、研究会)の構想も編集会議の話題の中で語られ、ここから誕生したといっても過言でないからだ。

『愛鳥教育』という言葉の登場

ところで、「愛鳥教育」という言葉を使ったのは誰か、ご存じだろうか。私も気になって『私たちの

自然』を創刊号からざっと目を通した。初期の頃は、前述のように"CONSERVATION教育"という言葉で語られている。

愛鳥教育という言葉が『私たちの自然』に、初めて活字として現れたのは、1964年5月号の「愛鳥週間の行事」というタイトルの論説の中である。書かれたのは高野伸二さんである。主旨は、第18回愛鳥週を迎えたにあたっての意見。行事が巣箱かけだけであることを嘆き、それ以外にもできるいろいろな活動の例を紹介している。とくに、実のなる木を植えて愛鳥林を作れば、野鳥と植物などとの関係がわかり「愛鳥教育のみならず理科教育にもよい材料を提供し」、林ができれば実際に野鳥の保護になるというものである。

まだ職員でなかった私には、なぜこの号で突然、CONSERVATION教育から愛鳥教育という言葉を使用し始めたのかはわからないが、論説のなかで、愛鳥週間、愛鳥クラブ、愛鳥林と愛鳥が並んだ筆の勢いで愛鳥教育と使ったのであろう。それほど深い意味はないと思う。いずれにしても、愛鳥教育という言葉を使って、連盟が語り始めたのはこの時期である。私が職員として働き始めた頃は、すでにCONSERVATION教育という言葉はあまり聞くことはなく、編集会議では愛鳥教育という言葉で議論されていた。

なお、『私たちの自然』以外では、日本鳥学会誌の『鳥』1958年の13巻(64号)に「わが校の愛鳥教育」合岩中学校愛鳥会という記事がある。残念ながら未見であるが、その後学会誌にはこれに関連した記事はない。

また、『私たちの自然』の1969年8月号には「福井県の愛鳥教育研究会」という1ページの記事がある。これには、会則、活動方針、活動目標、行事計画が紹介されている。活動目標には「教育課程の中で、愛鳥教育・自然保護教育の徹底をはかろう」などが目を引く。この前書きのなかで「各県に愛鳥教育研究会が誕生し、全国愛鳥教育研究会といった組織ができればこれは大きな力になるにちがいない。」という一文があり、福井県愛鳥教育研究会の活動目標のひとつには「愛鳥教育団体の全国組織の結成のよびかけをしよう」が目を引く。

このように、愛鳥教育の普及は1961年の『私たちの自然』の創刊の時から連盟にあり、研究会の全国組織の構想は、私が就職する2年前の1969年にすでにあったのだ。

ちなみに、1969年より日本自転車振興会の補助を受けて、愛鳥モデル校に『私たちの自然』を無償配布をしていた。経済的な理由もあるが、学校への働きかけがより具体的になったのもこの頃である。

当時の自然保護の状況

1960年代から1970年当時の野鳥や自然保護の状況をざっと述べておこう。

世情は、学生運動が華やかな頃。いわゆる団塊の世代が学生だった時代。経済は、高度成長時代のピークを迎えつつあり、その弊害として水俣病、川崎喘息、四日市喘息など公害が表面化した。また、むつ小川原、志布志などの巨大開発プロジェクト、東京湾の埋め立て計画、富士スバルライン、スーパー林道などの山岳道路の開通や計画などの自然破壊が表面化してきた時でもある。このような現状の中で、自然保護の運動も各地で行われ「〇〇を守る会」が問題の地域に発足し活動がさかんに行われた時でもある。

国では、1971年に環境庁が設置され、民間では、各地の保護団体の連絡組織として全国自然保護連合が発足したのもこの年である。

今では考えられないが、私の学生時代には中西悟堂を先頭に都内をデモ行進をしたこともある。この集会には、当時の美濃部亮吉都知事も参加して檄を飛ばしてくれた。

連盟は1958年にすでに財団化されていたが、日本野鳥の会は任意団体、中西悟堂を中心とする同人会的な要素が大きかった。その当時、日本野鳥の会は、渋谷区南平台の山階鳥類研究所の1室を借りていた連盟のさらに机ひとつを借り、週に2回、ボランティアの方が会費の整理などをしにきていた。活動には、当時連盟事務局にいた高野伸二さんらもお手伝いをしていた。

この日本野鳥の会も1971年に財団化され事務所を設置し事務局員を雇い、自然保護団体として本格的に活動を始めた。(財)日本野鳥の会の事務所発足時、私は大学4年生で、事務所では会報の発送や陳情書の手配、署名運動などの活動のボランティアとして出入りしていた。狭い事務所は、いつも若者たちの熱気であふれていた。今思えば、わけもわからないでよく活動したものだと思う。しかし、最初に書いたようにここへ出入りしていたのが縁で連盟に就職できたわけだ。

さて、日本野鳥の会の活動の中でも、1977年頃か

ら提案されたサンクチュアリ運動は日本の自然保護運動に大きな転機をもたらした。それまで、自然保護運動といえば反対運動というイメージが強かった。それが、自分たちで金を集め自分たちで自然を管理保護していくという積極的な提案であった。そして、建設費を一般から募金し土木作業のボランティアの協力などを得て、1981年にウトナイ湖のほりに民間としては第1号の施設を開設するにいたる。

この流れの中で、連盟としてもより積極的に保護活動をしなくてはならないという機運が盛り上がってきた時でもある。私自身、就職して5～6年、多少の経験を経て何ができる、何ができないがわかるようになった頃でもある。

そして、愛鳥教育の問題は編集会議で討議され、結論としてまず『私たちの自然』の誌上で愛鳥教育の問題を積極的に取り組もうということになった。

たとえば当時の記事を紹介すると、1978年10月号の自然の教室で「愛鳥モデル校になったら」(柴田敏隆)、また記事では愛鳥モデル校へのアンケートをもとに「今、指定校で一愛鳥モデル校の現状と問題点」(無記名だが書いたのは私)。それを受けて、12月のろんせつで「愛鳥モデル校」(金田平)。1979年のろんせつでは「愛鳥モデル校ふたたび」(金田平)、9月号の記事で「愛鳥モデル校の活動・熊本県」、10月号には愛鳥モデル校の報告の「スズメの死」などを『私たちの自然』は広いスペースをとって掲載した。

こうして、連盟が愛鳥教育に取り組む姿勢のレーンが敷かれていった。

下田澄子先生のご意向

そして、もうひとつ研究会の発足に大きな役割を果たしたのが、下田澄子先生のご存在である。先生は、戸倉小学校校長として長年、愛鳥教育に取り組まれてきた。この功績が認められ、1979年に愛鳥週間の功労者として日本鳥類保護連盟総裁賞を受賞している。

先生が、研究会の発足に大きな影響を与えたことは、数え切れないくらいたくさんある。その中でも受賞による賞金を研究会の発足にあたっての活動資金に寄付するという意向は、連盟事務局や私自身に大きな刺激となった。

そして、『愛鳥教育研究会』の発足。第1回の会合は、1980年5月17日。当時、渋谷区南平台にあつ

た山階鳥類研究所の3階の講堂で行われた。下田先生の発足主旨の説明と柴田敏隆さんの愛鳥活動の実践のヒントの講演、そして、その後の懇談会というスケジュールであった。……と思うのだが、裏方で雑用に追われていた私は、実際何を話し話されたか、当日の天気さえ残念ながら記憶にないのだ。

先生のお住まいのある羽村から渋谷までかなりの距離ではあるが、発足の準備、さらに発足以後も連盟の事務所には、少なくとも月1回通われていた。

とくに、会合や研究会の実施される前後は毎週のように来られ、打ち合わせを重ねていた。手紙の発送などの事務仕事は、連盟事務局の女性職員が補佐をしていたと思うが、先生自らも宛名書きから切手貼りまで行っていたのを覚えている。

私は、バードカービングの普及、カレンダーの販売などの収益事業に関わることが多く、直接愛鳥教育の仕事には関わっていなかった。しかし、狭い事務所のこと、何がどう動いているかは皆伝わってくる。そのため、私の関わっているバードカービングを学校で実際に試してもらったり、カレンダーを愛鳥モデル校に無料配布したりして、少しでも役立ててもらおうと努力した。そんな時、気楽に相談できる先生の存在はありがたかった。

また、主な仕事の一つであった『私たちの自然』の編集を通じ、愛鳥教育の記事の企画や原稿の依頼により、打ち合わせすることも少なくなかった。先生に接し、先生の素朴な人柄と愛鳥教育にかける熱意は今でも忘れることができない。

愛鳥教育研究会へ

研究会の発足に至っては、これ以外にも多くの事柄が上げられる。たとえば、多数の愛鳥モデル校の先生方のご尽力と交流は、上げればきりが無い。これらの方々の多くは、発足当時の『愛鳥教育』に寄稿されている方が多いので、ご覧いただければ幸いです。また、県の鳥獣保護担当者などからの助言もあった。もちろん、私以外の連盟職員の方々の尽力、連盟の企画委員会の先生方へのアドバイスもあった。また、サントリー株式会社の「愛鳥キャンペーン」の様々な活動も大きく影響している。このようないろいろな方々の努力結果の発足であった。

私事と思ひ出話の入り交じった話で恐縮であるが、1970年～1980年代にかけての研究会の発足時の背景と経緯を述べた。私にとっては、発足以後に

行われた研修会も忘れることができない。とくに1983年6月5日の日光にて行われた自然観察会のように野鳥も人も輝いていた日はそうないだろう。今後の愛鳥教育の発展のためには、流れを知り、

流れを見る必要があるだろう。今後、環境問題のトレンドの中で、愛鳥教育をどう発展させていくかを考えていただくための参考になれば幸いである。
(元(財)日本鳥類保護連盟職員)

愛鳥教育 50号に寄せて

齋藤 一 紀

愛鳥教育創刊50号、おめでとうございます。

私が愛鳥教育研究会の活動に関わったのは、(財)日本鳥類保護連盟に在職した5年間という短い期間の中の数年ではありましたが、ちょうど愛鳥教育研究会発足当初から仕事の一部として携わることができ、私個人にとっても大変に思い入れの深い会になっております。残念ながら、連盟退職後は愛研の活動に参加することもなく、十数年が経過してしまい、発足当時の中心メンバーの何人かの方は既に亡くなられたり、教員を定年退職されたりして、全くお会いする機会も無くなってしまい、誠に残念に思っております。

私は、連盟退職後は、山梨県の八ヶ岳山麓にある清里に移り住み、“萌木の村”というグループの中で、野鳥と野生動物に関する商品の専門店“BIRD HOUSE”を営みながら、バードウォッチングのガイドや環境教育に関わりながら生活を致しております。愛鳥教育研究会と共通する活動を少なからず行っているわけですので、貴会と協力し合っ、様々な活動を展開することも可能であると思えます。

私は、愛鳥教育というものを自然保護運動の基本的活動の一部であると考えています。そして、愛鳥教育研究会は、愛鳥活動を通じて野鳥保護思想の普及と啓蒙を目的としている(財)日本鳥類保護連盟にとって、連盟設立の主旨に沿った活動を行っているわけです。それゆえ、愛鳥教育研究会は、連盟において大変重要な活動を担っていると思えます。

現在の連盟の中での愛鳥教育研究会の位置付けはどのようなものなのか存じません。しかし、連盟はもっと貴会を重要な団体として認識すべきであると思えます。それは、担当職員として連盟在職中に愛研の仕事にもっと力を入れておくべきであったと、今になっても私自身悔やまれるところでもありま

す。そして、退職後も何のお手伝いもしていなかったことについて反省をしております。

今後の愛鳥教育研究会の在り方や方針については、諸般の事情に左右されることもあるかもしれませんが、この場で私が意見を申し上げたところで何の参考にもならないと思いますので、こう在るべきであるなどと申し上げるつもりはありません。しかしながら、発足当時の会の主旨に沿った方針で活動を行うことは、地味ではありますが欠くことのできないことであると考えております。どうぞ「継続は力」という言葉のように、今後も地道な活動を続けていっていただきたいと思えます。私も、微力ながら、愛鳥教育研究会のお役に立てるよう、お手伝いをさせていただきたく所存です。

愛鳥教育研究会の活動並びに愛鳥教育の発行が未長く継続して行われ、貴会が益々発展されますことをお祈り申し上げます。

(元(財)日本鳥類保護連盟職員)

第50号に寄せて

愛鳥教育研究会発足のころと戸倉小学校の今昔

常務理事 梅 本 登

1. 愛鳥教育研究会発足まで

愛鳥教育研究会発足当時の様子を書いて欲しいとの依頼を受けたが、すでに16年もたっている。資料も残っていない中でどの程度まで、と心配した。事務局から「愛鳥教育」の創刊号と2号を送っていただき、目を通してみた。1ページには、田村活三先生の会長挨拶、故下田澄子先生の「発会式報告」という文章がある。それらの中で、私の記憶と一致する所は、「～集まることは少なく、実践内容をお互いに知らせあうこと、優れた活動内容を多く普及すること」というところである。それ以外は改めて、「そうであったか」と納得する以外にない。

準備から細部の計画運営については、当時の戸倉小学校教頭・木下守先生、日本鳥類保護連盟の柳澤紀夫先生のご努力による所が大であった。全国各地でご活躍されている方々に役員をお願いをすること、案内状の作成や発送、会則の作成など「教頭」という大変多忙な職務でありながら進められたご努力に対して改めて敬意の念を厚くするものである。

さて、愛鳥教育研究会が発足するまでの経緯は故下田澄子先生の文章の通りであるが、その話が持ち上がったきっかけについて少し記しておきたいと思う。

昭和54年11月30日、全国鳥獣保護実績発表大会が環境庁で行われた。戸倉小学校は東京都の代表として参加し、環境庁長官賞を受けた。その反省会の中で私が、「全国組織を作ったらどうか」という考えを述べた。そこに下田澄子校長も同席していたと思う。後で「梅本さん、やる気はあるの」と念を押された記憶が残っている。それから準備が始まり、翌年5月の発会式開催となったわけである。今、思い返してみると、一教諭の立場で、単なる思いつきだけで、全国組織などという大それたことをよく言えたもの、と赤面のいたりである。それより、都道府県単位で連絡会のような組織をまず作り、それからその代表者をもって全国組織という形にするのが手順ではなかったかと考えている。

以上のような経緯でスタートしたと記憶しているが、何分にも少ない資料と薄らいできた記憶なの

で、定かではない。

いずれにしても本会が多くの課題をもちながらも継続していることは、江袋島吉会長先生はじめ事務局の皆様のご多大なご尽力によることが大である。深く感謝申し上げる次第である。

2. 戸倉小学校の愛鳥教育活動の今昔

(1) 愛鳥モデル校の指定から道徳教育研究発表までもしも戸倉小学校が、昭和54年11月に環境庁長官賞を受賞しなかったら、本会の発足は無かつたのではないか、という言い過ぎになるだろうか。

愛鳥モデル校の指定から来年でちょうど30周年を迎えようとしている。この間、多くの子どもたちが野鳥に親しみ、それを誇りにして戸倉小学校を巣立っていった。今、成人して社会で活躍している人たちも、野鳥に親しんだ経験を通して環境問題を考えているにちがいないと信じている。30年になる愛鳥モデル校の今昔を記し、皆様のお役に立てればと思う。

戸倉小学校では、昭和40年ごろから小峰敏雄教諭を中心とした活動を学校全体で支え、子どもたちの生活指導に生かしていた。それが認められ、東京都の愛鳥モデル校に指定された。初めは児童会の委員会活動として進められていた。活動内容としては、巣箱作りやその架設、営巣状況の調査、探鳥会などであった。ここで得られた成果は、全校に知らされ、各学年の活動に生かされていった。

各学年もそれぞれ、担任の裁量で野鳥についての学習を進めていた。これらの活動をまとめて文部省へき地教育研究指定校となり、道徳の研究発表をした。ここまでが戸倉小学校愛鳥教育活動の第1次と言えよう。

(2) 教育課程への位置づけ

昭和50年度から58年度までを愛鳥教育活動の第2次と位置づける。そこで特筆しておくことは、次の3点である。①委員会活動から各学年の活動へと広げていったこと。②各学年ごとの指導計画を作成したこと。③指導要領の改訂に伴い「ゆとりの時

間]ができ、そのうちの1時間を「はばたきの時間」として週時程に位置づけたこと。

教育課程に位置づけ、毎週、全学年が土曜日に1校時にそろって「はばたきの時間」を進めていることは現在も続けられている。しかし、学校週5日制により、その扱いも再考を迫られている。

このように教育計画の中に全学年の活動を位置づけることにより、だれでもが関わり、活動を積み上げていけるようになった。毎学期行われる自由研究発表会も充実した活動となっている。

子どもたちの学習の成果というものは、「日常性」「継続性」という中でより多く得られるものと考ええる。その面で週時程に位置づけ、継続的に全児童が野鳥に親しむという形は、たいへん大事なことと考えている。

このように進めるには、核になる人と年間の指導計画の整備、多くの研究資料が必要である。この年間計画については、本誌「愛鳥教育」の創刊号にも紹介されているのでご覧いただきたい。

(3) 愛鳥教育活動のこれから

昭和59年度から平成6年度頃までを第3次の段階と考えている。この時期は見直しの時期である。

昭和55年に「はばたきの時間」として教育課程に位置づけられた活動も、様々な変化の中で「見直し」の必要に迫られてきた。特に社会全体が、環境問題を大きな課題にするようになってきた時期でもある。そこで「はばたきの時間」もより豊かな自然体験を重視しようということになり、指導計画の改訂をする運びとなった。

平成元年度、校内研修のテーマに位置づけ、全職員で研修を進めた。見直しの視点は、①より多様な活動を進めるため、テーマ集的な内容をもりこむこと、②調査研究をより深めること、③多様な素材を教材化するものの3点であった。この研修で得られたものは、現在も使用されている。

(4) 今後へ向けて

昭和42年に始まった戸倉小学校の愛鳥教育活動も来年で30周年を迎えようとしている。その間、地域保護者、日本鳥類保護連盟、日本野鳥の会、東京都経済局など関係諸機関の方々に多くのご指導ご援助をいただいたこと、深く感謝申し上げる次第である。

この活動が戸倉小学校の中心的な教育活動とな

り、子どもたちに多大な自信と安定感を与えたことは広く認められていることと信じている。今後、平成元年度の研究紀要にも述べられているように、「環境教育」の中核として位置づけられ、全教育活動の中で進められることが大切であると考えている。

文部省刊「環境教育指導資料」では、環境教育の基本的な考え方として5項目をあげている。それらをまとめて3点にしぼると、①豊かな感受性を育成する、②活動や体験を重視する、③身近な問題を重視する、ということになる。①について簡単にふれると、「環境教育は、幼児から高齢者まで、全世代に対して体系的に行われなければならない。特に幼児童期には、自然との触れあいを多くし、子どものみずみずしい感受性を養っておく必要性がある。」ということである。

戸倉小学校の愛鳥教育活動がこれらを指針としますますされるように心より願うものである。

以上、愛鳥教育研究会の発足当時から戸倉小学校の現在までを記してきましたが、皆様方の参考になれば幸いに存じます。

特集 自然教育園を造ろう

「自然教育園」について

常務理事 平田 寛重

今回は、50号記念ということで、環境教育及び愛鳥教育の場の設定に不可欠である自然教育園についての特集を組んだ。

環境教育で最も大切なことは、自然理解である。そのための学習施設として、自然教育園は、自然とのふれあいを通して自然への関心を高め、自然への想いを引き出し、自然観察を通して自然界のつながりを学習し自然のしくみをとらえる場として適切なものである。

本来は、学校周辺に自然学習ができる適当な場があればそれに越したことはないが、そうそう恵まれている学校は少ない。また、たとえ恵まれていても、移動の時間や安全指導等により注意を払わなければならない、外出のための手続きがネックになる場合もある。

このようなことから、校庭内に自然教育園があることは必要不可欠な条件となってくる。

従来、学校林、野鳥の森、樹木園、・・・の森、グリーンベルト、トンボ池、生態園、ミニサンクチュアリ等、いろいろな試みが行われてきた。それに加えて、ここ5・6年の間で、ピオトープやエコアップという言葉も使われるようになり、自然教育園の造成の際、潜在自然環境の復元をメインに行う所も出てきた。また、都市部では、まとまった緑(学習施設としての多様な自然環境)がどんどん減少していくため、それぞれの学校が自然教育園を造り、それを回廊(コリドー)のようにつなげることによって、結果として都市全体の自然環境が豊かになっていく可能性が示されてもきている。

これらの方法上の工夫に加え、学校設置基準や条例等で自然教育園の設置の義務化や校庭の緑被率の基準などを定めることができるならば、学校内での自然環境の一層の充実が図れるものと思われる。

1. 自然教育園の形態について

形態は、いろいろと考えられるが、最も望ましいタイプは、水辺(池)を含む生態園である。これは、多様な環境を創り出すことによって、その環境を生息場所とする生物が集まり多様な種が構成され、そ

れらの種同士のつながりがより複雑になり、自然界の神秘さやおもしろさを実感することができるからである。小さくてもかまわないが、池を教育園の中に組み込むことは、重要なことである。

次には、森づくりが考えられる。「・・・の森」というように学校の記念事業等で造成される場合が多く、樹木見本園、郷土の森、雑木林等いろいろ取り組まれているが、環境教育としては、学習施設、遊び場の両面で考えることが望ましい。子どもが森で木登りや落ち葉遊びなどを通して自然とふれあうこと、植物や動物を通して自然のしくみを学ぶことを授業時間や休み時間に行えることが大事である。植木屋の趣味で造られ、庭園として管理される森では、自然学習をする上での意味は少ない。自然にふれあい、自然のしくみを学ぶことが目的であるので、当然、郷土の自然環境を反映した樹種で構成してこそ意味が出てくるのである。見栄えがよいというだけのことで、郷土の山や森で見かけない他の地方の種や外国の種を植えることは控えなければならない。

その次に考えられるのは、草地である。陽がよく当たり昆虫や鳥が来るような植物があり、石積みや木積みを造り、小動物の生息環境を確保していくことも必要である。

最後に考えておきたいのは、観察や遊びのための道作りである。ただし、環境が落ち着くまでは、人の出入りを制限する必要があるだろう。また、必要に応じて立ち入り禁止区域も設定することもあり得る。オーバーユースになれば、自然は傷んでしまい、回復に時間がかかってしまう。一般児童は、授業中のみ教師の引率の元に入れるというような消極的な活用にならざるを得ない場合もあるであろう。

さらに、自然教育園の看板や案内図、立て札の設置に加え、観察ポイントの設定、ワークシートづくり等のソフト面の用意も必要になってくるが、担当委員会等を作り、子どもたちと進めていくのが効果的である。

これらの教育園造りは、大げさに言えば、校庭の改造ということにもなる。自分たちの校庭をどうし

たいのか、いろいろな考えやアイデアを吸い上げて、子どもたちと共に教育園造りを進めていくのが望ましい。都会の学校では、校庭のアスファルトをはがして森を作っていた例もある。(ロビン・C・ムーア, 1988)

2. 自然教育園造りの取り組みについて

あまり詳しいことには触れられないが、水辺、森、草地の作り方について簡単に述べることにする。

①水辺について

水辺造りで一番肝心なことは、水源の確保である。その方法のいくつかについて考えてみたい。

水源として一番良いのは、湧き水を利用することである。湧き水を利用して川や池の水辺環境を整備すると、維持管理に費用がかからず、メンテナンスもしやすい。ホタルやトンボ、水生小動物の野外での自然の姿を観察することが可能になってくる。しかし、このように恵まれている学校は、少ないと思える。

次に、考えられるのは、井戸を掘って水源を確保することである。今回の実践例に紹介されている埼玉県の上福岡第七小学校では、この方法を採用している。水を汲み上げるポンプの維持に費用がかかるが、自然水をそのまま利用できるので生き物にもやさしく対応でき、野生生物とのふれあいも期待できる。

その次に、校庭が河川に隣接している環境であるならば、川の水を校庭内に引いてくることも考えられる。これには、利水権が絡むので、簡単にはいかないが、河川改修等の際に、親水公園的な教育施設設置を行政に申し入れ、地域住民も含めて熱心に協議を重ねれば可能になってくる。横浜市戸塚区にある舞岡小学校では、校庭の一部と舞岡川の川岸を一体化して「舞岡川ふれあい広場」と名付け、現実のものとしている。また、東京の国立市にある国立第六小学校では、近くにある矢川をそのまま校庭に引き入れて、教育に活かしている。ただ、国立六小の場合、せつかくの画期的な試みではあるが、管理のためか川の形状が3面コクリート張りになっているのが残念である。(君塚 1992)

次に、雨水の活用も考えられるが、雨水を一時的に蓄えておくタンクのような装置と、そこから池に供給する装置等を用意しないと、継続的な活用は難

しい。

他には、水道水を直接利用することである。この場合、残留塩素の処置や供給量を管理する施設があると使い勝手がよい。いずれにしても、給排水の施設を整備する必要があるので、かなりの予算を必要とする。

水辺及び池の造成については、本格的に取り組むには、予算がかかるものなのでPTAや地域の協力がなければなかなか実現できないが、行政への働きかけやボランティアの労力奉仕等でそれなりの成果は得られると考えられる。

水辺造りには、最近研究が盛んなトンボ池造りを応用するのが、賢いと思われる。そのためには、「生きもののすむ環境づくり(トンボ編)」(養父 1991)が参考になる。

この他にも、予算をほとんどかけないで水辺を造ること方法もある。池だけを造るならば、見てくれはあまりよいとは言えないが、穴を掘って、ビニルやゴムで不透湿の層を造り、荒木田等の水を通しにくい土や落ち葉を載せ、深さに応じた水生植物(養父 1991)を植栽していけばよい。水は、天水のみで干上がるようであれば、水道水を補うようにする。

この程度の池であっても、トンボをはじめとする水生昆虫や、水浴びをするために野鳥が訪れる可能性は高くなる。ただし、無理をせずに気長に待つことである。あせって、よその場所から虫や魚を捕ってきて放すといったことの無いように気をつけたいものである。教材見本園として、魚を入れて、春夏秋冬の生き物の様子を観察しようと考えがちであるが、ここでは、自然に渡来する生物を対象としているので、そこは押さえておきたい点である。また、魚を入れることによって、水生昆虫への捕食圧が高まったり水の富栄養化を招いたりして、生態系がくずれてしまう恐れもある。無理矢理移入した魚を使ってまで授業をする必要はなく、そこに生息している魚以外の動植物でも十分に学習は可能である。昆虫は、飛翔することによって移動ができる。そのことによって生態系を形成していくのである。人為的に外から移入をすることでオーバーユースになり、生態系が攪乱されてしまうこともある。極力、生物の人為的な移入は慎まなければならない。

また、水田を造ることによって、適当な湿地を創り出すことも可能である。その際、稲を育てることと共に水田に生息する動植物も活かすことを視野に

入れて管理を考える必要がある。農薬や除草剤を避け、生物農薬の活用やこまめな手入れをすることによって、生物と稲との共生を目指すように取り組むことが大切である。

②草地・森の造成について

出来上がった池や水辺の周辺に、開放面としての草地と適当な樹木、後背地には森というような環境を造ることによって、異なった環境を設定することができる。草地には、カタバミやセリ科やアブラナ科の植物のようにチョウの幼虫の食草になるもの、イネ科植物のように種子が鳥たちの餌になるもの、ツツジ・ノイバラ・ウツギ・リョウブ・クサギなど昆虫類の食草になる低木類、フェンスがあれば、ヤブカラシやツルウメモドキなどのツル植物を絡ませれば、鳥や昆虫が訪れ、食事をするができる。土さえ肥えていれば、自然に雑草が生え、環境の様子は豊かになってくる。

また、森は、目的によって植栽する樹種が変わってくるが、鳥をはじめとする動物は、餌場、休息場、繁殖場として森を利用する。そのことを考慮して樹種の選定を行うことが大切である。関東地方であれば、クヌギ・ミズキ・カラスザンショウなどの高木を中心に、野鳥の好む実がなるマユミ・ナナカマド・ヤマボウシ等の亜高木、ムラサキシキブ・ガマズミ・サンショウ等の低木、キツタやノブドウ等のツル植物で構成するとよい。基本的には、落葉樹でまとめた雑木林がよい。一部には、常緑樹のイヌツゲ、ヒサカキ、ネズミモチなども入れておくと冬場の鳥たちの隠れ家や餌場にもなる。また、落ち葉や朽ち木などもそのまま活用することにより、土壌動物等の小動物も充実し、土も肥え、小動物を餌にする野鳥の飛来する可能性が高くなる。

森を作る場合は、傾斜が30度前後が作業がしやすい。幅に応じた高さのマウンドを築き(幅が3mくらいだと高さ1mくらいが適当である。水田跡地の場合などは、水はけが悪いので1m位掘り下げて腐植土を混ぜた土を入れよく耕耘する方法が樹木の成長に効果的である。後は、幅に応じて高さを変えていけばよい。)、よく耕した盛土60-100cm厚の上に30cmの腐植土を乗せ、ポット苗などの苗木を植える。その際、低木は高木の周囲を取り囲むように構成する必要がある。その後、表土の流失を防ぐために、敷わらを全面に敷くことも必要である。他に、グランド等の境には、丸太の土止めやグランド

の排水用のU字溝などがあるとよい。(神奈川県みどりのまちかながわ運動推進協議会 1985、山本1996)。

3. 植栽する樹種について

自然教育園を構成する樹種を選定する際に、考えなければならないことは、その地域の潜在植生を基本にすることである。筆者の住む関東南部の平地であれば、シイ・タブ林を主とする照葉樹林となる。東京の目黒にある自然教育園や代々木の明治神宮を思い浮かべていただければ、およそその雰囲気はおわかりいただけることと思う。

しかし、照葉樹林が校庭の一部を覆ってしまうと閉鎖的なイメージができてしまい、暗くじめじめした雰囲気は、あまり好まれないのが実状である。そこで、潜在植生とは異なるが、二次林としての雑木林を想定したほうが、遊び回る子どもたちのイメージに合うのではないかと思う。また、雑木林は、落葉樹が主体なので、葉の落ちる冬場には、太陽の恵みも受けられる。他に、花や実も目立つものが多いし、それを求めに鳥や虫たちも集まってくる。様々な色や形の落ち葉にも魅力がある。

低木や草本類、ツル植物等で藪を造ることも心がけたいことである。藪は多くの小動物のすみかや逃げ場となる。常緑樹でも香りのあるクスやドングリとなるシイやカシの木等もそれなりに活用ができる。

このような工夫をすることで、より多くの生き物が集まる複雑な生態系をつくることができる。

ここで、生態園に生息する動植物を自然観察や自然学習の教材として見るその見方について述べておきたい。

例えば、花であれば色や形、葉であれば色や形、紅葉、春先の新葉の広がり方、葉脈の様子、実であれば色や形、種の色や形、食用の有無、その他には葉や花や茎や実のできる虫こぶ、成長の具合を知るシュート、樹皮、冬芽、葉痕、香り等がポイントとなる。また、キノコやコケの仲間、花や葉や実が集まってくる虫や鳥などもテーマに取り上げることができる。間接的には、根や皮や葉を使って染め物をする事等もおもしろい。また、実や葉は工作や遊びの材料にもなる。このようにいろいろなテーマが考えられる。

このようなことから、樹種を組み合わせを考える時は、年間を通じて花が咲き実のなることを心がけ

たり、野鳥の好む実のなる木を探したり、昆虫が寄ってくる樹液を出す木や餌になる葉や花のある木、子どもが遊べる木の実やドングリや葉……といろいろな立場で考えてみるとよい。

教科書で扱っている種類の樹木については、生態園の雰囲気や乱さない程度であればよいと考えられる。理科をはじめ、生活科や国語などの教科書で出てくる木を実際に見ることができれば、学習意欲も高まるものと思われる。だからと言って、あれもこれもやたらと集める必要はない。常に郷土の生態園という意識を忘れないことが肝要である。

その他、いくつか気をつけるべきことを付け加えておきたい。まず、構成する種については、前述の通り、在等種で構成し、しかも現地でもかなうことに徹することである。それから、アオキなどのように雌雄異株の場合は、オス・メス両方の木を植えないと実がならない。また、陽樹・陰樹といった性格や植える時期を考慮して植栽することも必要である。

樹種の選定に際しては、郷土の野生種、在野からの移植にこだわるのが大事である。鳥が来るからと言ってピラカンサ（外国産）を安易に植えたり、見栄えがするからと言ってアメリカハナミズキを選んだり、成長が早いと言ってプラタナスやユリノキを植えるのはどうだろう。チョウが来るからと言ってアペリア・ブツレアなどの外国産の樹を植えてしまうのはどうだろうか。この他にも、当地にはない南方性のマテバシイを植えたり、当地の森を構成する種をわざわざ他の土地から運んでくるといったこともある。

このようなことでは、昔からの郷土の自然を復元し、そこから学ぶことはできない。目的がずれては価値は半減してしまう。従って、鳥やチョウの誘致効果の高いピラカンサやコスモスやヒヤクニチソウ等は、生態園においては植えるのを控えたほうがよい。しかし、チョウを効率よく呼ぶための施設として園芸用の訪花植物を植えることも、身近に見られるという点では効果が高いので、生態園とは別にそのような施設を維持していくことも考えられる。

鳥や昆虫などの小動物たちは、植物が造る環境に応じて生息する。餌場や隠れ家となる環境があれば、やってくるのである。もちろん、街中では、這ったり歩いたりして移動する仲間は難しいが、羽や翼で飛んでくる仲間は期待ができる。水辺があれば、トンボやミズカマキリだってやってくる。鳥の足に

くっついて小さな貝だって移動することができるのである。

樹種については、参考文献等の資料で情報を得るとよい。

4. 広さや規模について

広さは、広いに越したことはないが、設置する状況や土地条件によって異なってくる。トンボを中心に誘致するならば、10×10m程度の広さでも可能である。森を造るならば500㎡前後は欲しい。最低でも幅は3mは欲しい。

フェンス沿いに生け垣の形で幅5m前後のグリーンベルトを造るとすれば、100mで500㎡にもなる。中を樹種や高さの異なる木々で構成し、道も造ればりっぱな自然教育園が出来上がってしまう。土を盛り上げマウンドを造り、穴を掘って池を造り、鳥や虫たちが来る木や草を植えておけば、森は更に豊かさを増していく。

場所の選定は、頭を悩ますところであるが、校庭を見渡して使われていないデッドスペースを探すことから始めるのが一般的である。いらなくなった施設の跡地や人の移動ルートから外れた場所、境界の土手などが考えられる。現状の校庭は、運動場・造園的に整備された庭・駐車場の3つの形態がほとんどである。本来ならば、休み時間をスポーツ以外で過ごせる場所があってもいいはずである。心が安らぎ、和やかな気分になれる場所があるべきである。また、フィールドワークが重要である環境教育では、学習のための自然の施設も当然必要になってくる。昔は運動場がなかったので学校の校庭が運動場になったが、今では遊び回れる山や森がなくなってしまったのでそれを校庭に造る必要が出てきているのではないか。運動場の半分を教育園にしてしまうという大胆な考えもこれからは必要になってくるであろう。また、このくらいの規模であれば、自然の遊び場として遠慮無く使うことができる。

遊んでいるうちにできる自然とのふれあいは、勝つか負けるかのスポーツでは得られない命の分かち合いを感じることができると思われる。特に、これからのコンピュータ世代の子どもたちに「0」か「1」かの選択だけではなく、どちらでもない「2」も「3」も「4」もある世界のあることを、「生命系の理解」も含めて知らせていきたいと考える。

5. 取り組み方及び維持管理について

①取り組み方について

自然教育園造りの取り組み及び進め方については、植原彰氏がその著書「学校で自然観察（植原1993）」の中で、校庭改造の実践例として山梨県の春日井小や牧丘第三小学校の様子を詳しくかつ興味深く紹介している。小さな実践の積み重ねが活かされているよい例である。

取り組みにはいくつかのパターンがある。一般的には、学校の創立記念事業として取り組む形が多い。最近では、環境教育との兼ね合いから、生態園やトンボ池造りなどに取り組む例が増えている。また、自然学習に関心のある教師がリーダーシップを取り、職員が主体的に取り組んでいる例もある。埼玉県では、(財)埼玉県生態系保護協会と県がバックアップをして、ピオトープを取り入れたミニサンクチュアリ造りに取り組んでいる。自然学習に熱心な教員が中心になって取り組む生態園造りも見られる。なかなか事の重要性を理解してもらえず、中心になる教師の移動で、せっかくの施設がお荷物になってしまう学校もある。その対策として地域ぐるみで生態園の維持管理に取り組む方法が検討されている。

②維持管理について

基本的には、周辺に物理的に迷惑をかけない範囲において無剪定で構わない。必要に応じて伐採等を行うが、植生は放っておけば遷移を始めてしまう。複雑な水辺環境を維持するには、夏の間には繁茂した草を刈り取らねばならない。そうしないと、背の低い植物は日光を十分受けられずに枯れてしまう。草木の維持管理は、その自然環境をどの状態で維持するかの取り組み方にかかっている。それは、その教育園の活用の仕方による。好適な雑木林を維持するのにも、それ相応の管理や作業が必要になってくる。土地の状況によっては、毎年、樹木を植え足しながら森を豊かにしていくこともできる。また、枯れてしまった木の更新のために植えることも必要である。

また、人間の側で不要・不快に思っているものに藪がある。藪は、ウグイスやアオジが生息環境として使うことがある。つまり、ウグイスを呼ぶためには、藪が必要であるということになる。ウグイスを呼ぶためにこの藪は必要なんだというアピールをしながら作業を進めていくことが大事である。

枯れ木も、不要で危険なものに思われがちであるが、コゲラが巣穴を掘って営巣することもある。もし、掘っている状況が観察されれば、処分してしまわずに、当分の間は補助材をあてがい、倒れないようにしておけばよい。その間、コゲラの生活を観察することができる。そして、不要になったら、林床に寝かし、小動物の餌や住みかとする。

枯れ草は、種が残っていればホオジロやアトリの仲間の餌になる。落ち葉も堆肥として自然に返すことによって命が循環していく。草も生やしておくことに意味があるのだから抜く必要はない。

維持管理で問題になるのが、景観及び防火・防犯面での対策である。伸び放題になった草や枝を刈り払うよう指示が出された場合、生態園が教育施設として必要であることを所轄官庁や周辺住民によく理解してもらい、教育目的にあった状態を維持できるように日頃から周辺住民等への広報活動を行っていくことも大事である。また、地域住民と共に生態園造りに取り組むとこのような問題から開放される。

他に、草むしりと落ち葉拾いのことがある。とかく、「草はむしるもの」「落ち葉は、集めて燃やすもの」という意識が強いので、その意識の変革を図り、草にも命があること、落ち葉も他のものの養分となってよみがえることを知らせながら、殺風景な校庭を豊かなものに変えていきたいものである。

教育園の運営については、職員、PTA、地域住民、児童会、クラブ活動、委員会活動等から必要と思われる部門を選び出して担当者を決めたり、管理の請け負い方を決めていくとよい。職員のポストがあり、委員会が実際の管理を行う例が多い。東京都杉並区の方南小学校では「武蔵野の森委員会」が維持管理を担当し、新潟県長岡市の川崎小学校では「森のパトロール隊」が森の情報を全校に紹介している。また、クラブ活動の中に、教育園の調査や紹介する内容を取り入れた形も見られる。普及のためには、「教育園だより」や掲示板や観察路マップ、「今月の見所」などの掲示物や配布物を用意して、注目度を持たせることが必要である。

また、「教育園だより」や看板・掲示板「今月の教育園」などを整備していくと、学校周辺地区への普及・PR活動にもなり、児童や来校者への普及にもつながる。そして、児童も父母も地域の人も、教育園に誇りが持てるように取り組めることができれば、更に結構なことである。「教育園は教育施設として無くてはならないもの」という意識を学校内外

の人間が持つように充実した活動を行う必要がある。

学校の職員だけでは維持できない部分は、行政のバックアップや地域の人の協力を仰いで、子どもの自然教育環境の充実のために、自分たちの住むふるさとのために、継続させていく方法を探っていかなければならない。今回紹介する横浜金沢区の大道小学校の例は、そういった意味で大変参考になると思われる。

植木の購入は、保護者や地域の人たちに寄付を募ったり、グリーンマークを活用したり、行政やPTAの援助を仰いだり、児童の自主的な募金活動等によって補充することができる。

6. その他の環境の活用

生態園のように校地の一画にある施設ではなく、身近な場所でも小動物の誘致施設としての役割を果たすことが考えられる。

①屋上

トンボ用の小プール、チョウを呼ぶための吸密植物や幼虫の食草のプランターや鉢植え等を整備することによって、小動物とふれあえる機会を創ることができる。生活科でウサギを飼うことも流行しているが、野生の生き物との関わりも大事である。

②ベランダ

風の対策をしておけば、植木鉢での吸密植物や実のなる木の栽培、ツルウメモドキやヤブカラシなどのつる植物もネットやひも等に絡ませるとおもしろい。少し広ければ、トロ箱にヤゴを入れて飼育することもできる。ヤゴもチョウと同様に飼育後に飛び立つことが確認できる点で、自然とのつながりを感じとらせることができる。

③壁面

キヅタやツルウメモドキ等の実のなる木の仲間を植えることで、少しばかり豊かになっていく。また、ネットを使って、理科教材で使われているアサガオやヘチマやスイトピーなどを絡ませることもできる。

④プール

夏場以外の使用しない期間は、ヤゴを産みやすい環境を用意し、トンボたちに産卵させ、プール掃除前に回収して、個人がヤゴを育てる学習に取り組む

ことができる。ガマなどの葉を浮かせることによって、水面に直接産卵する仲間だけでなく、ギンヤンマのような植物に卵を産みつける仲間が訪れるようにすることができる。

⑤生け垣

高さを変えてサンショウ・カラタチ・ウツギ・リョウブ・クサギ・クヌギ・マユミ（ニシキギ）・ヒサカキ・ガズミ・ムラサキシキブなどを植え、鳥やチョウたちが集まり、身近に見ることが出来るようにしたい。

昆虫の幼虫の食草や成虫の餌や鳥の餌になるような花や葉や実をもつ草木、花や実や紅葉が楽しめる種類などを地域に自生するものから選んで植栽するとよい。

7. 自然教育園の活用について

①自然体験

かなり広い森であれば、子どもたちの遊び場ともなる。落ち葉遊びや穴掘りなどの体験、木登りやターザンごっこなどを通じた活動は、スポーツや人工的な遊具では得られない感性や巧緻性、判断力、創意工夫などの能力が身につく。ただし、小さい森だと復元力が弱く、学習時に活用する程度になってしまう。数人の単位なら大丈夫でも数百の単位になると、森は傷んでしまうことが多い。自然体験を優先するのであれば、かなり広い土地を用意する必要がある。

また、クヌギ林であれば、実生・ひこばえの0年生、6年生、12年生と成長の異なる3つの段階を用意しておけば、子どもが6年間のいずれかの時に伐採して、その材木でクラフトなどに取り組むといった「木とふれあうプログラム」も考えられる。(中川 1989)

②自然学習

低学年の生活科では、遊び的要素が強いが、とにかく中に入って時間を過ごすのがよい。木に登ったり、落ち葉で遊んだり、四季を通じて定期的に自然とふれあう時間を確保することが大事である。あるがままの自然を五感を通して感じる事が大事である。教師が何もしなくても、自然が十分に教師の役目を果たしてくれる。

理科の学習では、3年の昆虫、4年の季節ごよみ、5年の水生生物などの単元で、教育園を活用し

て学習が行える。学習の方法としては、観察をメインにして、スケッチや文章記述によってその観察内容を客観化し、それぞれの生物のつながりや生い立ちを考えていくようにする。また、テーマを与えることで、自分なりにそれについて探したり調べたりするようになり、自分なりの考えを引き出すといったこともできる。

現行の理科の教科書では、学習指導要領で触れられている自然とのふれあいについての記載が不十分なので、学校独自にプログラムを作って実践していく必要がある。

活動の目的としては、感性の育成と自然への想いを高めること、そして、自然のしくみについての理解を深めることが挙げられる。そのために、学年毎に、教育園で月1回程度の計画でテーマを持って自然学習をしていくことが必要になってくる。そして、その積み重ねが6年の環境学習の単元で生かされることになる。

下表は大阪教育大学附属池田小学校の「身近な自然とのふれあい」の4・6年生の年間計画（大阪教育大附属池田小学校1992）の一部である。校庭での活動例として紹介しておく。

8. 実践例の紹介

では、この後、井戸を掘り水源にして水辺を含む生態園を造った埼玉県上福岡第七小学校、創立50周年記念に古井戸を活用してトンボ池を造った横浜市金沢区の大道小学校、校舎改築の記念事業として取り組み「ふるさとの森」を造った新潟県長岡市立川崎小学校、学校創立時の記念事業として取り組んだ学校林を持つ神奈川県厚木西高等学校の実践例を紹介していくことにする。

なお、「愛鳥教育 No. 39」には、旧水田の環境に新設された学校で、校庭の一角にまとめて設置されていた遊具を分散し、その跡地に「形北の森」を造り、自然学習に活用した愛知県蒲郡市の形原北小学校、校庭の裏山の神社林を借り受け「きじっ子の森」として、環境教育の授業に活用している同じ蒲郡市の西浦小学校の様子が紹介されているので、併せてお読みいただければと思う。

題 材 名	
月	4 年
4	お花見をしよう
5	プールの生き物を調べよう
6	やごを育てよう
7	パス
9	木の実をさがそう
10	木の子どもをさがそう
11	木と鳥のつながり
12	パス
1	鳥を呼ぼう
2	春の兆しをさがそう
3	冬芽の変化を調べよう
	6 年
	樹木の花の観察
	草木の発芽さがし
	マツとスギの花粉の観察
	校庭での変形菌さがし
	校庭の樹木散歩
	校庭のキノコさがし
	樹木の紅葉・落葉のしかた
	校庭の樹木の種をまこう
	校庭の樹木の樹形の観察
	冬芽の観察
	早春を告げる樹木たち

特集 自然教育園を造ろう

学校ビオトープ

上福岡市立第七小学校 佐藤 邦彦

上福岡市は、埼玉県の中でも東京都に近い位置にあり、ベッドタウンとして発展してきた。面積は約7km²で人口も約6万人弱という小さな市である。市の東部を流れる新河岸川は、昔は江戸と川越等を結ぶ重要な舟運の航路であった歴史を持っている。この中に小学校が7校と中学校が3校、公立の高等学校が1校設置されている。

本校は、市の東南部の位置にある。駅や中心街からはかなり離れており、農村地区といってよい。学校の東・西・南面は畑と田圃に囲まれ、北面の一部に住宅地がある。また、すぐ近くには神社が境内林をもっており、秋にはドングリひろいの場所ともなっている。

第7小学校は小規模校である。学級数が10で、児童数は239名となっている。小規模校なりに良さがある。各学年の交流が盛んに行われており、特に清掃時に1年生から6年生までがグループを組んで取り組むことは本校の特徴といえるだろう。

1. ビオトープについて

(1) 概要

学校の敷地内の西側の垣根に添って、全長約70mほどで設置されている。2つの池を1本の川で結ぶ形である。

・池……縦が約20m、横が2.6m～5m、

面積が約70m²

写真1

・池……縦が約5m、横が4m、

面積が約20m²

左下

平成6年

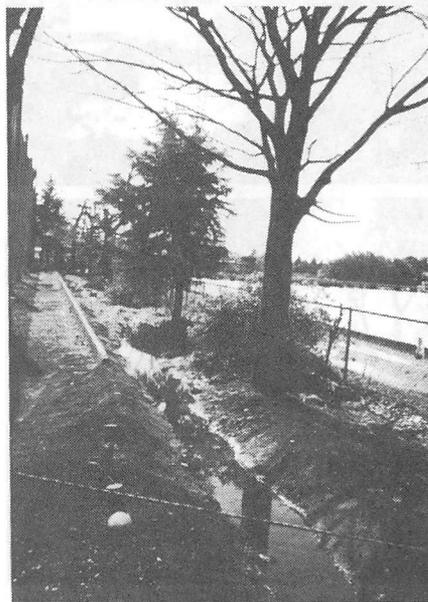


写真2

右上

平成6年

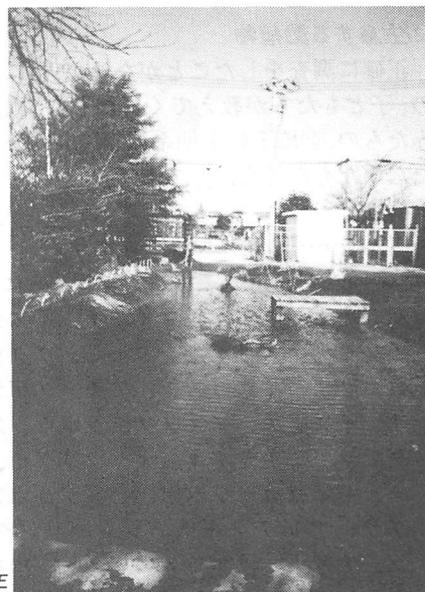
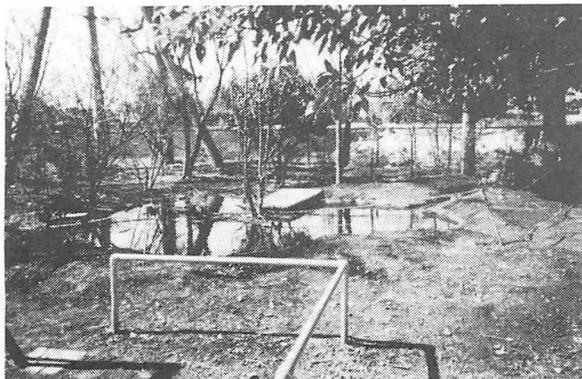


写真3

右下

平成6年

・川……長さが約50m、幅が約50cm

・水源……地下水の汲み上げ

写真は、施工直後（平成6年）のものと、平成8年に撮影したものとのである。

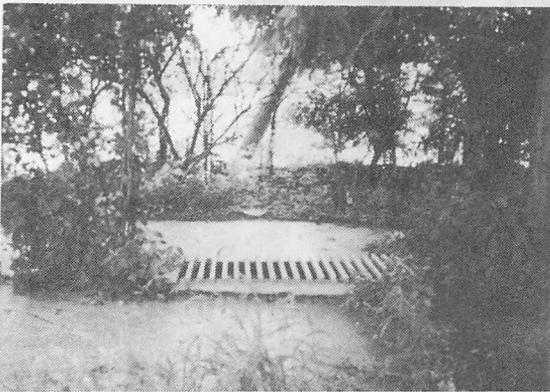
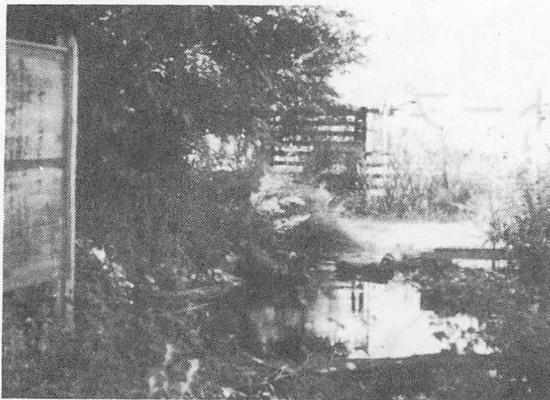


写真4 左上 平成8年 写真5 左下 平成8年



写真6 右 平成8年

(2)生息する動植物

正確に調査をしたことがないが、目に止まったもの、子どもたちが教えてくれたもの、職員が調べてみたもの、(財)埼玉県生態系保護協会の方に教えていただいたもの等を記しておく。

①植物

- ・移入種……ヒメガマ、ウキクサ
- ・自然発生種……ヨモギ、シロザ、メヒシバ、アカザ、オオバコ、オシロイバナ、イヌタデ、オオイヌタデ、ヒメムカシヨモギ、ブタクサ、エノコログサ、イノコズチ、アキノノゲシ、ツユクサ、イヌビエ、スズメノテッポウ、スズメノカタビラ、ミチヤナギ、カヤツリグサ、カモジグサ、セイヨウタンポポ、ヒメジョオン、ハハコグサ、アレチノギク、ジシバリ、ヘクソカズラ、ナズナ、オオイヌノフグリ、オオマツヨイグサ、カラスノエンドウ、カタバミ、タケニグサ、ヒメスイバ、ヤマノイモ、アオミドロ

②動物

- ・移入種……フナ、タナゴ、メダカ、ヘイケボタ

ル、タニシ等

※等としたのは、子どもたちが入れるものは完全にチェックできてはいないからである。ただし、ブラックバスやコイ等も持ってきた時には、訳を話して断っている。コイやブラックバスは全てのものを食べ尽くすし、外国種は極力入れないようにしている

- ・自然発生種 トンボ(ヤゴ)、カエル(卵)、ガムシ、アメンボ、カマキリ、バッタ、テントウムシ、コオロギ、イナゴ、アオマツムシ、タテハチョウ、モンシロチョウ、ツバメシジミ
- ・鳥類 カルガモ、キジバト、ツバメ、スズメ、ヒヨドリ、カワラヒワ、モズ、ムクドリ、オナガ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、ハクセキレイ、ツグミ

2. ビオトープ造りのいきさつと場所設定の理由

(1)いきさつについて

先にも述べたが、本校は、農村地区にあり周りは市街化調整区域に指定されていて住宅地はできないので、落ち着いた雰囲気の中にある。校地内も緑が

多い。特に校庭には9本の大きなクスノキの並木があり、一つの景観をかもし出している。

今、自然というものが私たちの生活の周りから消えつつあることは、どなたもご承知のことと思う。人が成長していく過程の中で、どれだけ自然に親しめる経験を持てるかは、その後の人の感性を培う上での大きな要素となっていることも見逃せないことである。また、その経験が危険予知能力をも育てていくことになる。

ビオトープができたころは、低学年がよく川や池に落ちた。保健室では予備の下着を全部使い切っても、まだ足りないという盛況(?)ぶりだった。PTAの会合で「どうにかならないのか。」という苦情をいただいたこともある。しかし、「良い経験なんです。しばらくは洗濯が大変でしょうが。」と対応していたが、そのうちに、川や池に落ちる子はいなくなってしまった。

自然を残せるのは自然があるうちである。その地域地域の自然(一次ものは無理としても二次、三次は存在する)を育て、子ども達の経験の場としようということが職員間で話し合われ、実践に移されたわけである。図面を書いたり、近くのビオトープのある学校を訪問して参考にさせていただいた。また、校区には生態系保護協会上福岡支部長さんがいらっしゃるので、いろいろアドバイスをいただいた。

(2)場所設定の理由について

主な理由としては次のことである。

- ①教材として、また、休み時間・放課後等に使用するのに便利であること。
- ②安全管理の上で職員が目が届く所。
- ③水源を得やすい場所。
- ④電源を容易に引きやすい範囲内であること。
- ⑤水の流れが設計に合うこと。
- ⑥排水の便が容易であること。
- ⑦日向・日陰が適度にあるところ。
- ⑧当然のことであるが校庭利用上、障害にならないこと。
- ⑨深さは子どもたちの水難事故が起きないように配慮すること。
- ⑩移入する場合は、できるだけ上福岡の個有の生物に配慮すること。

3. ビオトープ造りの計画から実施

(1)設計図

自分たちで作ってみたが、富士見市の生態系保護協会である造園業者に相談し、アドバイスを受け、再度設計図を書き直した。この時、思わぬ障害があった。消防署からの話で、校地に緊急車が入る場合、入り口が2ヶ所なければならないということである。計画では1箇所は林にする予定であったが、これがだめになってしまい、計画を変更せざるをえなかった。

(2)予算

学校予算、PTA予算を合わせて約20万円。

市からの補助金が得られれば、県からも同額の補助を受けられる制度があるのだが、時期的に予算申請ができなかった。

仕方なく、手作りのビオトープと銘打っていくことにした。費用は、地下水汲み上げ用ポンプ、井戸枠、給排水用パイプ、井戸用ふた、電気の引き込み工事費等である。

その他、観察台・杭・石などがあるが、これは自治会長さんをお願いして「寄贈願いの回覧板」を各地域で出していただき、補充することができた。また、池はユンボという機械で掘ったわけだが、これも保護者の方が機械を持ち込んで作業をしてくださった。ありがたいことである。

(3)人材

前述のように手作りで進める関係上、できるだけ多くの人に携わってもらうことにした。

- ・6年生児童 卒業制作として取り組んだ。
観察台・虫の楽園・井戸を囲む柵の制作。杭・石・ススキ等の設置。ビオトープの説明板の制作と設置。
- ・全校児童 何等かの形で参加させていった。
池・川の土の踏み固め。余分な土の除去。魚等の移入。
- ・PTA ビオトープの維持管理を主とする。
主に川に添っての草刈り作業。ゴミの処置。花いっぱい運動の中での計画化。
- ・地域、保護者 できるだけ多くの方の参加を望んだ。
井戸掘り技術。土固めの方法。資材の寄贈。ユンボでの池掘り。井戸掘りの協力。
- ・(財)埼玉県生態系保護協会 造成する上で、また、

維持管理上での相談役

上福岡市支部長さん、入間市支部長さん、富士見市支部長さん

- ・職員 井戸掘り、卒業制作指導、池・川の維持管理、授業での教材化。
- ・他校の職員 土地の高低を調べ、水の流れを考える必要がある。
土地の測量。

(4)水源の確保について

ビニルシートを使わずに池や川に常に水を満たしておくためには、常時水を補給しなければならない。そのために井戸を掘ったわけである。素人が直径1mの穴を掘るといことがいかに大変なことであるかを十分に味わってしまった。幸いにこの地域は地下水位が高く、4mほどで水が吹き出してきた。

排水ポンプを使っても作業が困難になるほどになったので「これでよし」としたが、近所の方が様子を見に来て「これでは夏場には渴れてしまうよ」というアドバイスを受けた。そこで、農園の方に別の方法で掘る人を紹介していただき、教えを受けて7mまで掘り下げたところ砂礫層にぶつかり、「よし」の保証を受けることができた。もう二度とやりたくないと思うほどのつらさだった。

上福岡市では、地下水の汲み上げに制限がある。給水パイプが1インチ以上の場合には1日にどれほどと制限されている。しかし、1インチ以下の場合には制限がない。本校では1インチより細いパイプを使っている。この件に関しては市教育委員会の総務課にお世話になった。

給水すれば排水も必要になる。はじめは自然に土に浸透することにまかせていたが、溢れ出るようになってしまい、これも市をお願いをして校地周りを巡っている雨水専用のU字溝に排水させてもらった。

これでビオトープは最初の池から川、そして最後の池まで水が常に流れるようになり、子どもたちにも安心して水に親しませることができるようになった。しかし、生き物の生息条件を考えると川や池に種々の条件を作り出す必要があり、これが今後の課題ではないかと考えている。

4.維持・管理について

主に携わっている者は、職員、PTAである。し

かし、維持管理といってもビオトープは自然に成長することを見守っているわけであるから、庭園や花壇のようなことを必要としているわけではない。また、子どもたちにも特に役割を持たせているわけではない。

しかし、時々いたずらで池の土手が壊されて水が流されてしまうことがある。小学生らしいいたずらなのであるが、川にいく水が少なくなってしまふこともあり、困っていたが、ある学年に自主的に「ビオトープを守る会」なるものができて、このいたずらを防ぐようになってくれた。おかげで以来、心配もなくなった。おもしろいものである。

5. 授業での取り組みについて

授業のためにビオトープを作ったのではなく、日常的な生活のなかで自然に親しんでくれればという考えが根底にある。しかし、年間計画の中で教材化できることについては多に利用してもらっている。指導の中で知的な面の育成も必要かと考えるからである。

池と川ができて水を流したときのことである。4年生が「野火どめ用水」の学習をした。多摩川からの引水で江戸時代のことである。用水路を掘るには掘ったが水がなかなか流れてこなかったという苦労の話であった。これの教材としてビオトープを利用したわけである。

事実、放水した当時は水がどんどん土に吸い込まれてしまい、なかなか最後の池まで水が届かなかった。それを子どもたちに見させたのである。子どもたちは、以後、毎日、ビオトープに行っては水の進み具合に興味を持って見ていた。この長さのビオトープでもこうなのだということで、子どもたちは「野火どめ用水」の苦労を多少なりとも実感できたようです、と担任は感想を述べていたが、こんな利用の仕方もあるのかと当時は感心したものである。

年間計画の中での位置付けを以下に記しておく。

◇1年生 生活科

4月 単元名「たのしいがっこう」小単元名「ビオトープであそぼう」

目標、指導事項 ビオトープの生き物を見付けたり、周りの草花を摘んだりして楽しむことができる。

6月 単元名「なつがきた」小単元名「どろんこあそび・みずあそび」

目標、指導事項 砂や土や水を使って楽しい遊びをくふうしながら自然に親しむことができる。

12月 単元名「ふゆがきた」小単元名「ふゆのようすをしらべよう」

目標、指導事項 冬の自然の様子を観察して、季節による変化に気付くことができるようにする。

◇2年生 生活科

6月 単元名「生き物を飼おう」小単元名「ビオトープの生き物を観察しよう」

目標、指導事項 ビオトープの生き物の様子を知ろう。

10月 単元名「秋を探そう」小単元名「虫さがしをしよう」

目標、指導事項 自然に親しみながら虫探しをし、生き物を大切にすることを育てる。

◇4年生 理科

4月 単元名「生き物のくらしと環境」

学習目標 1年間を通して定期的に観察する植物や小動物を決め、観察の計画、記録の計画をたてる。

この単元については、7、12、2月にも同様の扱いがある。

◇5年生 理科

6月 単元名「魚の誕生と育ち」

学習目標 魚のえさとなる水中の微生物について調べることができる。

6. 授業以外の中で

休み時間、放課後、休日などに、虫とりや草花を摘む子どもたちの様子がよく見られる。子どもたちの姿が見えなくなるのは冬場である。

池や川にどんな生き物がいるかをよく知っているのも子どもたちである。今年の春に最後の池にカエルの卵が産み付けられているのを見つけたのも、ヤゴがいることも（教室に持ち帰って羽化を観察し、みんなでトンボを放してやったクラスもある）、カマキリやバッタを捕まえてきたのも子どもたちだった。

理科の教材で使ったヒメダカを川に放したら、すごい数に増え、まさしくメダカの学校の様相を呈した。アメンボもかなりの量で増えている。自然の中の生き物の生命力はすごいということ、子どもたちも実感していると思う。

何か新しい発見があったり、情報があると「ビオトープだより」で全校児童に知らせている。家庭にも持ち帰っているようで、時々、親とはビオトープの話になったりする。

7. 終わりに

学校という中でビオトープのような物の維持は難しいものがある。学校の職員は常に入れ替わっている。そんなことを背景にして、時代時代の価値観や、社会の要請等によって、その物の存在価値が左右されてくることはご承知のことと思う。しかし、地球規模で自然が失われていく現在にあっては、そ

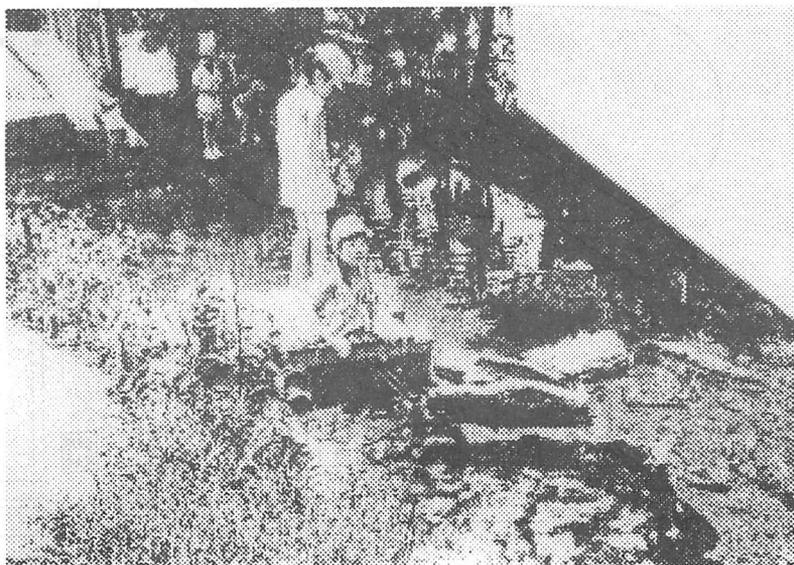


写真7 水辺で遊ぶ生徒たち

の存在に価値を置くべきという考えは持続されていくものと考えている。しかし、先のことはわからない。

そんな意味から、本校では、PTAや地域に関わりを持つことに重点を置いている。職員がどんなに変わろうと維持していけるのは、この二者以外にないと考えるからである。

地域の人口は少数ではあるがビオトープと何等かの関係を維持している。それは春のせりとりであったり、畑への水汲み(水道水では土が固くなってしまし、塩素が強く野菜が育ちにくい)であったり、ホテイアオイの移入であったりする。

昨年の夏に地域内で生息しているホタルを移入したのもそんな意味を持っている。養殖して離すとことではなく、成虫→卵→幼虫というエコシステムをこのビオトープで実現させたいのである。残念ながらこの夏にはその姿を見ることはできなかった

が、取り組みは続けていきたいと思っている。

学校だけのビオトープでなく、地域のビオトープであってほしいということが願いなのである。なお、ビオトープの取り組みを始めてからは、新聞社が4社ほどと某機関誌の方、また他市の市議会議員や他市の学校の職員、本市の他校の職員等の本校訪問や取材がかなりの数に上った。議員や学校関係の方は、自分たちの市、学校にビオトープを造ってみたいとお考えがあったように思われる。新聞社の取材を見ても、今の自然に対する関心の高さを示しているのではないかと感じられた。また本市の教職員で構成している理科主任会では、今年度の研究項目としてビオトープ造りを挙げている。予算や諸々のことを考えると、そうスムーズに事が運ぶとは思わないが、これが実現すれば上福岡市の中にビオトープのネットワークができることになる。健闘を期待したいと思う。

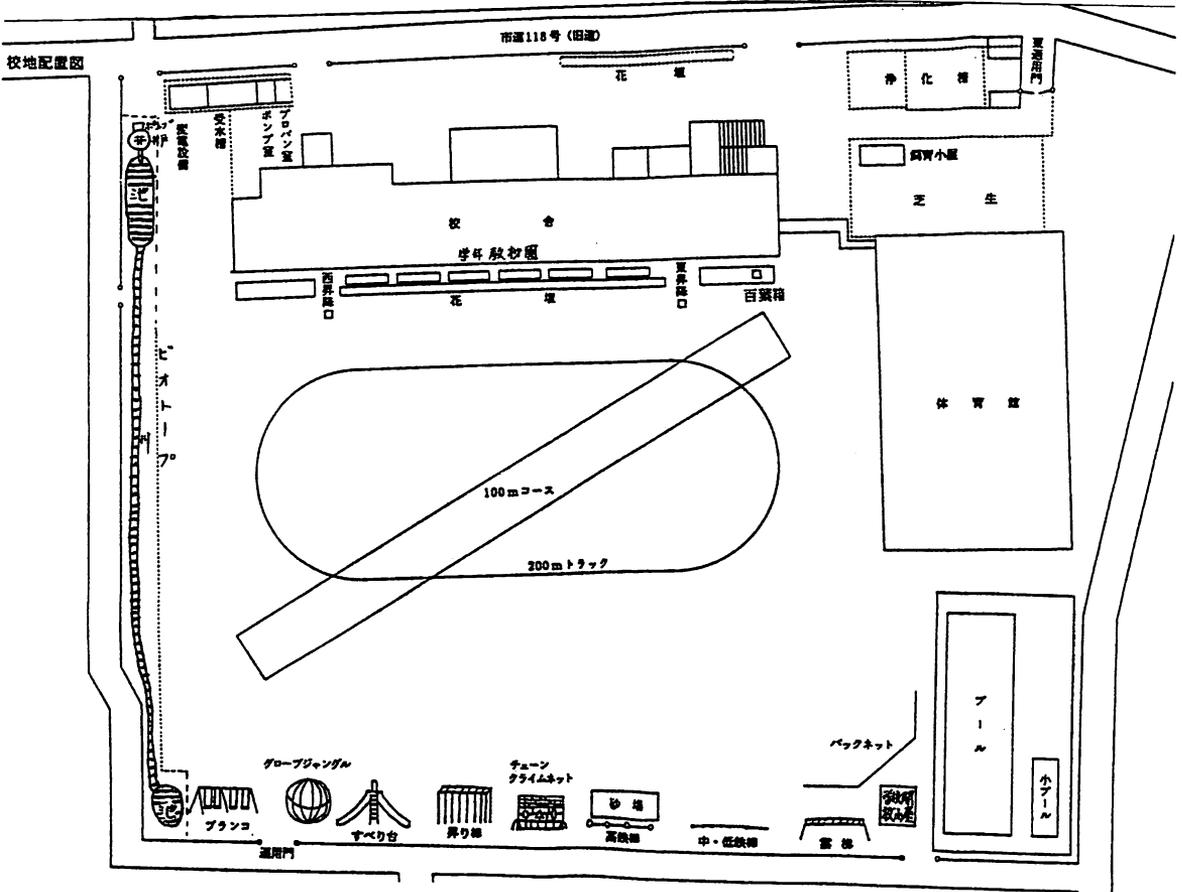


図 本校の全体図とビオトープの位置 (縮尺は正確ではありません)

特集 自然教育園を造ろう

「第3の教室」としての「森」と「川」を生かした教育活動の展開

新潟県長岡市川崎小学校 米山忠彦

1. 街の中の森「川崎の森」を起点とした学校教育環境づくり

(1) 子ども、教職員、保護者、地域住民の手による学校教育環境の創出

当校は、新潟県第2の都市長岡市のほぼ中央に位置し、児童数627名、学級数18、職員数33名の学校である。校区は、民間企業、銀行の寮、アパートなどをはじめとする住宅地と商店街から成り立つ住宅密集地である。校門を入ってすぐ右側に「川崎の森」があり、校地のグラウンドの脇を1級河川栖吉川が流れている。

1986年から校舎体育館改築工事が開始された。この改築工事と並行し、「川崎の森」（ふるさとの森）を中核にした学校教育環境の整備が開始された。住宅密集地区を持つ当校の地域環境からもうかがえるように、子どもたちの生活は自然と直接的にふれあう体験や遊びに極めて乏しく、室内や自宅周辺での遊びや塾、習いごとなど単調である。心の柔軟で感性豊かな小学生時代に直接自然とふれあう機会を確保し、全人的な発達を促すとともに、環境問題についても積極的に考える子どもの育成を目指し、「緑の学校環境—街の中の森のある学校—」づくりが開始された。

これまでは学校教育環境の整備をするという、美観—飾りの環境、遊具整備環境というものに重点がかかっていた。それらは、それなりに子どもの成長を助長するのに有効な働きをもって来た。しかし、学校教育環境が子どもの人格の形成の場として重要な役割を果たすものであるとすれば、それだけに止まってはならないであろう。学ぶ者、教師、さらにそれをとりまく保護者、住民にとっても学校の教育環境にふれることによって、それぞれの世代あるいは個性に応じて、自ら学ぶことができるような教育環境であり、人々に精神的文化的関心を誘発する教育環境であることが必要である。また、逆に人々がその環境に働きかけることができることが、さらに重要であろう。

それには、地域の自然にみられる樹木による教材樹木林—緑の学校環境の形成が、自然とふれあう豊かな体験がもてる点で望ましい。

『「川崎の森」の創出と教育活動の創造』1989.3

1988年には、専門家、地域住民、行政の協力、さらに子ども、職員、保護者の手によって、地域の樹木を植栽した「川崎の森」の造成、日本式庭園「友情の丘」の移設と拡張、芝園及び飼育園への植栽が終了した。そして、この「川崎の森」に「栖吉川」を加え、この「森」と「川」を生かした教育活動の歩みが始まった。

(2) 「川崎の森」の概要と「川崎の森」を生かした教育活動

「川崎の森」はおよそ650m²、80～100cmの盛り土をしたマウンドに81種、412本の木が植栽された。森づくりは学校環境の保全と教育的価値をねらいとするものであり、植栽方法及び形式は、生態学的、植物社会学的手法が採用された。そのために、表層土作りと植栽樹木の選定が入念に行われた。表層土はワラ、落葉、その他の有機物、有機肥料が混入され、土壌生物が充満するように配慮が行われた。また植栽樹木は、学校を中心とする半径10kmの範囲での植生調査が実施され、選定された。

植栽にあたっては、ケヤキ、ブナ、ミズキなどの10m以上伸びる樹木、その周囲に2～8mくらいになるユキツバキ、ヤマモミジなどの向陽性低木植物、1.5m以下のヤマツツジ、レンゲツツジなどの向陽性草本植物が配置された。森の側面から光や風などの侵入を防ぎ、森を保護し、森の環境を安定させるためである。

「川崎の森」の造成以後、春夏秋冬を通しての学年別活動が展開された。

1・2年生では「森と遊ぶ」をテーマに四季の発見、森の誕生会が、3・4年生では「森を調べる」をテーマに新聞づくり、花ごよみづくりが、5・6年生では「森に学ぶ」をテーマに調査活動や森を教

材とした教科学習がゆとりの時間に実践された。さらに、秋には全校集会活動「もみじの集い」が開催された。現在も、森を生かした教科学習、年間を通した学年活動が、この森を生かして展開されている。

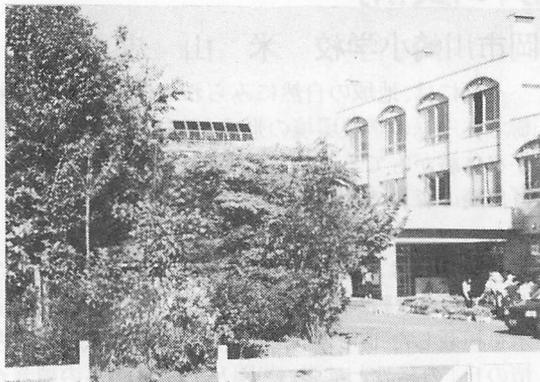


写真1 やさいランドから川崎の森の望む

(3) 「栖吉川」の概要と「栖吉川」を生かした教育活動

「栖吉川」は、長岡市の東山連峰に源を発し、長岡市の東側の田畑を潤し、信濃川に注いでいる1級河川である。かつては蛇行し、増水によって決壊し、付近を水浸しにしてきた。何回か改修が行われ、1987年には建設省の「潤いある水辺河畔整備事業」によりグラウンド脇の土手（グリーンスタンド）も整備された。現在は土手の所々に花栽ポットが設置され、土手は市民の通勤、散歩、そしてジョギングにと利用されている。また、鴨や鷺などの野鳥も飛来し、休日には市民の憩いの場になっている。

私たちは、次のように教育環境の整備に努めるとともに、教育活動を展開してきた。

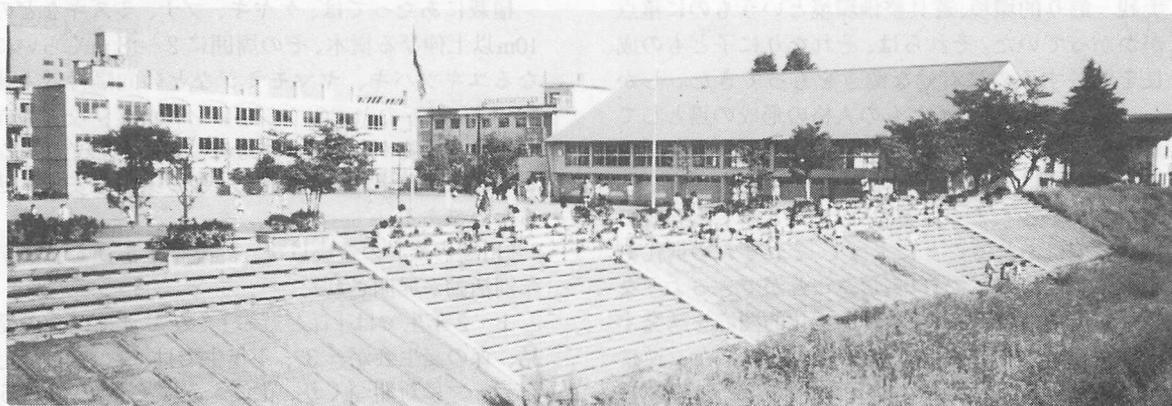


写真2 栖吉川から学校を望む

1989年

- ・グラウンド脇土手の「グリーンスタンド」の植栽（高木6本、中木10本、低木24本、野芝116m²）
- ・ソーラーシステム（太陽集熱器12台 24m²）の設置
- ・栖吉川のごみ拾い活動を取り入れた4年社会科
- ・全校児童による錦鯉1300匹の栖吉川への放流活動

1990年

- ・新潟県環境美化模範活動校表彰

1991年

- ・3年生「僕らのまちクリーン作戦」4年生「栖吉川活動」から発展した子どもとPTAによる第1回「栖吉川クリーン作戦」の実施
- ・4年生の年間を通した栖吉川活動、子どもたちの願いから建設省が学校脇の川原に玉石を敷石

1992年

- ・第2回「栖吉川クリーン作戦」の実施
- ・5年生近隣小学校へ栖吉川浄化活動の呼び掛け

1993年

- ・第3回「栖吉川クリーン作戦」の実施
- ・長岡市社会福祉施設協力校指定（～1995年度まで）

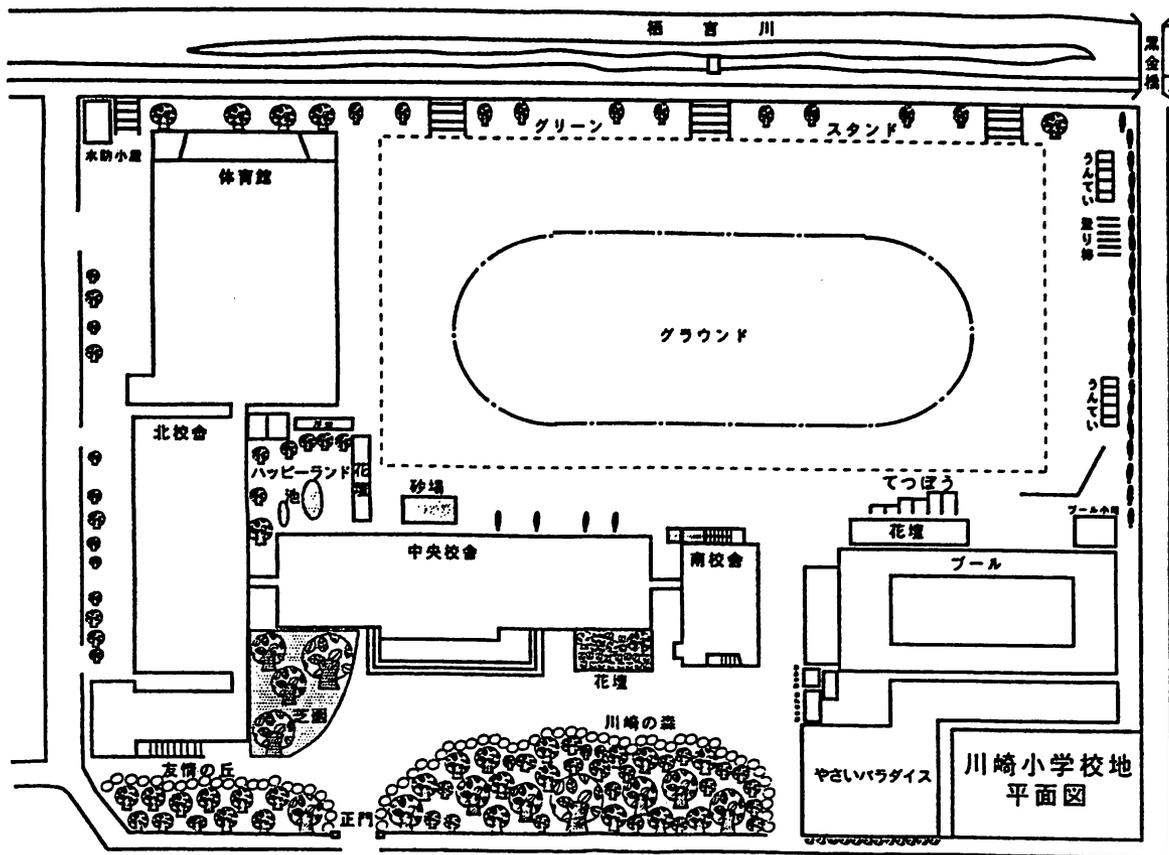


図1 川崎小学校校地平面図

2. 「第3の教室」の教室としての「森」と「川」を生かした教育活動

(1) 「いきいきスクールプロジェクト」で目指したもの

新潟県では1992年から「いきいき学べる学校教育」の充実を目指して、各学校の課題解決のために、学校で創意ある実践活動が行われるように、県内全公立小・中・高・特殊学校約1,100校を対象に、「いきいきスクール・プロジェクト」推進事業を開始した。県内の公立学校は1992年度から95年度までの間に指定を受け、3年間にわたり事業を継続するものである。

当校では、1994年より3年間、「いきいきスクールプロジェクト」の対象校として取り組むことになった。

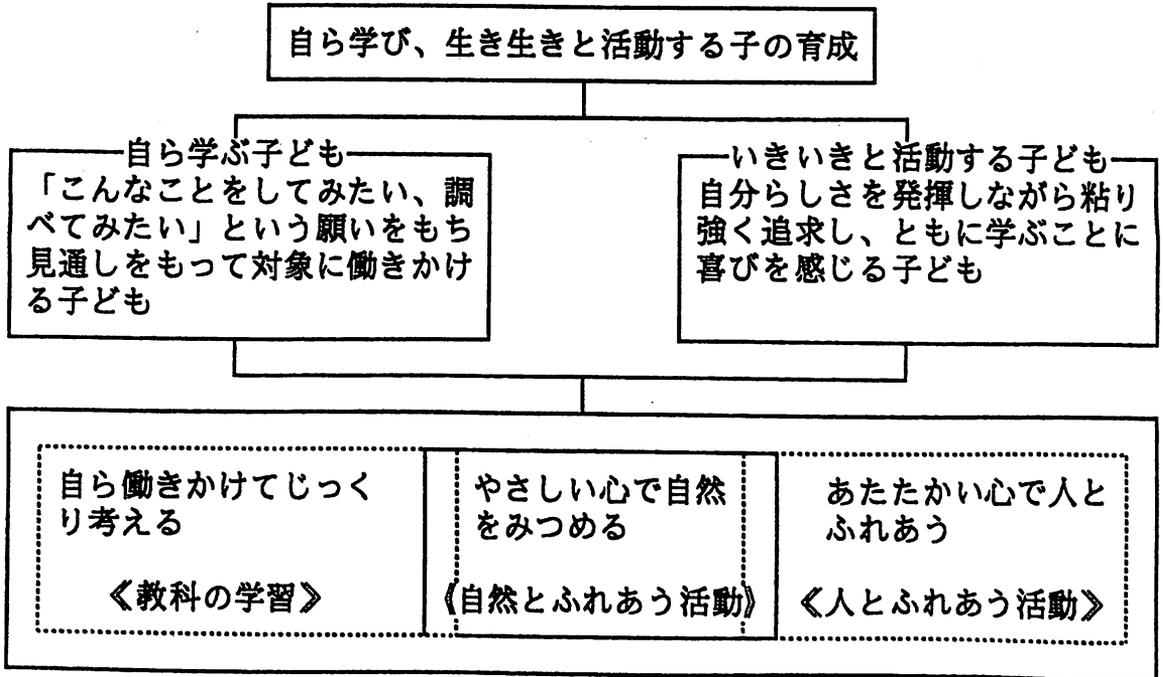
○ 運動会やマラソン大会など取り組むことがはっきりしていて、他から賞賛を得やすいことについて

は、意欲を持って取り組める子どもたち。しかし、自分の生活や学習で自分の考えや意志で取り組むことを決め、その目標に向かって最後まで粘り強く取り組む姿勢に弱さが見られる。

○ 楽しさにつながることについては、心一つにして取り組むことができる子どもたち、しかし、学校・学年・学級生活の向上を目指し、リーダーや友達の間立ちや気持ちを考え、ともに取り組むことに弱さが見られる。

このような子どもの姿から、「『こんなことをしてみたい、調べてみたい』という願いをもち、自分らしさを発揮しながら粘り強く追求し、ともに学ぶことに喜びを感じる子どもの育成」、換言すれば、「自ら学び、生き生きと活動する子どもの育成」を目指したのである。

この中核に位置するのが、「自然とふれあう活動」である。この活動は1988年以降全校で取り組んで来てはいる。しかし、教職員の異動、環境の変化な



どもあり、必ずしも教育課程の中に明確に位置づいてはいるとはいえ、活動も単発的なものになりがちであった。そこで、「川崎の森」「栖吉川」にさらに、「学校園」「小動物園」の整備を行い、これらの学校教育環境を「第3の教室」と名付けた。「体験的な活動を取り入れた教科学習」「地域の老人会や福祉施設の人々との交流を図る人とふれあう活動」も加え、3つの柱で目指す子どもの育成を目指した。

「自然とふれあう活動」で力を入れて取り組んだことは、次のことである。

① 「自然とふれあう活動」を教育課程全体の中で見直し、教科領域の計画との関連を考慮し、学

年として年間を見通した活動を推進する。

- ② 学校教育環境や地域素材を生かした教材開発に努めるとともに、学校の教育財産としての共有化を図る。
- ③ 地域住民や保護者、行政との連携を図り、さらに学校園や小動物園等を加え教育環境整備に努める。

(2) 「自然とふれあう活動」の歩み（1994年～1996年）

3年間の私たちの取組をまとめると次のように整理することができる。

年	環境整備と全校活動	自然とふれあう活動の主な実践
1994年	<ul style="list-style-type: none"> ○第4回「栖吉川クリーン作戦」 ◎学校園（やさいパラダイス）の造成 ◎建設省「栖吉川水流再生工事」着工（1995年終了） 	<ul style="list-style-type: none"> 2年生活科「野菜を育てよう」 5年国語科「森の研究」 1年学年活動 「川崎の森で遊ぼう」 3年学年活動 「すてきなひまわりを育てよう」 5年学年活動 「おいしいカレーを作ろう」

1995年	<p>○第5回「栖吉川クリーン作戦」 ◎栖吉川での児童会夏のやまなみ集会「ふねを作ってドンブラコ」実施 ○小動物園（ハッピーランド）飼育小屋建築 ○栖吉川活動の取組をまとめたパンフレット「栖吉川と友だち」刊行</p>	<p>1年国語科 「詩集『森のうた』づくり」 1年学年活動 「ぼくらは森の探検隊」 2年学年活動 「おいもを育てて収穫祭」 3年学年活動 「おでんパーティをしよう」</p>
1996年	<p>○第6回「栖吉川クリーン作戦」 ○栖吉川での児童会夏のやまなみ集会「みんなでザブザブ楽しもう」実施 ◎花っ子クラブと父母の会の発足 ◎6年学年委員会「青空委員会」ホタル、ハッピーランド、奉仕活動班)の活動、 ◎2年生の呼びかけによる学校園命名（やささいパラダイス） ○時事通信社「教育奨励賞」候補校</p>	<p>1年生活科 「栖吉川で遊ぼう」 4年国語科 「川崎小学校のビデオレターをつくろう」 6年国語科 「蛍の飛びかう栖吉川に一川は生きている」</p> <p>*学年活動省略</p>

2. 「第3の教室」の教室としての「森」と「川」 を生かした総合的学習の実際

「森」と「川」は、学校行事、児童会活動、学年活動、そして、教科の学習で活用されている。ここでは、2つの実践例についてのべる。

(1) 「川崎の森」を生かした実践—1年「詩集『森のうた』づくり」—

① 1年間の「川崎の森」とのふれあいを通しての詩集づくり

柔らかく芽吹き始めた「川崎の森」の木々、生活科の学校探検で1年生の子どもたちは「川崎の森」に足を踏み入れた。子どもたちは、葉っぱ、葉っぱの下の木の実、小さな虫を発見し、隠れ家も見つけた。「先生、～があったよ」「～したよ」「これ～みたい」と子どもたちは感じたままを自由に話す。子どもたちが五感を働かせながら見つけたことや感じたことを詩で表現する活動させてみようと考え、「詩集『森のうた』づくり」に取り組んだ。

② 実践の概要

ア 詩のおもしろさを音声を通して感じる子ども（6～7月）

五十音の一通りの文字を書くことを学習してきた子どもたちに、「あいうえおのうた」「がぎぐげごのうた」を提示した。子どもたちは、詩の暗唱を通してことばのリズムや五感のおもしろさ、声に出して読む楽しさを感じ、詩に親しんだ。

イ 詩集「のはらうた」と出会い、「川崎の森」の詩づくりを始める子ども（9月）

2学期に入り、「のはらうた」という詩集を子どもたちに提示した。詩集には、子どもたちの大好きな「川崎の森」のような昆虫、草花や木の実が主人公として登場する。子どもたちは「のはらうた」を通して、詩のおもしろさや何でも題材になることに気づき、詩は「じぶんでもかけそう」「かいてみたい」という思いをもった。

生活科の時間に「秋を探そう」と子どもたちは、「川崎の森」にいった。鬼ごっこや木の葉っぱで遊ぶ子どもに、「遊んだことを詩にかい

てみよう」と働きかけた。

子どもたちは、いろんなかたちで遊んだことを表現し始めた。

- ・「はっぱでおめんができたよ」と自分のしたことを書く子
- ・「ころころ どっしん いたい」と木の実になりきって書く子
- ・「もみじくん どこまでのびるの」と話しかけて書く子
- ・「ありのかあさん ありのあかちゃん まもっている」とお話づくりをする子
- ・「はっぱ はっぱ はっぱをとろう」と繰り返しを使って書く子等



写真3 川崎の森で遊ぶ子ども

ウ 書きためた「川崎の森」の詩で詩集「森のうた」を作る子ども

「川崎の森」で作った詩を紹介しあうことにより、子どもたちは詩作りの喜びを実感した。「また森にいった詩をかいていい？」と子どもは教師に尋ね、画用紙と鉛筆を持ち、「川崎の森」に入ることの繰り返した。書きためた詩を製本し、詩集を作った。保護者に誉めてもらい、「次は『栖吉川のうた』をつくりたい。」「公園の詩もつくりたい。」という子どももあらわれた。

このように、1年間にわたる森との直接体験は、子どもの五感を刺激し、豊かなイメージの形成を促すのである。

かわさきの森のどんぐりくん

どんぐり どんぐり どんぐりくん

かわさきの森でみつけた どんぐりくん
いっしょにあそんで くるりんこ
また くるりんこ
またまた くるりんこ
いっばい いっばい あそんだよ
たくさんあそんで おやすみなさい
またあした げんきに あそぼうね

詩集「森のうた」より

(2) 「栖吉川」を生かした実践6年「蛍の飛びかう
栖吉川に一川は生きている」

① 栖吉川に蛍を飛ばそうという子どもの願いを生かした単元構成

1989年、栖吉川のごみを教材にして社会科の教材開発が行われ、「きれいな川になってほしい」と全校で錦鯉の稚魚1300匹を栖吉川に放流した。その取組はさらに発展し、1991年には、保護者と全校児童で「栖吉川クリーン作戦」が実施された。そして、1995年からは、きれいになった栖吉川で児童会の集会が開催され、学校としての恒例の活動として定着してきた。その活動を通して、子どもたちは「栖吉川に蛍を飛ばしたい」という願いを持つようになった。

その願いを実現するために、今年度、6年の学年委員会活動「青空委員会」の中に「ハッピーランド（小動物園）班」「奉仕活動班」とともに、「ホタル班」を設置した。このような子どもの経験や願いを生かし、自分が調べる問題を決め、読む、聞く、話す、書くなどの方法を取り入れながら、情報を収集し、表現する力をつけることを主眼とした6年国語科総合学習の実践が行われた。

② 実践の概要

ア 蛍の飛びかう栖吉川を目指して蛍復活研究所を発足させた子ども

学年のホタル委員の活動を受けて、蛍についての思いをもっている子どもたちに教材文「生きている土」「釧路湿原とタンチョウ」を提示した。子どもたちは土と微生物の関心に興味をしめした。そして、タンチョウの学習を進めるなかでタンチョウのように姿を消してしまった栖吉川の蛍について強い関心をしめすようになった。その後、「生きている川～蛍の飛びかう栖吉川」を復活させようと学級に「蛍復活研究所」を設立し

た。

イ インタビュー、聞き込み調査などの調べる活動を行い、情報を収集する子ども

子どもたちは、自分のもった問題別に「生き物課」「環境課」「情報課」を作った。「生き物課」は水性生物を調べるために、「環境課」は水質検査のために栖吉川にかけた。「情報課」は栖吉川の近くに住む人たちを対象に、栖吉川や蛍のついでに思いや願い、過去の栖吉川のようなアンケート調査を行った。

「情報課」のC子は、祖父に栖吉川の現在と過去についてインタビューを行い、その後、自分の目で確かめるために級友を誘い、栖吉川の水質調査を行った。さらに、図書館での資料探し、隣町にある民間の蛍研究所、土木事務所への質問とその活動を広げていった。

子どもたちの熱意に促され、土木事務所の担当者がわざわざ来校し、説明をしてくれた。また、蛍研究所の所員は地域での蛍の生態調査と水質検査を実施してくれたのである。蛍を栖吉川に飛ばしてみたいと蛍の立場で考える子どもたちにとって、自然と人間との関係を考慮しながら改修を進めている担当者や地域での調査結果や蛍の育て方を話してくれた研究員の話は、自分の考えを見直すのに有効であった。子どもたちは水槽を学級に持ち込み、カワニナや蛍の飼育を開始した。

ウ 読む人の心に残る意見文を書こうと効果的な表現方法を検討する子どもたち

調べを進めるうちに、子どもたちは「生きている土」のように、読む人の心に訴えかける意見文を書きたいという願いをもつようになった。主題を効果的に伝えるための文章構成や表現の仕方について学級で話し合ったり、自分のメモを見直すなど検討を重ね、意見文を完成させた。

C子はこの学習の終わりに次のような感想を書いている。

わたしは、自分で調べながら作っていく勉強が大好きです。自分が興味をもったことを、自分のやり方でどんどん調べていくから大好きです。自分が一生懸命に調べていると土木事務所の人や蛍研究室みたいに力をかしてくれる人がいるから、またやる気が出ます。これからも自

分のやりたい調べを続けていきたいです。

C子の姿は、私たちが求めてきた「自ら学び、生き生きと活動する子」を現した姿ともいえる。

このような子どもの姿が見受けられたのは、次の理由によるものと考えられる。

- ① 学習過程が追求を促すように適切に組織されたこと。
 - 子どもたちが「全校クリーン作戦」や「ホタル班」の活動を通してもらった願いを、適切な教材文によってより強いものにしたこと。
 - 調べ活動のなかに人との出会いと考えを見直す場を設定したこと。
- ② 子どもたちが実際の活動体験を通してもらった「蛍」問題を取り上げるとともに、調査対象が身近にあるため具体的な活動の展開ができたこと。

3. 学校教育環境づくりとそれを生かした教育活動の意義

1989年に開始された学校教育環境づくりとそれを生かした教育活動は、今年度で9年目を終えようとしている。私たちが目指したものは、①子ども、教職員、保護者、地域住民と手を携えた教材として生かすことのできる学校教育環境づくり ②その環境を最大限に生かし、豊かな感動体験を生み出す教育活動の展開といえる。この2点にどの程度アプローチできたのであろうか。

- ①子ども、教職員、保護者、地域住民と手を携えた教材として生かすことのできる学校教育環境づくり
 - 子ども、教職員、保護者、地域住民とともに造成した「川崎の森」は、樹木も大地にしっかり根を張り、幹は天に向かって伸び、四季折々の変化を見せ、学校のシンボルとなっている。
 - 「栖吉川」は建設省とも手を携え、「潤いのある水辺河畔整備事業」「栖吉川水流再生工事」により、グラウンド脇土手に「グリーンスタンド」、河川側土手に花栽培ポットが設置された。また、河川敷には玉石が敷かれ、幅1mの小さな支流が造成された。保護者は、学校脇の「栖吉川」をさらに整備し、フラワーロードにしたいと考えている。

- 「小動物園（ハッピーランド）」には、飼育小屋と2つの観察用池があり、にわとり、家鴨、兎などの小動物が放し飼いにされている。
- 「学校園（やさいパラダイス）」には、老人会の方々から栽培方法を指導してもらうなどして、各種野菜が育てられている。

②豊かな感動体験を生み出す教育活動の展開

- 全校児童と保護者による「栖吉川クリーン作戦」と栖吉川での児童会主催「やまなみ集会」が恒例的に実施され、回数を重ねている。
- 学校園の野菜栽培や収穫物で行うパーティーを通して老人会との交流を図る2年生の学年活動など、各学年が特色を生かした学年活動を展開している。
- 「森」と「川」を生かした教職員の創意ある実践が行われている。
- 学年委員会や児童会の委員会が中心になって、全校の子どもに呼びかけて行う自主的な活動が展開されるようになった。

今年度は6年学年委員会（青空委員会）は「ほたる班」「ハッピーランド班」「奉仕活動班」を作り、全校に呼びかける活動を行った。また、自然環境委員会が呼びかけて募集した花っ子クラブ員は160名を数え、自分のプランターにサルビアの花を育てあげた。その活動に刺激された保護者は、活動を支援するために「花っ子父母の会」を結成した。

このように、教育環境も整備され、充実してきた。また、継続的に実施される教育活動も数を増し、子どもたちが自主的に計画し展開する活動も見受けられるようになってきた。

学校の教育環境を生かし、各種行事や活動を継続的に実施することは、子どもにとっても教職員にとっても、取組の過程や成果が目に見える形で確認できる。したがって、教職員も子どもも、将来取組むであろう活動について見通しと意欲を持つことが可能になる。また、何気ない自然環境とのふれあいの中で、子どもも教職員も多くのことに気づき、発見することができる。このように街の中にある学校環境づくりの取組は、子どもだけでなく、教職員にとっても意義あることと考える。

今後、私たちは、この学校環境に、さらに学校周辺、そして長岡の素材を加え、入学から卒業までの6年間を視野に入れた川崎小学校としての教育活動

を作りあげて行きたいと考えている。

◎ 研究集録等

- 1 緑の学校環境『川崎の森』の創出と教育活動の創造 (1888.3)
- 2 『自己発見』の喜びをめざした授業実践 (1888.3)
- 3 自然環境とのふれ合いを重視した教育活動の創造 (1889.3)
- 4 研究集録「川崎の教育」
一人一人の子供が学ぶ喜びを感じ得る指導法の工夫 (1994.3)
- 5 研究集録「川崎の教育第2集」
自ら学び、生き生きと活動する子供 (1995.3)
- 6 バンフレット「栖吉川と友だち」 (1995.7)
- 7 研究集録「川崎の教育第3集」
問題解決を促す「見つける力、表す力、考える力」をどう育てるか (1995.11)
- 8 研究集録「川崎の教育第4集」
自ら学び、生き生きと活動する子供 (1996.2)

◎ 教育活動の紹介

小日向孝「植生学・生態学を基礎とした緑の学校環境の創造—潤いと安らぎ・学習の場を目指した新潟県長岡市立川崎小学校のふるさと森—」 (1988.6)

手塚郁恵「森と牧場のある学校—山内義一郎先生の実践—」 (春秋社 1991.10)

岩瀬徹・川名興「野外観察ハンドブック 校庭の樹木」 (全国農村教育協会)

内外教育「自然環境で子供の感性を伸ばす」 (第12回時事通信社『教育奨励賞』候補校の実践 ⑩ 1996.9)

◎ 職員実践・論文等

金子洋子「入門期の表現指導—身近な自然を詩に表現する活動を通して—」 (長岡市教育論文集1996.)

特集 自然教育園を造ろう

横浜市立大道小学校

しぜん広場創造の取り組みと活用の実践から

ふるさと侍従川に親しむ会 尾上伸一

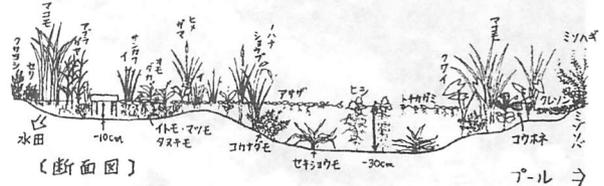
1995.5.末の頃



しぜん広場の生物層 (1994.10 現在)

植物 (代表的なもの) ○自生 ○移植 △苗植 □種まき

クヌギ	△	ドクダミ	○	トチカガミ	○
コナラ	○	セシ	○	アサギ	○
ハシ	△	オランダガラシ	○	ガガフタ	○
クワ	○	セキショウ	○	ヒルムシロ	○
コウゾ	○	ノミタア	○	ヒシ	□
ヤナギ	△	ミゾハギ	○	コナギ	○
モモ	△	ミゾソバ	○	コウホネ	○
ガヤ	△	マコモ	○	カナダモ	○
アケビ	○	ガマ (ヒメガマ)	○	オタマキモ	○
ヤマユリ	□	メ (サンカク・相・太)	○	マツネ	○
ヒガンバナ	○	アブラガヤ	○	イネ	○
ヤブミョウガ	○	オモダカ	○	スミレ	○
ママコシリメグイ	□	クワイ	○	レンゲ	○
シロツメクシ	□	カヤツリ	○	アブラナ	○
ススキ	□	ハンゲショウ	○		
ジュズ	○	シロウバ	○		
アキ	○	ハナショウブ	○		



〔断面図〕

小動物

野鳥	セキレイ (セグロ・ハク・キ)	甲殻類	モクズガニ
	スズメ		サワガニ
	カルガモ		ヌカエビ
	カリセミ		スジエビ
は虫類	ヤマカガシ		コムズムシ
	アオダイショウ		コマツモムシ
	ヒキガエル		マツモムシ
両生類	ヤマアマガエル	水生昆虫	ミスカマキリ
	シュレーゲルアオガエル		タイコウチ
	アマガエル		コオイムシ
魚類	メダカ (野生)		アメメンボ
	モツゴ		ヒメアメンボ
	バラタナゴ		マメゲンゴロウ
	モノアラガイ		ヒメゲンゴロウ
貝類	カワニナ		コガムシ
	タニシ		コマゲンゴロウ
	カラスガイ		ヘイケボタル

小動物

野鳥	セキレイ (セグロ・ハク・キ)	甲殻類	モクズガニ
	スズメ		サワガニ
	カルガモ		メカエビ
	カワセミ		スジエビ
は虫類	ヤマカガシ		コムズムシ
	アオダイショウ		コマツモムシ
	ヒキガエル		マツモムシ
両生類	ヤマアマガエル	水生昆虫	ミスカマキリ
	シュレーゲルアオガエル		タイコウチ
	アマガエル		コオイムシ
魚類	メダカ (野生)		アメメンボ
	モツゴ		ヒメアメンボ
	バラタナゴ		マメゲンゴロウ
	モノアラガイ		ヒメゲンゴロウ
貝類	カワニナ		コガムシ
	タニシ		コマゲンゴロウ
	カラスガイ		ヘイケボタル

1. 大道しぜん広場の紹介

「お父さん・お母さんがむかし親しんだ生き物に、地域の子もたちが再び日常ふれあうことができるように」という目的のもと、大道小学校創立50周年記念事業として、平成4年8月に学校・父母・地域が協力し合い、手作りで仕上げた。

広場は、子どもの愛称になるように「トンボ池」「メダカ池」「ホタル池」「オタマ島」「カエルの丘」など、ふるさとの生き物にちなんだ名称を付けた各

部からなり、それらの生物の生態に合わせた環境造りを行っている。

面積は、約300m²。水は、広場の南側に隣接する山の湧き水を集めている。地下からも湧水があり、水量毎分3リットルの供給がある。大変重要なポイントとして、広場を造り上げた場所は、学校の校庭になる以前は、水田であったということである。そのため防水加工の必要もなく、広場の南側には池とつながる形で里山が広がっていた。

広場造りの費用のうち、その80%強が今まであった人工物(倉庫やコンクリートガラなど)を取り除くことにかかったが、要するに自然を創造する活動というより、学校ができる前の状態に戻した「復元活動」ということができる。



写真1 大道しぜん広場 全景

2. 広場造りの背景と経緯

「大道 だいどう」という地名は、鎌倉時代、金沢(区)の海でつくられた塩を鎌倉幕府に運ぶための塩の道に由来している。侍従・朝比奈・三艘・塩場など周辺の地名をみても、この街が鎌倉時代からの歴史を持つことがうかがい知れる。また校舎の屋上からは、東に東京湾が、西に鎌倉へと続く山並みが一望できるが、新興住宅地のイメージが強い横浜市の中であって、古くからの歴史と残された緑を持つ街ということが出来る。そのことは、大道小学校に通う児童の父母のいずれかが大道小学校出身という家庭が6割強という構成からもうかがうことができる。「おらが村の学校」そんなイメージを大道小学校に対して持たれている地域の方々も大変に多くいらっしゃる。

『3年生の地域学習で講演を引き受けて下さったお年寄りの話』

むかし、大道小学校ができたころ、この辺は一面の田んぼだったんですよ。その田んぼにはたく

さんのカエルがいて、そのカエルのすみかに土を入れて学校を造ったものですから、大道小学校の運動会には毎年毎年雨が降ったのを、みなさん、これはすみかをとられたカエルのたたりだとお話していましたよ。

『大道小学校地域教育講師のお年寄りの随筆「大道の四季」より』

「春」 雪もとけて田の面に張った氷も消えて田んぼにも水たまりができ「オタマジャクシ」が泳ぎ始める。明堂の吉野桜が満開になってあたり一面花吹雪となる。竹藪ではウグイスが鳴く。田んぼの土手には「ツクシ」が顔を出し「タンポポ」の花で埋まる。春日免の「ネコ柳」も白銀色の芽を吹き始める。

大道小学校を囲む地域の方々がこの街のかつてのふるさとの面影をなつかしみ、そしてこの街で暮らす子どもたちに対して、温かい気持ちを持たれていること。そのことが、学校内にふるさとの面影をとどめる広場を造りだし、その後、広場が子どもたちの活動の場となり、そして子どもたちの活動が学校から地域へと広がっていく大きな背景となる。

さて、しぜん広場の造成に着工したのは平成4年の8月であるが、計画にはその2年前から取り組んでいた。学校内に50周年の記念事業実施に向け、PTA、地域、学校の代表からなる「しぜん広場委員会」が発足した。この委員会では、どのような目的で広場造りに取り組むのか、実際の作業を行う人たちをどのように募っていくのか、広場造りにかかる予算をどうつくり出すのか、というような点について話し合いを重ねていった。それと並行して学校側では、水利や土壌の条件などを専門機関に調べてもらったり、広場の青写真を書いたりという作業を行っていた。

上記の計画の中で、最終的には広場の造成を以下のように位置づけた。

- ①目的 お父さん・お母さんが子どものころによく遊んだ生き物や植物の復元と育成をめざす。
- ②作業内容
 - 基礎工事(コンクリート叩きの除去・池堀と盛り土)は、地元建設業者に委託。
 - 仕上げの作業(整地・木杭打ち付け・石積み・橋掛け・浅瀬造りなど)は、設定作業日に。
 - 環境造り(植物の植え付け・メダカ等の育成・

周辺緑地の育成)は、学習活動に位置づけて。

③作業の実現に向けて

- 基礎工事にかかる費用120万円は、PTAバザーを行い、捻出する。
- 仕上げ作業は、平成4年度の8月各週土曜日を作業日とし、父母・地域・卒業生に広く呼びかける形で実施する。
- 環境造りは、2学期以降、全校活動や学年活動に位置づけ、児童活動の場で実施する。

そして、平成4年7月29日、たくましいユンボ(土木重機)の音とともに、いよいよ広場の基礎工事が始まった。長い間の念願であったしぜん広場の原形がユンボの一掘りごとに現れていくようであった。

その後、8月に設定した作業日4回に、学校・地域からのべにして114名の方の参加があり、立派な広場が校庭に姿を現した。翌年の8月には、この広場を拡張するための同様の作業日を設定したが、併せて7回の「広場造り」に参加した方の数は、200名をこえていた。

「これは、子どもたちのよい遊び場になるぞ。」
 「この辺りに、ヤナギの木を植えたらいいんじゃないかな。」
 「トンボがうれしそうに飛んでいるよ。おい、もっと仲間を連れてこい。」

そんな会話の中、作業参加者の一体感が生まれてきた。



写真2 ひろば作り 風景

広場が形になると、次は子どもたちの出番となった。池の回りにやって来るであろう生物の生態も考慮し、植栽活動に主に取り組んだ。また、自然に訪

れることができない魚類については、環境保全局の研究所から地方特有种をいただいたり、近隣から採集して放流した。

[学校での活動で行った子どもたちの環境整備活動]

- 全校活動：
 - 広場周辺の野原づくり、グリーンマーク回収による植林
- 特別活動：
 - (生き物クラブ) ドングリ栽培、植物の手入れ
 - (環境委員会) 日常、広場の清掃活動
- 学年活動：
 - (1年生) メダカ放流、ヒシ種まき
 - (2年生) モツゴ放流、アサザ植栽
 - (3年生) ドジョウ放流、沈水植物
 - (4年生) ヘイケボタル飼育放流、フキ・セリ植栽
 - (5年生) 水田づくり、クヌギ・コナラ植栽
 - (6年生) 湿地拡大作業、啓発看板作成、整備活動リーダー



写真3 子どもたちの手による湿地拡大作業



写真4 子どもたちの手によるフキの植え付け

3. 子どもたちにとって身近で魅力的な広場にしていく

しぜん広場は、300m²あまりの空間であるが、形になってから3年間で実に多様な生物が集まってくるようになった。その中で、特にこの広場の様相が生態に適している生物は、繁殖し数を増やすようになってきた。そのことから、昆虫や植物の採集、魚とり、オタマすくいなど特に規制することなく、子どもたちが自由にこの広場を活用できるようになってきた。生命尊重の視点から指導をすることがあっても、まず実際にふれあうことが第一という思いを実現できるようになったことは、大変にありがたいことである。

この広場が子どもたちにとってより身近で魅力的なものとなっていくように、以下のような点を念頭に置いて、環境を整備し、取り組みを展開してきた。

①子どもたちの観察・活動の場とする

基本的には、約束事を最小限にとどめ、子どもたちの自由な観察活動を保証していくことを方針としてきた。約束事は、以下の3点とした。

- ・池で採集した生き物を逃がすこと以外、この広場の池に絶対に魚やザリガニなどを放さないこと。
- ・ヘイケボタルの蛹化時期に蛹化場所（さなぎになっていると思われる水辺付近）に入らない。ホタル狩りをしない。
- ・産卵に訪れたカエルをとらない。

以上の点は、校長先生の朝会でのお話などの中に生命尊重の視点と絡めて児童に投げかけていくことで全校に浸透しており、外来魚やザリガニ等の移入は現在までほとんどなく、カエルやヘイケボタルは年々数を増やしてきている。

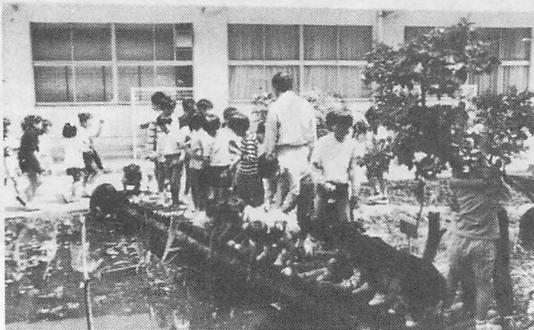


写真5 休み時間の観察風景

休み時間や放課後に自分から進んで足を運ぶ子どもたちを援助し、その数を増やすために以下のような取り組みを行ってきた。

○休み時間の観察会

日頃、熱心に観察活動続ける高学年児童がリーダーとなり、年4回（春夏秋冬）「しぜん広場観察会」を実施。



写真6 6年生がリーダーとなった観察会

○校内の展示場所

季節ごとに観察対象となる生物の生態展示やパネル展示を行う「ミニしぜん広場」を校内に設置。



写真7 校内の展示スペース「ミニしぜん広場」

○自主観察のガイド

季節ごとの観察対象やニュースを伝えるために、「しぜん広場だより」「1年間のできごと」「しぜん広場観察ガイド」「大道小学校しぜんアルバム」を作成。

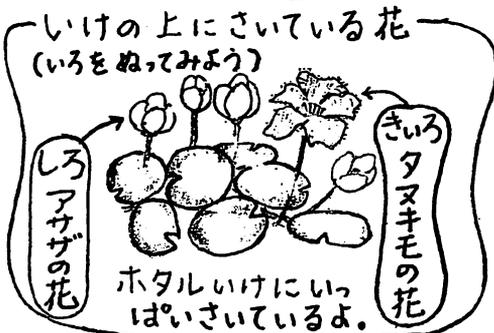
しぜん広場 ~~生き物カレンダー~~

時期	観察できる生物など	子どもとのかかわり
4 上旬	<ul style="list-style-type: none"> ○オタマジャクシの成長 ・大きなオタマジャクシ→ヤマアカガエル ・小さなオタマジャクシ→ヒキガエル ※「しぜん広場のできごと」を参照 	<p>オタマジャクシには、自由にふれあえるようにしたい。ただし、持ち帰る際や飼育する際には責任を持って飼える数を考えてもらいたい。</p>
4 中旬	<ul style="list-style-type: none"> ○池辺のハナモモが開花 ※「しぜんアルバム」を参照 	<p>毎年、トンボの初飛行はだいたいの日にちが決まっている。1番はやいのが、シオカラトンボとアジアイトトンボで4月15日ごろまた少し遅れて、大きなクロスジギンヤンマが飛ぶ。</p>
4 下旬	<ul style="list-style-type: none"> ○春1番のトンボ・ヤンマが飛ぶ。 ・イトトンボ→アジアイトトンボ ・トンボ→シオカラトンボ ・ヤンマ→クロスジギンヤンマ ※「しぜん広場のできごと」・「しぜんアルバム・5月」を参照 	<p>ノハナショウブは、野生のショウブで、横浜ではすでに絶滅している。しぜん広場のものは、静岡の磐田の自生地から譲り受けた物</p>
5 上旬	<ul style="list-style-type: none"> ○メダカの稚魚が浅瀬に目立ち始める。 ○ヤマアカガエルのオタマジャクシに手足がはえてくる。 ○水生昆虫のタイコウチ・オオコオイムシが活動を始める。 ・呼吸管が長く太鼓を打つ格好に見える→タイコウチ ・卵をオスが背に負って守る→コオイムシ ○カワセミが早朝、メダカやオタマをねらってやってくる。(4月から) ・運がいいと昼に見つけられることもある。 ○池の南側の盛り土部分にウラシマソウやマムシグサが咲く。 ・ウラシマソウ→浦島太郎の釣り糸のような花弁を垂らしている。 ・マムシグサ→マムシがにらんでいる姿 ※上記の全てについて、「しぜん広場のできごと」「しぜんアルバム」を参照。 	<p>ゴールドンウィークが明けた頃は、左のような生物シーンが目白押しとなる。特に児童に人気があるのが「タイコウチ」である。肉食昆虫でオタマジャクシなどをとらえて食べているが、この時期は幼虫も浅い部分で見つけられるようになる。</p> <p>またオタマジャクシは手足がはえると飼育するのは大変に難しいので、捕まえて観察したらにがしてあげる。</p> <p>ウラシマソウ・マムシグサはすごい変な植物なので見せてあげたい。</p>

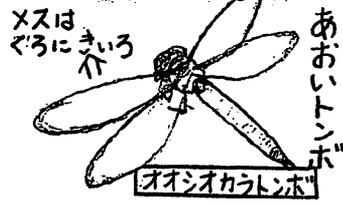
だいどう しぜん広場 だより

なつごう

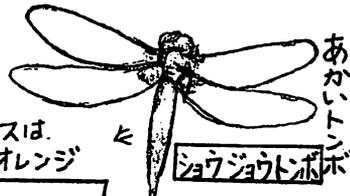
大道小学校 環境教育担当



青いトンボと赤いトンボ



このなつしぜん広場にあおいトンボとあかイトンボがたくさんとんでいましたね。これは2つともシオカラトンボのなかまです。そしてあおいのもあかいのもオスなんだよ。



(いろをぬってみよう)



だいどうまい 大道米 ほうさく ことしも豊作!!

5年生のみなさんが山形県羽黒町のおじさんのしどうをうけて育てたお米が今田んぼでいなほをたくさんたらしめています。いねかりももうすぐです。ことしもまたおいしいお米をみんなで食べることができそうです。

なつのヒメグモ



7月ホタル池に いけ へイケホタルがとぶ

1・2・3年生のみなさんが春にはなしたへイケホタルのようちゅうが7月のおわりごろにせいちゅうになって、まゆ 蛹 とんでいました。たまごをうんでいるといいですね。

8月6日 池のていれが おこなわれる



お父さん・お母さん・地いきのみなさんが^{まごころ} 甲心 となって夏休みにふえすぎた草かりや池のそこのどろをかえるせいびをしていただきました。



8月ベニイトンボが たくさんうまれる

よこはま市で今まで2・3回しかみつがっていないベニイトンボがこのなつしぜん広場でたくさんうまれました。目からしっぽまでまっ赤なイトンボです。みなさんもみつけてみよう!!

アキアカネが おもぐ やってくるヨ

春にトンボ池でかえたアキアカネが夏のあいたは、^{たか} 高い山の上でくらしていました。もうすぐまたこの大道小学校にかえてきます。きょう年は運動会がおわったころ、壁がトンボだらけになるほどやってきましたが、ことしはどうか?

学校の生きもの 調査員(かうさいん) になりませんか!!

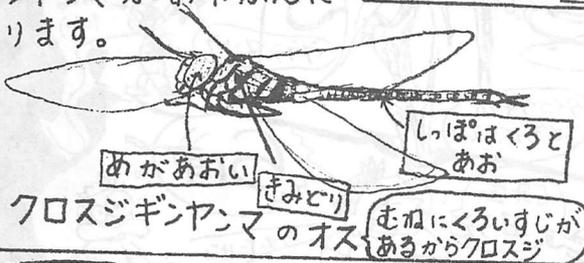
学校でみつけたとり・むし・カエル・さかな・ミズなどなど、生きもののお話をきろくして、学校の生きものずかんを今つくっています。あなたも調査員になりませんか。くわしくはおのえ先生まで。

だいどう だより トンボいけ

はるごう 春号

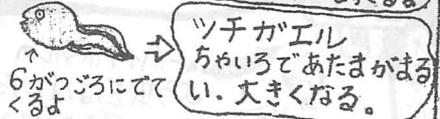
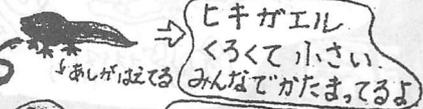
トンボいけのおやぶん

トンボいけのおやぶんをしていますか？
はれている日に大きなトンボがいけの上をパトロールしていたらそれがトンボ池のおやぶんです。
5月と6月はクロスジギンヤンマ。7月と8月はギンヤンマがおやぶんになります。



オタマジャクシのはなし

トンボいけには3しゆるいのカエルのオタマジャクシがいるよ。



カエルになったらにかしてあげてね。ヒキガエルは、40ねんも生きるんだよ。

高学年の人に

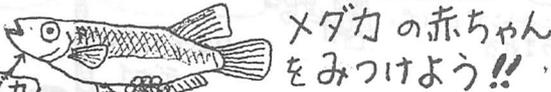
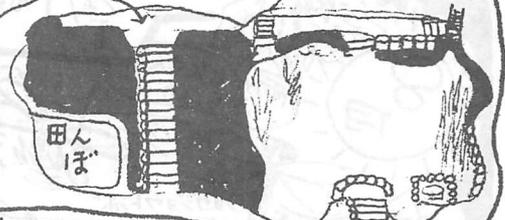
トンボ池の生きものもすみわけをしています。クロスジギンヤンマもギンヤンマもトンボの仲間。王者なので、同じ時期に発生しないように5・6月がクロスジ、7月後半以後がギンヤンマというようにずらして羽化します。なまばりを作るのはオスでエサをとりにくるメスをまって交尾し卵をうめます。

ヘイケボタルのよう虫をはなしました。

「フルいけ」にヘイケボタルのよう虫を1・2・3年生ではなしました。このあとよう虫は、つちのなかでさなぎになり、なつやすみのまえには、ホタルになってでてきます。しぜんひろばのうち、えでくろくぬっているところにはいないでくださいね。

ヘイケボタル：ゲンジボタルにくらべると小さくあまりとびません。田んぼやあさいいけでくらしています。よこはまにはそういうほしよがとでもすくなくなっていますので、ヘイケボタルもいなくなっています。

山のへんを
あるこう



これからいよいよメダカがふえるきせつです。いけのなかをそーっとのぞいてみてごらん。メダカの赤ちゃんがおやぶんをみつけているよ。

トンボいけだより えとさくぶん大ぼしゅう!!

しぜんひろばでのぼしゅうのえとぶんをぼしゅうします。できたら4年2組にもってきてね!!

1年間(1994年3月~1995年2月) のしぜん広場でのできごと



3月

アカガエル

ヒキガエル

がたまごをうんだ。

カワセミがきた。

たまご



オオハシ
フケリ



せみいぬ
ツノ

池に出て
この穴が
あき

4月

オタマだらけ



ハイトボルの
よう虫をはなした。
(小さい貝をたべる)

春1ばんのトボ

クロスジ
ギンヤンマ

4月15日=3

ハナモモ



5月

ヨツボトボ発見

かたがねの
はねに星が4つ

けっこう
うみました。



タイコウキの
こどもが3える



シラサギ



うらは
たらう

6月

カルガモが
きた

よこしました



メダカ

5年生
田うえ

おがあちやん

6月

うえたせ!

モッコ
かみつく!!



7月

神奈川県の花
ヤマユリ



2つさく



ハニイトボ
発見される

ポタリ池がアサガ
だらけになる。

ポタリ池
でハイボタル
かどぶ

8月

雨かぜんぜん
ふらふらがった

まっ赤たいこマカト



ショウジョウトボ
大発生



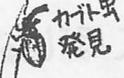
はね
が茶いろ
ズルタンヤンマ
がたまごをうむ



アサガ
オニヤンマ



アサガ
オニヤンマ



カト虫
発見



ピンクの花
ミハキ

いっばい
うまれる

いっばい
うまれる

日本で1ばん
デカイ



9月

9月21日
秋分の日



ヒガンバナ
さく

アキアカネもどってくる。
運動会のころ

アキアカネ

イナモノジセセリ大発生

100匹以上

アジイトトンボ
たまごをうむ

10月



アケビ (しせん広場アケビ山になるカラスケリ)



5年生
いねかり
大造米
豊作

アキアカネ
たまごをうむ

11月

オオカマキリ
たまごをうむ



7月の赤ちゃん
大発生



秋のさびのトホ
オオアイトク
トホ

日本1大発生
イトトンボ

いろんなキコ
がはえる。

12月

ゴサギがきた



オオカマキリの
卵のう

ドンガリいっぱい



ゴナラ

アサギ

メダカシメ

あっぱれの下でねる

1月 野鳥のすがた目立つ



アオジ



キチン



ハセキシ



オシカ



ぶあつい氷が
はる

2月



池におひさまが
あたるようになる



カエルの丘に
フキントウが
出てる



池の中でカエルが
おひさまを浴びてる

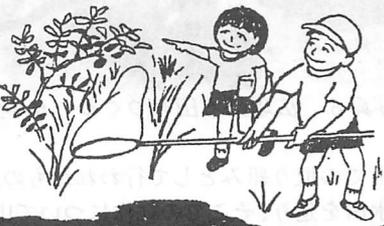
しもがとけて
すべりやすくなる



アツアツ!!

かんさつにでかけよう!

しせん広場での1年かんのできごとをかんたんにまとめました。今でしかできない発見があるはずです。さあ、きせつをみつけにでかけましょう



②子どもたちの学習の場とする

このしぜん広場を学習の場として活用していったのは当たり前のことであるが、理科や生活科、社会科といった教育課程の中に位置づけて学習に活用していくことのほか、様々な形で子どもたちの学習との接点を考えてみた。上記の環境整備活動の他、以

下のような取り組みを行っていった。

○観察レポート

6年生での取り組みとして行われたもの。この広場の四季の移り変わりを毎日、学年児童が交代で、絵と文でまとめていったもの。根気と時間がかかったが、観察力は抜群に高まっていった。

レポートNO H5 4月 16日 名前 渡辺成顕

今年初めてのトンボのぬけがら

4月16日に今年初めて、トンボのぬけがらを発見した。死体かと思、てすくいあげたらぬけがらだった。

トンボのぬけがらの特徴

大きさ → ぬけがらの大きさ
 人さし指の $\frac{1}{3}$ くらい
 約 1.5cm

ぬけがら

とったときの感想!!
 今年最初だったの
 でとてもうれしかった
 です。また見つけたいと
 思う。

みつけた場所

岩の近くにあった。池の橋の横にあった(かんていした)。近くには草がたくさんはえていた。
 掘り出しの場所

橋1 橋2
 水 水
 ここにあた ここにぬけがらがあつた
 橋下

陸 = 茶
 水 = 青
 橋 = 黄

○水田造りと羽黒町の農家の方々との交流



写真8 広場に水田をつくる 5年生

5年生での取り組みとして行われたもの。広場の一角に水田を造り、そこでの稲作について山形県羽黒町の農家の方と交流する中で学んでいった。

○ヘイケボタルの飼育



写真9 ヘイケボタルの放流 4年生

4年生が、侍従川水系のヘイケボタルを採卵から飼育。毎年4月に全学年で放流会を行った。7月の成虫発生の時期には、親子でホタルを観察にくるこ

とが定着してきた。

以上の活動は一例であるが、他にも「生き物探検クラブ」がしぜん広場をベースに週に1回活動を行い、活動の様子や広場を中心とする生物についてビデオにまとめ全校放送で放映したり、特設クラブである「ウジャウジャチーム」が自主観察の結果を全校集会や地域内で行政が行う発表会で発表したりと、多様な学習形態を子どもたちに保証してきた。

以上のような取り組みを通し、個々の違いはあるものの、学校全体では子どもたちが生き物とふれあうことを日常としていく様子が、時を重ねるにつれて実感されるようになってきた。それは、あくまでも子どもたちの日々の様子を見た上での変容の実感であるが、

- ・日常の会話の中（例えば朝の会での子どもたちの話題など）に
- ・作文や絵の題材として
- ・遊びの要素として

明らかに身近な生き物とのふれあいを自然な形で採り入れていく子どもたちが増えていった。異学年との交流グループや学級内での小集団に名前をつけるとなると、トンボ・ホタル・オタマといった身近な生き物の名前が必ず出てくるようになった。卒業式の会場を飾るデザイン、1年生を迎える言葉、卒業製作、夏休み自由研究などなど、子どもたちがテーマを立てて取り組んでいくような活動に、以上のような変容が顕著に現れるようになった。

一児童のあいさつ文「1年生を迎える言葉」（3年生女子）

1年生のみなさん、学校にはもうなれましたか。大道小学校のしぜん広場には、今、たくさんのオタマジャクシがおよいでいるけれど、みなさんは、もう見ましたか。わたしは大道小学校の春が大好きです。それは、このオタマジャクシに足がはえて、小さなカエルになっていくからです。毎日見ているとウキウキしてきます。1年生のみなさんも、こんな大道小学校がきっと好きになると思います。(後略)

4. しぜん広場を地域と学校との接点としていく

今までに何度も触れたように、このしぜん広場は、学校と地域との連携により生み出されたものである。また造り出す活動に際してだけではなく、その後の活用や維持に関しても、今や地域なしでは語

れないほど密接なものとなっている。

学校が特色ある取り組みを試みる際に、「いかに継続させ、定着させるか。」という問題は大変大きなものであると思う。この「しぜん広場」から派生する取り組みに発足時から中心となって関わってきた者は、今や校内には一人もいなくなった。その思いは、校長先生を筆頭とする教職員に継承されてきているが、「言い出しっぺ」は地域の方だけになった。

現実的な問題として、このような時期を迎えた時にどうするのか。それは当初からの大きな課題であった。その課題を解決するために、PTA組織として「しぜん広場保存会」が設定された。この広場を半永久的に維持・保存していくために、必要と思われる時期に必要なと思われる作業をする呼びかけを学校や地域にしていく窓口である。

また、維持してだけでなく、地域が積極的に活用もしていこうと、「大道ふるさとの生き物に親しむ会」という、地域と学校・行政が一体となった団体も設立された。この団体は、しぜん広場の完成の翌年に活動をスタートしたが、会の設立の動機は、学校5日制の施行日などを軸とし、地域スタッフが中心となって、地域の子どものための身近な自然観察の場を設けるというものであった。



写真10 学校5日制施行日に行われたハイキング

この会での活動を詳細に記せば、それだけで莫大な文になるほど実に多種多様・変幻自在な取り組みを行ってきた。会の中心には、「山田さん」という生き物観察と子どもたちを愛することにかけてはこの上ない地域のお兄さんが居座った。その周りには、広場造りの計画から夢を語り合ってきた中学生たちがくっついた。そして地域の子どもたち、それらを温かく見守る地域、PTAのおじさん・おばさ

ん・学校の先生・コミュニティハウス。行政からの金銭的な支援を受けることもできた。そんな人的な構図が、会の活動をもり立てていった。

ある日、会のリーダーシップをとっていた中学生（現在は高校生）が、地域を流れる侍従川にメダカの群れを見つけたと報告に来た。そこから調べてみると、しぜん広場の排水管から流れ出たメダカが、侍従川に入っていることが分かった。そのことは、会の活動の中心をしぜん広場から侍従川に広げていくこととなった。

その後、「大道ふるさとの生き物に親しむ会」では、メダカを中心とした侍従川の生物を保護していくために主に中学生が中心となり、以下のような取り組みを展開した。

○侍従川の生物調査……見つけた生物は、「生き物看板」に記録し、橋に立てかけた。



写真11 侍従川の生物調査

○メダカの生息場所の確保……治水事務所の了解を得て、河川に浅瀬を造り、セリなどの植物の植え付けを行っていった。



写真12 見つけた生き物を看板にあらわす



写真13 メダカの浅瀬づくり

○水質浄化の取り組み……中流域にアシを植え付け、アシ原を造っていく。上流域には蛇かごに石と木炭をつめ、流れを多様にするとともに木炭の浄化力を試す。など、中学生や小学生が自分たちの手で可能と思われる水質浄化の試みに挑戦していった。

○街の方々の力を借りてのゴミ拾い活動……上流から中流域にかけての1kmは、河川と住宅が特に密接につながり、ゴミも大変に多かった。そこで、街の方々の力を借りて一斉にゴミの引き上げ作業を行った。作業では、自転車12台を引き上げるなど、現在の都市河川が持つ問題点を浮き彫りにした惨憺たる結果であったが、その後このゴミ拾い活動は、侍従川クリーンアップとして年に3回行われており、地域内に根付いた活動となってきた。

上記の一連の活動については、平成6年度の全国野生生物保護実績発表大会において、環境庁長官賞を受賞することになるのだが、その受賞はしぜん広

場造成から活動に携わってきた地域の方々の大きな喜びとなった。学校と地域がしぜん広場を核に連携していった成果であると考え。

5. まとめ (地域に広がる取り組みの輪)

「大道ふるさとの生き物に親しむ会」は、平成7年度より「ふるさと侍従川に親しむ会」と改称した。大道小学校・しぜん広場造成の取り組みに端を発する一連の活動が、より地域主導のものとなるようにという願いを込めてのものである。平成8年度には、会が主体となった「ジュニア探検クラブ」設立の呼びかけに、侍従川流域の子どもたち50名が集まった。このクラブでは、月1度の活動を原則として、自分たちの街を流れる河川を中心に生き物を観察したり、環境を保全したりする取り組みを展開している。

現在、「ふるさと侍従川に親しむ会」では、この「ジュニア探検クラブ」の活動を核に、侍従川が再び子どもたちの遊び場となることを目標としている。

しぜん広場を校内に造り出すという活動は、活動の開始から4年を経て「地域が地域の子どもたちを



写真14 侍従川で活動する子どもたち

育てる。」という取り組みにまで発展してきた。その中で、きっかけとなったしぜん広場は、今や学校はもちろんのこと、地域にとっても宝物のような存在となっている。ここまで無我夢中で取り組んできたが、一連の活動を振り返ったときに本当に多くの方々に会い、様々な形でお互いに力を合わせあってきたと思う。ここで紹介した事例は、地域の背景という要素からどこでも一般化できる取り組みだとは思われないが、本当の意味で学校と地域が連携した取り組みであると考えている。



写真15 侍従川で活動する子どもたち

特集 自然教育園を造ろう

学校敷地内に残された雑木林の利用

—神奈川県立厚木西高校の自然観察路—

神奈川県立厚木西高等学校 阿部 健太郎

1. はじめに

本校は、神奈川県厚木市の北西部、県のほぼ中央に位置している。ここに市による森の里ニュータウンがあり、本校はその中に建設された創立13年の学校である。

森の里は白山丘陵の前山の形の高松山丘陵を削り、八つ手型に開いた盆地を埋め立てて造成された。森の里ニュータウンは緑被率50%以上という規定があり、本校でも植樹された緑地の他に敷地を取り囲むように敷地の約1/3にあたる1,200m²の斜面林が残されている。

主な樹種は、コナラ、クヌギ、イヌシデ、クマシデ、エンコウカエデ、イロハモミジ、ヤマザクラ等の広葉樹である。以前は薪炭材や堆肥のための落葉を供給するためのいわゆる薪炭林であった。

森の里ニュータウンの造成により残された雑木林は植物ばかりでなく地域に生息していた動物たちの移住地にもなっているようで、林内にてタヌキのものらしいふんがみられたり、マムシ、シマヘビ等の動物も生息している。また近隣ではハクビシン、シ

カ、サル等も観察されている。鳥類については林内に毎年巣箱を設置しており、営巣の様子から、シジュウカラ、エナガ、ヤマガラなどのカラ類、またメジロ、コゲラ等がよくみられる。

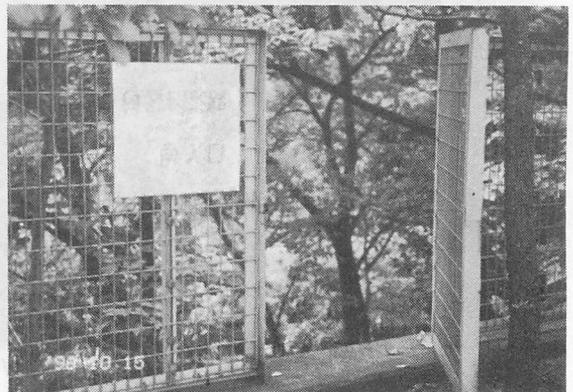
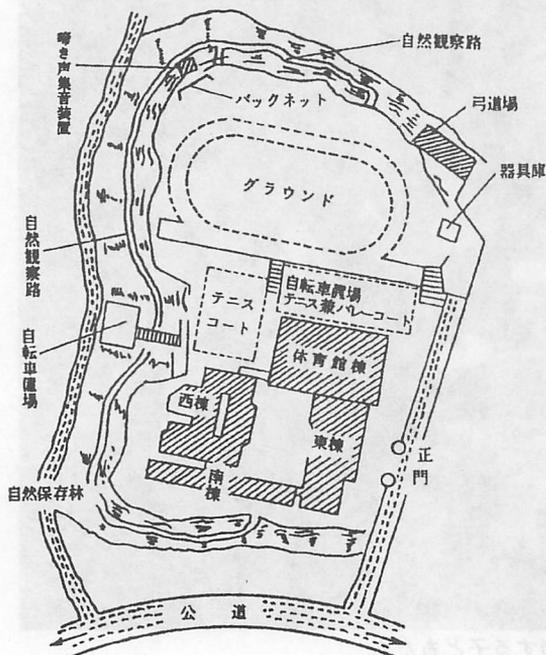
2. 自然観察路づくりの計画と実施

自然観察路は開校直後に計画された。豊かな自然環境を活かして、自然学習の場とするために、敷地の約1/3を占め、校地を取り囲むようにある落葉広葉樹の斜面林の中に自然観察路の建設をすることになった。

84年4月に本校が開校して間もない5月から作業は開始された。作業は各クラスから選ばれた自然環境委員と職員とによって行われた。時間は主に放課後が利用され、まず自然環境委員と委員会顧問によって、林内の下草をかき分けて傾斜の緩やかなところを選定し、縄を張ることから始められた。

このようにして観察路の原型ができると、次に委員会と職員が総出で、斜面を削り、また当時の東京電力厚木支店から譲り受けた古い木製の電柱を利用して、杭をうち、階段を作り、人が一人通れるような通路を作った。こうして2年がかりで第一次観察路が完成した。また87年には第二次観察路づくりに着手し、生徒、職員、保護者の協力を得て、全長約300mの観察路となった。

これらの作業と平行して、委員会活動の一つとして植物の名札付けが行われ、徐々にソフト面での整備もなされてきた。また観察路には小鳥の鳴き声を





集音するマイクが設置され、特別教室内でその声を聞くことができる。

ここで自然環境委員会について簡単にふれる。自然環境委員会は各クラスから2名ずつ選出され、顧問は主に生物の教員があたっている。委員会の仕事は、自然観察路の管理とともに自然の知識を高め、自然保護に関する運動への協力、緑化推進事業への参加等である。現在の委員会の仕事は、PTAによる校内緑化作業(具体的にはプランターへの花の植え付け)や自然観察路の補修作業、鳥の巣箱の作成と取り付け、緑化募金などである。過去には森の里の植物の紹介、緑化標語の募集なども行っていた。

3. 維持管理

観察路のその後の維持管理は、主にPTAの環境整備委員会の活動が中心となっている。PTAの環境整備委員会の主な活動は、校内の緑化作業として自然観察路の補修、花壇、プランターへの花の植え付け、鳥の巣箱付け、文化祭への参加などである。

自然観察路の補修は、土曜日の午後の時間を利用し、年1回行われる。例年60名ほどの会員の参加があり、チェーンソーや、スコップ、鎌などを使っ



て、老朽化して傷んだ資材の取り外しや新たな杭打ち、足場作りといった修理や改良工事、また観察路にかかった草を刈り取るなどの作業が行われる。作業後は、役員による豚汁などを囲んでの交流会や、学校からの近況報告等が行われる。

今後の維持管理については次のような組織を考え、近々発足する予定である。仮称“自然観察路活用及び管理のための合同研究会”は、管理職、事務、PTA、自然科学教育推進委員および自然環境委員会顧問(前者は教員の委員会組織、後者は生徒の委員会の顧問でどちらも主に生物科の教員が担当する)から構成される。この組織は観察路の維持管理だけではなく、斜面林の今後の植生管理を目的としている。

薪炭林は、本来15年から25年を周期として伐採され、切株からの萌芽によって新たに森林が更新される。また下草刈りや落葉かきなどの管理がなされて維持されてきた林である。本校の斜面林も放置されておそらく30年近くたっており、クヌギ、コナラ等は胸高直径が30cm以上、樹高も15mを超えるものも多い。また日照不足から枯れる木も目だってきた。自然の遷移に任せるのか、人為的に管理する

のか、今後の伐採等の管理について話し合い、作業をするための組織が必要となってきた。

用地の管理、備品財産管理は事務、また教材的意味合いと専門的な立場から生物科教員、具体的な作業の担い手として、今まで整備を中心としてきたPTAの環境整備委員、生徒の委員会の顧問、そして管理職を構成員として新たな組織を作る必要がある。そして、今後の職員等の入れ替わりを想定して、各構成部署ごとの文書等による申し送りが不可欠となってくるものと思われる。

4. 自然観察路の利用

最後に自然観察路の利用についてふれたい。かつて本校では2学年で理科Ⅱが開講されており、理科Ⅱの授業内で、自然観察のフィールドとして、植生調査、植物標本の採集の場、そのほか土壤動物などの生物教材採集の場として利用されていた。現在は、生物の授業内で、生態分野の観察、及び実習場所として活用している。主なテーマとしては、土壤動物・森林の階層構造・植物の遷移などである。



授業以外での取り組みとしては、コミュニティースクール、部活動での利用などがある。本校では、「県民の多様な学習要求に応え、本校の教育機能を広く地域社会の利用に供し、本校を地域に開かれた学習の場とする」という趣旨のもとにコミュニティースクールが開設されている。過去さまざまなテーマで開講されてきたが、平成4年度から3年間は、「自然と環境」というテーマでの講座が開かれていた。その際のフィールドとしても利用され、土壤動物の採集と観察、野鳥観察、森林の構造、生態系のしくみ等についての実習にも利用された。

その他の授業以外での活用としては、自然科学部のフィールドとして、またPTA、自然環境委員会、自然科学部の合同の活動として毎年、小鳥の巣



箱掛けが行われている。

しかし、現在観察路が十分に活用されているとは言い難く、また管理面についても今後の課題は多い。

授業や部活動で利用する機会を増やしてゆきたい。またそのためにはソフト面の充実を図るとともに、利用しやすい観察路の整備も進めて行くことが必要であると考えている。

校庭改造・ビオトープ・教育園・生態園造りのための文献紹介

常務理事 平田寛重

①校庭改造・ビオトープ・生態園造りの総論

- 植原彰 1993 校庭改造大作戦 学校で自然かんさつ:239-266 知人書館
- 植原彰他 1992 学校を生き物たちのオアシスにしよう 環境教育読本:138-147 教育開発研究所
- 今泉吉晴 199? 学校園の新しい考え方 都留文科大学社会科学部環境生態論研究室
- 岩瀬徹・川名興 1991 校庭に自然林をつくる 校庭の樹木:138-141 全国農村教育協会
- 亀山章 1990 生き物にやさしい環境づくり 私たちの自然(12)No.349:8-13 日本鳥類保護連盟
- 亀山章・樋渡達也 1993 水辺のリハビリテーション 230pp ソフトサイエンス社
- 勝野武彦 1988 緑地整備のニューウェーブ・自然の再生 私たちの自然(12)No.325:8-16 日本鳥類保護連盟
- 勝野武彦 1991 緑の先進国ドイツに学べ アニマ(1)No.220:38-42 平凡社
- 清里環境教育フォーラム実行委員会 1992 こんな校庭できるといいな 日本型環境教育の提案:185-219 小学館
- 森清和 1988 身近な自然のエコアップ 私たちの自然(3)No.316:10-15 日本鳥類保護連盟
- 森清和 1992a エコアップと都市の再生 エコロジカルデザイン:245-261 ぎょうせい
- 中川重年 雑木林 1989 自然と人間を結ぶ(自然教育活動8)(5):8-13 農文協
- 日本生態系保護協会 1995 学校ビオトープマニュアル 16pp 日本生態系保護協会
- 小寺伸 1993 生き物を観察できるスペースづくり 環境教育教材読本:96-99 教育開発研究所
- 小河原孝生 1993a 生き物のすみかをつくる一校庭の生態園 環境教育教材読本:60-66 教育開発研究所
- 大野正男 1993 こう考える自然復元 自然保護(3)No.370:5-7 日本自然保護協会
- ロビン・C・ムーア 1988 生命のダンスー子供の発達と屋外遊びのエコロジー 子供の想像力と創造性を育む:445-478 思索社
- 桜井善雄 1994 続・水辺の環境学 210p 新日本出版社
- 自然環境復元研究会 1993 ビオトープ 139pp 信山社サイテック
- 自然環境復元研究会 1994 水辺ビオトープ 142pp 信山社サイテック
- 自然保護財団(財)埼玉県野鳥の会 1989 ビオトープ緑の都市革命 102p
- 杉山恵一 1987a 自然教育のための場の創造について 環境教育のすすめ:74-94 東海大学出版会
- 杉山恵一 1987b 生態系と環境 都市の人間環境:205-241 共立出版
- 杉山恵一 1989 自然生態系の復元 私たちの自然(5)No.330:8-15 日本鳥類保護連盟
- 杉山恵一 1992a 自然環境復元入門 212p 信山社サイテック
- 杉山恵一・進士五十八 1992 自然環境復元の技術 170pp 朝倉書店
- 小学館 1994 わが家につくる小さな自然 BEPAL(10):53-82 小学館
- 富山敏 1988 街のなかのへびもモグラもすむ学校 自然と人間を結ぶ(自然教育活動4)(5):35-41 農文協
- 山本耕三 1996 ポット苗でふるさと森をつくる みんなでつくるビオトープ入門:136-147 合同出版
- 沼田真 1996 都市につくる自然 186pp 信山社サイテック

②トンボ誘致及び水辺造り

- 安藤康弘 1993 工事費ゼロのトンボ池作り BIRDER 1993(1):50-51 文一総合出版
- 新井裕 1988 トンボ公園をつくりたい(本物の水辺にはトンボがいる) 私たちの自然(6)No.319:6-13 日本鳥類保護連盟
- 君塚芳輝 1992 ミズガキを育む小学校 私たちの自然(1)No.362:6-13 日本鳥類保護連盟

- 君塚芳輝 1993 魚類の生息環境の保全と再生 水辺のリハビリテーション:55-71 ソフトサイエンス社
岸一弘 トンボ池づくりの功罪 追われる生き物たち:116 神奈川県立生命の星・地球博物館
森清和 1987 都市自然の自然保護を考える 私たちの自然(4)No.305:8-13 日本鳥類保護連盟
森清和 1989 水辺をつくる 私たちの自然(3)No.328:26-27 日本鳥類保護連盟
森清和 1991 ホタル、トンボがやってくる公園はこうやってつくる アニマ(1)No.220:34-37 平凡社
森清和 1992b ホタル文化復活のためのエコアップ 自然環境復元の技術:141-149 朝倉書店
守山弘 1988 トンボ池はまちづくりの一里塚 私たちの自然(10)No.323:8-15 日本鳥類保護連盟
野村圭佑 1991 工場跡地から東京下町の「トンボ公園・自然体験園」へ 私たちの自然(6)No.355:6-12 日本鳥類保護連盟
桜井善雄 1992 水辺に豊かな植生を エコロジカルデザイン:73-91 ぎょうせい
養父志乃夫 1988 都市自然の創造(トンボのすむ環境づくりと市民のかかわり方) 私たちの自然(6)No.319:6-13 日本鳥類保護連盟
養父志乃夫 1991 生きもののすむ環境づくりートンボ編ー 157p 環境緑化新聞社
養父志乃夫 1992a 都市におけるトンボの生息環境づくり 自然環境復元の技術:149-159 朝倉書店
養父志乃夫 1993 トンボの棲む環境づくり 水辺のリハビリテーション:86-103 ソフトサイエンス社
山本紀久 1993 水辺の植物 水辺のリハビリテーション:42-54 ソフトサイエンス社
矢鳥稔 1993 水辺の昆虫 水辺のリハビリテーション:72-85 ソフトサイエンス社

③チョウやその他の昆虫誘致及び草地・野原造り

- 藤丸篤夫 1995 ノイバラと虫たち たくさんのふしぎ(6)vol.123 40p 福音館書店
藤丸篤夫 1996 花の虫さがし 87pp 福音館
川島賢治 1992 多孔質空間を作ろう BIRDER (12):46-47 文一総合出版
小河原孝生 1993c チョウの育つ校庭づくりー昆虫の生態園 環境教育教材読本:71-75 教育開発研究所
大和田守 1987 身近な昆虫(庭や公園に虫を呼ぼう) 私たちの自然(7)No.308:10-15 日本鳥類保護連盟
杉本武 1993 校庭を利用した昆虫誘致園 ビオトープ:77-85 信山社サイテック
杉山恵一 1992c 身近な昆虫生態系の復元 自然環境復元の技術:129-141 朝倉書店
杉山恵一 1993 昆虫ビオトープ 220p 信山社サイテック
杉山恵一 1996 大学校内にミニモデルの昆虫ビオトープをつくる みんなでつくるビオトープ入門:210-220 合同出版
小学館 1991 吸密花と食草で造るバタフライガーデン BEPAL(4)No.118:91-97 小学館
海野和男 1986 春の空き地は陽がさんさん 私たちの自然(4)No.293:8-13 日本鳥類保護連盟
海野和男 1989 昆虫の住める環境作り 私たちの自然(12)No.337:8-13 日本鳥類保護連盟
養父志乃夫 1992b 野はらサンクチュアリーーの創造 エコロジカルデザイン:93-115 ぎょうせい
山下恵子 1990 花がえらぶ虫がえらぶ たくさんのふしぎ(8)vol.65 40p 福音館書店
矢野亮 1977 春の植物と虫の観察 私たちの自然(4)No.185:10-13 日本鳥類保護連盟
吉田喜美明 1992 環境教育と子供たち 私たちの自然(5)No.366:11-17 日本鳥類保護連盟

④野鳥誘致及び森・水辺造り

- 新井二郎 1987 庭やベランダのカントリー・ダイアリー 私たちの自然(11)No.312:12-18 日本鳥類保護連盟
藤本和典 1995 庭に鳥を呼ぶ本 80p 文一総合出版
中村登流 1992 傾斜地の高次利用による野鳥サンクチュアリーー エコロジカルデザイン:43-51 ぎょうせい
日本野鳥の会 1985 窓をあけたらキミがいる 158p 日本野鳥の会
小河原孝生 1992 鳥と住む環境の創造 自然環境復元の技術:159-166 朝倉書店
小河原孝生 1993b 鳥を呼ぶ校庭づくりー鳥類の生態園 環境教育教材読本:67-70 教育開発研究所

- 小河原孝生 1993c 水辺の鳥類 水辺のリハビリテーション:104-123 ソフトサイエンス社
 小河原孝生 1993d 鳥類のビオトープ ビオトープ:105-112 信山社サイテック
 小河原孝生 1996 東京港野鳥公園づくりの構想と手法 みんなでつくるビオトープ入門:200-209 合同出版
 杉山恵一 1992d 普通の自然の保全と活用 エコロジカルデザイン:3-21 ぎょうせい
 柚木修・陽子 1990 野鳥を呼ぶ庭づくり 126p 千早書房

⑤植栽する樹木等について（一部他の項目と重複している文献がある）

- 新井二郎 1987 庭やベランダのカントリー・ダイアリー 私たちの自然(11)No.312:12-18 日本鳥類保護連盟
 藤本和典 1995 庭に鳥を呼ぶ本 80p 文一総合出版
 伊藤正美・橋本英一 1971 野鳥の招き方 204p 文研出版
 神奈川県みどりのまち・かながわ運動推進協議会 1985 まちにみどりを呼び戻すために 30p
 日本野鳥の会 1985 窓をあけたらキミがいる 158p 日本野鳥の会
 高野伸二 1971 野鳥の好む植物 野生鳥類の保護:251-271 日本鳥類保護連盟
 柳沢紀夫 1976 野鳥を庭に 206p 家の光協会
 柚木修・陽子 1990 野鳥を呼ぶ庭づくり 126p 千早書房
 (財)サンワみどり基金 1985 続・樹の本 144p
 日本野鳥の会 1962 特集：鳥と木の実 野鳥(11-12)No.216

⑥自然教育園の活用例・森を使っでの学習例

- 岩瀬徹・川名興 1991 校庭の樹木 157pp 全国農村教育協会
 大阪教育大附属池田小学校 1992 個性を生かす授業の創造 156pp
 森林文化教育研究会編 1992 森林文化教育の創造と実践 291p 日本教育新聞社
 渡邊和俊 1990 身近な自然を豊かにとらえる雑木林での活動 採集と飼育(11):496-497
 全国小中学校環境教育研究会編 1992 環境教育ハンドブック 304p 日本教育新聞社

⑦その他の参考になる書籍

- いきものまちづくり研究会 1992 エコロジカルデザイン 301pp ぎょうせい
 清里環境教育フォーラム実行委員会 1992 日本型環境教育の提案 432pp 小学館
 教育開発研究所編 1992 環境教育読本 296pp 教育開発研究所
 教育開発研究所編 1993 環境教育教材読本 316pp 教育開発研究所
 ジェニファー・コ克蘭 1991 都市は生物をかえる 47p ほるぷ出版
 杉山恵一監修 1996 みんなでつくるビオトープ入門 246pp 合同出版

座談会

通算 50 号発行を振り返って

出席者 常務理事 3 名 杉浦嘉雄 杉田優児 平田寛重

杉浦 まずは、それぞれが愛研と関わるようになっていきさつあたりから話し合っていきましょう。

私は、20年くらい前、中学校の教員時代にバードウォッチングの楽しみを知りました。バードウォッチングも初めは読書とか音楽と同じような個人的な趣味の一つでした。しかし、それなりに自信がついてくると、だんだんに生徒を指導してみようかと考えるようになり、学校教育にどう生かしたらいいのかその技法を知りたいと思うようになりました。もっとも、それまでに3～4年かかりましたが。その後、(財)日本鳥類保護連盟の「私たちの自然」で愛鳥教育研究会のことを知りました。

平田 愛研は入ってみてどうでしたか？ 期待したものはありましたか？

杉浦 いいえ。牧歌的で入りやすい団体だと思いましたが、その理論が確立されているとの感じは受けませんでした。でも、情報交換の場として役に立ちました。

平田 私の場合、1983年に就職したその学校が愛鳥モデル校でした。松田道生さんが雑誌「アウトドア」に愛研の紹介をなさっていて、それで、その年の6月に日光で行われた研修会に参加しました。しかし、鳥については無知の状態でした。その後、斉藤一紀さんから、常務理事をやってほしいとの話がありました。

杉浦 最初に赴任した学校が愛鳥モデル校だったというのが、大きいきっかけのようですね。

平田 あの学校に行かなければ鳥をやることはなかったでしょう。その後、校内研究は終わりましたが、愛鳥モデル校としての活動は、私が担当にならずと続けていました。

年間計画を立て、それなりに活動の実績もあげなくてはなりませんでしたが、何のためにやっているなどと考える余裕はなく、他の学校に移動してそ

の現場を離れてから、そういうことを考えるようになりました。

杉浦 ノウハウが欲しかったのですか？

平田 そういったものは、きちんとしたものがあつた方がいいなとは思いました。例えば、市町村別の鳥類リスト、愛鳥教育を進める上でのマニュアルなどです。

それで、市町村別の鳥類リストについては、結果的に私が神奈川県のは全部作ってしまいました。ただ、マニュアルについてはそのままになっています。

杉浦 これについては、今の会員の人達が望んでいることと同じですね。

平田 機関誌「愛鳥教育」については、37号から結構気合いを入れて取り組み始めました。島田利子さんが常務理事になった時と重なりますが。

杉浦 最初はわけもわからないままに実践の時代を過ごしたけれども、その後の比較的ゆとりのある段階で理論的なことも身につけてきたというわけですね。

平田 理論面は、浜口哲一さんのような方に教えていただいたり、いろいろな研修会に出て得たり、本を読んで得たりしました。学校が変わって、手が空いたというか、愛鳥活動に直接関わらなくてよいという余裕もあったので、いろいろなことを整理し始めてみたのです。

杉浦 それで、今まで培った力を出したくなってきたんですね？

平田 発信できる段階になってきたということだと思います。

杉田 私の場合は、大学を卒業し、学習指導要領の改訂に関する流れを目の当たりにしながらも、基本的には学習指導要領だけでやっていたという感じがです。

学習指導要領の理科の大目標には、「自然を愛護する気持ちを育てる」というような文言がありますが、現場での授業研究はそれからちょっと遠いところにあるということを感じていました。野生生物がどうなっているとか、自然環境が地球規模でどうなっているとかいったことまで議論が広がっていかないわけです。

そんな時に、(財)日本鳥類保護連盟がサントリーといっしょに、月1回出していた新聞広告を見ました。それで「庭に小鳥を」などの資料を送ってもらったところから野鳥の世界につながるようになりました。そして、探鳥会に参加して、改めて野鳥観察のおもしろさを実感しました。

ですから、私は、愛鳥教育をやらなければならないといった必要に迫られて入会したタイプではありません。何のための自然教育、理科教育なのかということについて、指導要領にとらわれず、もうちょっと広い観点から考えてみたかったのです。

杉浦 まだ愛研には入会していませんでしたよね。

杉田 ええ。「私たちの自然」に時々出る愛研の記事を読んで、学校単位で取り組んでいるところがあることを知りましたが、自分が実践するというまでにはなかなか気持ちが高まりませんでした。ですから、ちょっと参加してみようかとか、バードウォッチングは面白いと感じ出している人達に、情報をもっとたくさん流す工夫が必要だと思います。

杉浦 愛研が専門集団のように見えてしまったということですか。

杉田 鳥だけで教育をやるという人達の集まりというイメージもありましたね。

杉浦 PR不足ということでしょうかね。

平田 愛研が何のためにできたのかという話に移りましょう。昔の機関誌を調べてみると、かつての鳥獣保護実績発表大会の受賞校の人達がネットワークあるいは情報交換の場として発会させ、連盟も愛鳥

教育の普及ということから全面的に支援をしたということがわかります。

愛鳥教育の歴史的に見ていきますと、戦後GHQの肝煎りで愛鳥週間ができ、明治時代から結構大量に殺戮されていた鳥を守るということが始まりました。しかし、鳥類研究者はそれなりにいるけれども、普及という面では非常に遅れていたと思います。野鳥保護といえば巣箱、バードウィークといえば巣箱、そういうイメージが現在でも根強く残っています。

それでも、この10年くらいの間に、鳥に関わる人たちも増え、巣箱をかければよいというものではないということが議論され始めているのはよいことだと思います。やはり、鳥学の研究成果が教育普及に結びつくことが大切ですね。

杉浦 愛鳥教育研究会にとって大事な二つの方向性があると思います。一つは、教育普及、輪を広げるという方向。もう一つは自然保護技術のレベルアップです。その二つの重要な面を「巣箱」の中に見てとれるように思います。

例えば、巣箱は野鳥との出会いの道具として非常に魅力があります。しかし、保護の技術としては、やはりその限界があります。愛鳥モデル校や実績発表大会の在り方を含めて、巣箱ばかりをやってきた経緯については、これはかなり反省しなくてはいけないでしょう。

従って、これからは、それぞれの方法の持つ意味合いを教育普及・自然保護技術の両面から理論的に明らかにしながら進めていく必要があると思います。

杉田 後から参加した者から見ると、受賞校連盟として発足した経緯があるとは言いながら、いったん動き出した時点である種の理念的な意味合いがそこに現れたと考えられるのです。その意味で、愛鳥教育を広く考えていきたいと思うのです。

しかし、愛鳥教育は「教育」ですから、それを受けた生徒なり子供が、将来どういう人間に育ってほしいのかということが原点です。そのため、成人した時点で社会運動としての自然保護にどのように関わってもらいたいのかということが先送りされることになってしまうのでしょうか。

平田 愛鳥教育に自然教育としての意味合いがある

ということですね。

杉田 そうですね。ですから、環境教育についても、単純に環境問題を解決するための技術的教育ではないだろうと考えるわけです。やはり、問題の本質を正しく認識できるような人間を作るのが大事であり、その意味で、自然科学教育というものが適正に行なわれる必要があると考えています。

平田 環境教育というカテゴリーその中に自然教育の部分があり、その自然教育の中に愛鳥教育があると考えています。

何のためにやるかといえば、先ずは「自然認識」が第一です。自然の仕組みやそのつながりについての知識を身につけるということです。そして、そのきっかけに鳥を使うということなのです。

子供の時からの鳥への思いとか自然への思いということが背景にあることで、自然を常に頭においていろいろな対応をとるようになっていく人間が育つのだと思います。ナチュラルリストを育てる教育ですね。単に情操的な面を目指して教育をするわけではなく、それは自分と自然との関わりの中で結果的に育っていくものであると思います。

杉浦 環境教育については、何でも環境教育になり得るということがあるくらい広いものです。そういう意味では、具体的な野鳥というものを通した愛鳥教育は、基準の示しやすい確実な環境教育の一つの手法だと思います。ですから敢えて「自然教育」と言わなくてもいいかなとも思っています。

科学的な認知だけでなく文化的なものも含めて環境教育というものを広義にとらえたら、自然保護環境教育を中心とした、あるいは自然を見る目をテーマに絞った自然教育の中の具体的なジャンルのひとつとして愛鳥教育は成り立つのかなと考えています。

それから、情操教育というのはあえて意識的に言った方がいいように思っています。というのは、今の子供たちはフィールドを持つ以前の原体験を持っていないとか言われます。原体験を持たない人間の情操がどうなるのかと考えると、こちらで仕掛けをしないと、ひょっとして恐いことになるかもしれないぞとも思うのです。

そういう原体験の教育は、本来、地域教育か家庭教育の中で行われるべきものだと思いますが、それ

ができないとしたら、学校教育が分担することも有り得るとも考えられます。

科学の知と神話の知というキーワードがあるとしたら、今の子供たちってというのは薄っぺらに科学の知を知ってるんだということです。環境問題でも、〇×クイズをやると今の大人よりもよく知っていると思う。しかし、自然の情報については欠如していると思います。ですから、愛鳥教育の中でいかに情操教育としての仕掛けができるかということも大切であるように思います。

例えばインディアンの方は高貴なコスモロジーを持っていたと思います。しかし、日本人はそれがいからといって、そこには帰れないわけです。科学の知を知ってしまった私たちは神話の知だけでは生きていけないはずだからです。やはり両方が必要だと思いますね。

杉田 人間を作る教育というのは、小さい子供だけでなく、成人した大人にとっても全く同じ方法がそのまま適用できる奥の深さというものがあるように思います。そういう意味で、愛鳥教育は「生涯教育」としても捉えることができるように思います。

ですから、環境教育の中に自然教育があって、自然教育の中に愛鳥教育があるというのは、図式としてはよくわかりますが、その前に人間教育ということで愛鳥教育も同根であるということに理論的な背景を求めたいと思っています。

杉浦 RSPBの青少年組織のYOC。今はもう30万人くらいの規模になっているらしいけれど、それだけ広く国民に、あるいは青少年に行き渡ってる例ですね。そういう潜在的可能性が日本の場合、あるいはこの愛鳥教育にあり得るのどうか。

杉田 鳥類保護連盟が、愛鳥教育ということの一つの柱として立てて、それを「野鳥保護の集い」とか「実績発表大会」とか「ポスターコンクール」とか、いろいろなイベントを通して世の中に広める運動を続けてきていると思います。

かたや、連盟がそれだけ取り組みながら、50年も関わってきて、なかなか愛鳥教育が立ち上がらない現実があります。それはなぜなのでしょうね。

私は、学校の教員でもあるので、要は義務教育段階で、日本国民としての常識として野鳥を含めた自然観察が定着する状況が出現しなければならないの

だと思っています。現在は、学習指導要領の中にも記述されていないわけで、話題として上がる機会がほとんどありません。愛鳥モデル校などは極めて特殊なのだということです。

杉浦 連盟と愛鳥教育研究会の関係を、例えばRSPBとYOCの関係と比較して考えてみます。すると、構造的に全く違うのは、YOCは「子供が楽しむ」ためのクラブだということです。

RSPBは、野鳥の会的な集団だと思いますが、目的が連盟的なものを持った部分があった。それで、会員が20万人くらいになり、資金にもゆとりができた頃に、次の世代の子供たちにもそういう機会を与えたいという構想が出てきたわけですね。

YOCの子供たちは、最初の段階から自然との出会いがあるわけです。RSPBの各地域のサンクチュアリには、学校単位で出向くとその自然について指導してくれるシステムがあります。やがて子供たちがだんだん大きくなり、RSPBにも入会し、自分たちの後輩を指導するリーダーも出てきます。それに従って、『愛鳥教育』でも翻訳して紹介した指導マニュアルも作られてくるというわけです。

私たちはどうもその逆をやってるような気がします。愛鳥教育のマニュアルをどうしようとか理念をどうしようとか議論しているわけですが、子供たちの現場での体験の部分がいないということがおかしいのだと思います。

これからの愛鳥教育研究会がやるべきことの一つとして、とにかく会員が多くなればいいんだとは思わないけれども、やはり輪を広げていくことが必要だと思っています。例えば、子供鳥博士とか子供エコクラブとかいったようなもので。

そして、そういうものは自然発生的なものがより望ましいと思います。実績発表大会に出てくる学校や団体は、ある意味ではエリート集団です。エリート集団のネットワークだけで輪が広がるとは思えません。

平田 学校を相手にするのではなく、直接子供を相手にするという発想ですね。確かに、学校の枠組みを変えていくのは難しいことです。やりたくない人がやるから無理なんだということもあります。

杉浦 ですから、愛鳥教育のマニュアルを作り上げ

て、その後、方向転換をするということも考えられますね。

平田 普及ということを考えるのだったら、指導者に普及するより直接子供に普及したほうが意味で賢いというわけですね。それが故山階芳麿連盟会長の考えでもありました。

杉浦 RSPBとYOCのような関係で将来的に発展するのはどこの組織なんでしょうね。また、たとえ中央でいくら研修をしても、地元で頑張ってくれている人達がいなくてだめですね。子供たちの教育にまで取り組むのを含めて、どういう人達がそれをやることになるのでしょうか。

平田 まだその時期でない、採算が取れない、スポンサーを集めても一発花火で続けてやってくれる人がいない、子供の面倒をみるというのもそう簡単ではない……………。

杉田 そういった意味では、学校の外においても、学校の教員の出番が社会的に要請されているとも考えられます。

平田 でも、休みの日に教員みたいな仕事をするのはつらくはないでしょうか。

杉田 東京地区の私立小学校の理科部会で、「親子で自然を楽しむ会」を昨年11月に実施しました。とりあえず、年1回だけでも。指導スタッフは、思いの他たくさん集まりました。自然の中に出ることは、それ自体で楽しいことなので、あまり心配するようなことでもないように思いました。

それより、学習指導要領や教科書には全くとは言わないけれども、自然観察という観点は入っていませんね。それが問題だと思っています。

植物を例にとれば、アサガオやヘチマといった栽培植物については理解しても、身近な野草などには目が向きません。こういう構造が変わらない限り、自然環境に対する認識が深まったり広まったりということは考えにくいですね。こういうところにも愛鳥教育の意味があると思います。

杉浦 この先数年で完全週5日制になる可能性があります。そうすると、土日のサブスクールが塾にな

るか自然学校になるか、興味あるところですね。学校の先生がボランティアということで自分も気分転換をしながらほかの生徒を教えるのもいいし、プロ集団が生まれてもいい。

杉田 教員が休日は児童生徒から解放されたいというのは事実でしょう。しかし、子供の本当の幸せや育成ということを考え、社会全体が精神的なものも含めて豊かになることを願うのであれば、そのための方法や仕組みというものについてもっと関心を持って欲しいと思いますね。そして、そういったことが可能になる組織作りなどの方策が必要なのだと思います。

平田 まず、学校の周り、自分たちの周りを見てみるのが大切だと思います。近所でも捨てたものではないということがわかりますし、故郷意識も形成されます。

杉浦 こういう時には、教える以前に楽しさや好奇心をかき立てられるようなことを自然との交流の中でやればいわけです。そういった点では、バードウォッチングは空飛ぶ宝探しのようですね。

平田 それだと、楽しければ何をしても良いという風潮になりやすい。

杉浦 情操のために何かをするのではなく、楽しむためにやる。それが結果的に情操につながるということでしょう。

情操を前面にだすより「原体験を充実させるため」といった方が誤解を与えないと思います。

私の原体験を言えば、昔子供のころに昆虫などいろいろなものを殺してきた。今思えば残酷だが当時は分からなかった。今の子供達はほとんど殺したりはしない。しかし、その反動で、例えばいじめなどの方に向いてるような気がします。

平田 親しむ部分の研究としては、情操的な面も含めて、楽しいということだけで良いでしょう。ただし、自然理解ということについては、理科教育でそのためのカリキュラムを組む必要があると思います。もっとも、指導の実際場面ではカリキュラムやマニュアルよりもプロセスの方が大事だということもあります。

杉田 「親しむ・知る・守る」といった段階を踏むという議論があります。これと併せて、初級・中級・上級のプログラムを構想する必要があると考えています。

もちろん、単純に自分の楽しみだけのためにやるのが初級レベルで、自分を捨てて他のために捧げ尽くすのが上級というわけではありません。しかし、ある程度の楽しみを知ると、楽しむだけでは物足りない別の思いが出てきます。そういったことについての原理的な検討が加えられつつ、方法論が議論される必要があると思います。

杉浦 今の上級・中級・初級という提案は仕組みとしておもしろいと思います。それで、そういう取り組みをする時には、教材開発だとか教育普及の際の協力関係だとか、そういったところの図式まで見たくくなりますね。

平田 こういった議論を広げるのに、インターネットの利用といったことも考えられますね。

杉浦 子供版の愛鳥教育のシステムを作るというのはどうでしょう。通信教育という形式もある得ると思います。

平田 「愛鳥教育」も大人中心ではなく子供中心の雑誌にしたらいですかね。本を出してもイベントがなければやはりつまらないですしね。子供向けの図鑑を作るとか、いろいろなことが考えられます。

杉浦 もっと会員が増えれば、いろいろなイベントもできますね。今の会員は学校の教師に限っているけれども、それを思い切って子供にも広げたらどうかとも思います。子供のための指導方法や楽しみ方のノウハウなどのページを作り、それをどんどん出して行くという方法も検討する価値があると思います。

杉田 私たちも、広く会員の意見を集める努力をし、組織として聞く耳をもたなければいけませんね。

杉浦 会員の立場に立つといろいろと見えてくるものがあります。とりあえず、現段階では、愛鳥教育

のマニュアルを完成させることですね。次に、運営するのは大変なことですが、室内研修会のようなものを定期的に開催すること。「全国野鳥保護の集い」で開催できたらいいと思います。

毎年同じテーマで行い、それが年中行事になったら素晴らしい。その地域の事例も出し、ディスカッションをし、基調講演をする。また愛鳥教育研究会の宣伝もし、マニュアルや教材のことも知らせるといったように。

杉田 せっかく神奈川で平田さんたちがやってくれても、その後が続かなかったのが何と言っても残念ですね。

平田 それは予算が県で決まっているために、連盟としてもそれほど強く言えないという難しい事情もあるようです。

杉田 しかし、将来、実現できたらという思いは変わりませんね。

杉浦 まずは、マニュアルの完成に向けて頑張りましょう。

	年月日	場所	事業名	講演	実践報告
1	1980.05.17	東京都渋谷山階鳥類研究所	愛鳥教育研究会発会式、第1回研究会	柴田敏隆：愛鳥行1校の指定をうけたら	梅本登：愛鳥モデル校のあゆみ（東京都五日市立戸倉小学校）
2	1980.07.31		会誌NO.1.16P発行		
3	1980.08.23	東京都目黒区自然教育園	第2回研究会	矢野亮：自然観察の方法について	渥美守久・鈴木武一：広げよう 愛鳥の輪を（愛知県蒲郡市立形原北小学校）
4	1980.11.20		会誌NO.2.12P発行		
5	1980.12.01	環境庁2F第7会議室	第15回全国鳥獣保護実績発表大会		
6	?		第3回研究会?		
7	1981.03.31		会誌NO.3.20P+22P発行		
8	1981.05.30	東京都目黒区自然教育園	81年度総会、第4回研究会	千羽晋示：自然教育園の野鳥	片岡一郎：栃木県茂木町立千本小学校の愛鳥活動について
9	1981.07.01		愛教NO.4.10P発行		
10	81.8.19-20	東京都御岳山うつぼ屋、御岳山ビジュアルセンター	夏季研修会：第5回研究会	柳沢紀夫：野鳥の見分け方	栗田龍司：本校の愛鳥活動（神奈川県秦野市立町小学校）／栗原仁：地域の自然を見つめる愛鳥活動（東京都福生市立第5小学校）
11	1981.10.01		愛教NO.5.12P発行		
12	1981.11.20	環境庁	第16回全国鳥獣保護実績発表大会		
13	1982.01.31	千葉県市川市行徳野鳥観察舎	冬期研修会：第6回研究会		
14	1982.03.31		愛教NO.6.20P+26P発行		
15	1982.6.5-6	栃木県日光レクリエーションセンター	82年度総会（役員改選）、第7回研究会		赤城敏子：街の中の野鳥（東京都世田谷区立二子玉川小学校）
16	1982.07.01		愛教NO.7.8P発行		
17	82.8.10-11	東京都御岳山うつぼ屋、御岳山ビジュアルセンター	夏季研修会	田村浩三：御岳山の野鳥／柳沢紀夫：まぜず25種の野鳥	梅本登：愛鳥のはばたき（東京都五日市町立戸倉小）／豊田昌利：羊毛の保護活動（愛知県豊橋市立豊岡中学校）
18	1982.10.10		愛教NO.8.18P発行		
19	1982.11.29	環境庁	第17回全国鳥獣保護実績発表大会		
20	1983.01.30	東京都上野不忍池	カモ観察会	福田道雄：不忍池のカモとカワウ	
21	1983.03.20		愛教NO.9.18P+36P発行		
22	1983.6.4-5	栃木県日光レクリエーションセンター	83年度総会・研究会		大橋一成：愛鳥活動と愛鳥意識の高揚（栃木県日光市立中宮祠小学校）
23	1983.07.01		愛教NO.10.??P発行		
24	83.8.11-12	東京都御岳山うつぼ屋、御岳山ビジュアルセンター	11回夏季研修会	中坪礼治：鳥との接し方、映画：尾瀬の四季／松田道生：御岳山の野鳥	渥美守久：愛鳥教育をどのようにすすめてきたか（愛知県蒲郡市立形原北小学校）
25	1983.11.01		愛教NO.11.29P発行		
26	1983.11.21	環境庁（新装）講堂	第18回全国鳥獣保護実績発表大会		
27	1984.02.10	東京都中央区浜離宮	観察会		
28	1984.04.01		愛教NO.12.12P+23P発行		
29	1984.6.2-3	長野県野辺山YMCAセンター	84年度総会（役員改選）		
30	1984.8.8-9	神奈川県箱根町仙石原、レクリエーションセンター	夏季研修会		
31	1984.08.20		愛教NO.13.24P発行		
32	1984.11.19	環境庁	第19回全国鳥獣保護実績発表大会		
33	1984.12.15		愛教NO.14.14P発行		
34	1985.01.27	東京都明治神宮御苑	冬期研修会		
35	1985.04.20		愛教NO.15.21P+23P発行		

～96.12.31

ワークショップ	報告・案内	その他	備考
意見交換会	愛教NO. 1	三重・新潟・栃木・三宅島などから参加 編集:柳沢紀夫	事務局:渋谷区南平台
意見交換会	愛教NO. 2	参加者40名程広島・三重・愛知などから参加 編集:柳沢紀夫	
翌12.24環境庁で意見交換会	愛教NO.3/私たちの自然NO.231	一席:愛知県豊橋市立豊岡中学校 編集:柳沢紀夫	参加11校 記録がなく、詳細は不明 巻末:実績大会記録
自然教育園内の自然観察/意見交換会	愛教NO.4	参加者15+a名	
	夏期研究会の案内		
早朝探鳥会:20数種/意見交換会	愛教NO.5		
	16回実績大会の案内		
翌日の11.21意見交換会	愛教NO.6.私然NO.243	一席:神奈川県秦野市立本町小学校	
カモ類の観察、種数などの記録はない/話し合い	愛教NO.6	26名参加 巻末:実績大会記録	事務局:渋谷区宇田川町に移転
総会、探鳥会光徳牧場、中禅寺湖、戦場ヶ原など39種/意見交換会 交換会	愛教NO.7	福井・愛知県からの参加	
	第5回愛鳥作品コンク-4、夏期御岳山研究会の案内		
早朝探鳥会:27種/意見交換会	愛教NO.8	参加22名	表紙変更
	不忍池自然観察会の案内	編集:松田道生	
第1回前日祭:明治神宮で観察会24種	愛教NO.9.私然NO.255	一席:愛知県蒲郡市立形原北小学校	
カモの観察:19種	愛教NO.9	参加64名子供の参加が多い 編集:松田道生、宗形康、巻末実績大会記録	
総会、探鳥会光徳牧場、中禅寺湖、戦場ヶ原など36種/意見交換会	愛教NO.10	参加30名、山形・愛知の参加有り	
	夏季御岳山研修会の案内	編集:松田道生、宗形康	
松田道生/御岳山の野鳥、早朝探鳥会:24種/意見交換会	愛教NO.11	参加34名、宮城・大阪からも参加 編集:松田道生、宗形康	
	愛教NO.12.私然NO.267	一席:東京都世田谷区立船橋小学校	
第2回前日祭:明治神宮での観察会22種(今回で終わり)	愛教NO.12.私然NO.267		
連盟主催の野鳥たちとの集いの午後の観察と共催?	記録無し。NO.13の総会資料で場所だけわかる		
		巻末:実績大会記録	松田担当外(後任は斎藤)
探鳥会:海の口自然郷、廻り目平キャンプ場付近25種/懇談会	愛教NO.13	参加18名	
探鳥会・仙石原(田代道彌氏が1日)26種、神山21種、まとめて37種/意見交換会	愛教NO.14	参加20名	
	愛鳥教育研究会会員名簿		
	愛教NO.15.私然NO.279	一席:東京都福生市立第5小学校	
	明治神宮での冬期研修会の案内、NO.13会員名簿のお詫びと訂正		
探鳥会のみ24種	愛教NO.15	参加8名	
	山中湖夏季研修会の案内、愛鳥週間お礼-募集	巻末:実績大会記録	愛研北海道支部誕生

	年月日	場所	事業名	講演	実践報告
36	1985. 6. 1-2	山梨県山中湖YMCAセンター	夏期研修会	柳沢紀夫：場集まる野鳥	杉田優児・杉浦嘉雄：理科教科書（小・中）及び学習指導要領（理科）に於ける鳥類の扱いに関する調査
37	1985. 07. 15		愛教No. 16. 22P発行		
38	1985. 08. 12	千葉県安孫子市山階鳥類研究所	85年度総会		栗原仁：愛情豊かな子供を育てる愛鳥活動（東京都福生市立第5小学校）
39	1985. 11. 15		愛教No. 17. 18P発行		
40	1985. 12. 18	環境庁	第20回全国鳥獣保護実績発表大会		
41	1986. 01. 26	東京都二子玉川～和泉多摩川（多摩川）	冬期研修会		
42	1986. 03. 20		愛教No. 18. 10P+23P発行		
43	1986. 6. 7-8	静岡県御殿場大中学	夏期研修会		
44	1986. 07. 20		愛教No. 19. 18P発行		
45	1986. 08. 10	東京都学習院初等科	86年度総会（役員改選）	中坪礼治：野鳥のオアシス・ビデオ	岩淵成紀：蒲生干潟・海岸の自然と愛鳥教育（宮城県仙台市立中野小学校）
46	1986. 11. 10		愛教No. 20. 23P発行		
47	1986. 12. 01	環境庁	第21回全国鳥獣保護実績発表大会		
48	1987. 01. 25	東京都多摩市多摩川関戸橋	冬期研修会		
49	1987. 03. 10		愛教No. 21-22合併号. 21P発行		
50	87. 6. 12-14	東京都三宅島おしどり	夏期研修会		
51	1987. 08. 10	東京都高尾自然科学博物館	87年度総会	金井都夫：高尾の自然	
52	1987. 08. 31		愛教No. 23. 33P発行		
53	1987. 12. 03	環境庁	第22回全国鳥獣保護実績発表大会		
54	1988. 01. 20		愛教No. 24. 36P発行		
55	1988. 01. 31	東京都多摩市多摩川関戸橋	冬期研修会		
56	1988. 03. 27	東京都多摩市多摩川関戸橋	冬期研修会		
57	1988. 03. 31		愛教No. 25-26合併号. 13P発行		
58	88. 6. 18-19	長野県富士見高原と村田の森	夏期研修会		細谷賢明：日中愛鳥教育交流報告 / 杉田優児：日仏交流報告
59	1988. 07. 25		愛教No. 27. 43P発行		
60	1988. 08. 10	千葉県安孫子市山階鳥類研究所	88年度総会	金井都夫：中型獣の人接近	
61	1988. 11. 30		愛教No. 28. 11P発行		
62	1988. 12. 06	環境庁	第23回全国鳥獣保護実績発表大会		
63	1989. 01. 28	東京都世田谷区民会館	冬期室内研修会	矢野亮：自然と子供の生活	長屋昌治：愛鳥活動（世田谷区立松ヶ丘小学校）
64	1989. 02. 19	東京都福生市多摩川昭和用水堰付近	冬期野外研修会		
65	1989. 03. 15		愛教No. 29-30合併号. 21P発行		
66	1989. 7. 1-2	山梨県清里クラブ協会	89年度総会（役員改選）・夏期研修会	金井都夫：がいのほなし	
67	1989. 07. 31		愛教No. 31. 33P発行		
68	1989. 11. 30		愛教No. 32. 27P発行		
69	1989. 12. 18	環境庁	第24回全国鳥獣保護実績発表大会		
70	1990. 02. 04	東京都墨田区荒川下流	冬期研修会		

ワークショップ	報告・案内	その他	備考
探鳥会：平野、旭ヶ丘付近：47種/意見交換会	愛教No.16	参加20名	
	山階鳥研での総会の案内、静岡県野鳥愛鳥校のつどいの案内、東京都船橋小の研究発表の案内	編集：杉浦嘉雄	愛研静岡支部誕生
山階鳥研：書庫・標本室の見学	愛教No.17	参加19名	各支部長を理事にする
	冬期研修会の案内、第20回実績大会の案内	編集：杉浦嘉雄	
	愛教No.18、私然No.291	一席：神奈川県秦野市立南が丘小学校	
探鳥会：31種	愛教No.18	参加80名ほとんどが子供	
	添付：御殿場での夏期研修会の案内	編集：杉浦嘉雄	
模鳥作り、探鳥会須走登山口、腰切塚など27種	愛教No.19	参加20名	
	学習院初等科での総会の案内	編集：杉浦嘉雄	
	愛教No.20	規約改正、会長交代	
	多摩川での冬期研修会の案内、実績大会の案内、少年少女愛鳥作品コンクールの募集案内、全国愛鳥教育研究会新役員名簿、ツグス被害調査依頼（連盟）	編集：杉浦嘉雄	
	愛教No.21-22合併号別冊付録、私然No.303	一席：愛知県東栄町立月小学校	
探鳥会：42種	愛教No.21-22合併号	参加30名	
	夏期研修会の案内、総会の案内、連盟/こども鳥博士応募方法	編集：杉浦嘉雄、別冊付録実績大会記録集	
探鳥会：大路池、富賀神社等36種、交流会	愛教No.23	参加20名	
探鳥会（高尾山）	愛教No.24	参加22名	
		編集：杉浦嘉雄	RSPB講座始まる
	愛教No.25-26合併号に別冊付録、私然No.315	一席：神奈川県秦野市立末広小学校	
	冬期研修会の案内	編集：杉浦嘉雄	
探鳥会、ツグス拾い		連盟と共催	
探鳥会	報告無し	参加50名、No.28総会資料より/編集：杉浦嘉雄	
	夏期研修会の案内	編集：杉浦嘉雄、別冊付録実績大会記録集	金井副会長が会長代行
探鳥会：林間周辺、稗の底村自然観察路45種	愛教No.27	20名	
	総会の案内	編集：杉浦嘉雄・杉田優児	
山階鳥研施設見学	愛教No.28		江袋新会長選出
	冬期室内研修会・冬期野外研修会の案内	編集：杉浦嘉雄	
	愛教No.29-30合併号の別冊付録、私然No.327	一席：宮城県仙台市立中野小学校	
?野鳥と図画工作/研究協議：効果的な愛鳥教育の進め方	報告無し	参加100余名、29-30に記録有り、No.32総会資料	
探鳥会	報告無し	20名（No.32総会資料より）	
		編集：杉浦嘉雄/別冊付録実績発表大会記録	
環境教育プロジェクトのワークショップ/バナー作り、ツグス拾い、ツグス拾い、立体俳句/探鳥会9種	愛教No.32	参加27名	
		編集：杉浦嘉雄	
	冬期研修会のお知らせ	編集：杉浦嘉雄	
	愛教No.33の別冊付録、私然No.339	一席：神奈川県秦野市立北小学校	
探鳥会（雨天中止）	愛教No.33	役員のみ参加鳥20種余り観察	

	年月日	場所	事業名	講演	実践報告
71	1990.03.31		愛教No.33.27P発行		
72	1990.08.07	千葉県安孫子市山階鳥類研究所	90年度総会		
73	1990.09.30		愛教No.34.26P発行		
74	1990.12.02	東京都江戸川区葛西臨海公園	冬期野外研修会		
75	1990.12.06	環境庁	第25回全国野生生物実績保護大会(名称変更)		
76	1990.12.28		愛教No.35.22P発行		
77	1991.01.27	東京都世田谷区教育センター	室内研修会		長屋昌治・中田裕啓：東京都世田谷区における愛鳥教育／小林徳博・江原広美：神奈川県秦野市における愛鳥教育／岩木晃三・次田昌江：埼玉県における愛鳥教育
78	1991.03.31		愛教No.36.40P発行		
79	1991.05.18	東京都大田区大井野鳥公園	91年度総会(役員改選)		堤 達俊：大井野鳥公園における学校遠足での愛鳥教育のプログラム化
80	1991.06.30		愛教No.37.28P		
81	91.08.06-7	北海道苫小牧市、札幌市	北海道夏期研修会	三浦二郎：私の愛鳥教育／金井都夫：巨視でみる北海道の自然	石山博之：厚床小学校／長谷川順一・梶浦孝純：札幌市立藤の次小学校／広瀬恵子：いしやま中央幼稚園／島田利子：野鳥マップを作ろうよ／杉浦嘉男：テグス回収活動
82	1991.10.31		愛教No.38.36P		
83	1991.12.09	環境庁	第26回全国野生生物保護実績大会		
84	1991.12.20		愛教No.39.28P		
85	1992.05.09	神奈川県秦野市立図書館	全国愛鳥教育指導者交流会：後援		藤池安代：生活科開発単元小学校1・2年「こんにちは、ツバメさん」「つばめさんと一緒に！」の実践を通して(神戸市教育センター)／梅本登：年間指導計画特設「はばたきの時間」での愛鳥活動の取り組み(五日市町立戸倉小学校)／新津亨：全校で取り組む愛鳥活動(秦野市立南が丘小学校)／苗川博史：高校「生物」の中でツバメ類を使った学習の取り組み(湘南工科大学附属高校)
86	1992.05.30	神奈川県平塚市博物館	92年度総会	浜口哲一：こんなテーマで鳥を調べてみよう	
87	1992.07.31		愛教No.40.58P		
88	92.10.10-11	神奈川県南足柄市ふれあいの村	秋期研修会		
89			身近な野鳥完成(3000部?)		
90	1992.12.07	環境庁	第27回全国野生生物保護実績大会		
91	1993.01.31		愛教No.41.52P		
92	1993.03.31		愛教No.42.24P		
93	1993.04.29	東京都目黒区自然教育園	93年度総会(規約改正・役員改選)	矢野亮：都市の中の自然	
94	1993.07.31		愛教No.43.23P		
95	1993.11.22	愛知県蒲郡市立西浦小学校	93年度冬期研修会	国松俊英：減びゆく鳥「トキ」	
96	1993.12.??		身近な野鳥シート製作(3000部)		
97	1993.12.20	環境庁	第28回全国野生生物保護実績大会		
98	1994.02.28		愛教No.44.32P		
99	1994.10.31		愛教No.45.36P		
100	1994.12.10	東京都世田谷区多摩川兵庫島中州	セタトラ探鳥会の後援/冬期研修会		

ワークショップ	報告・案内	その他	備考
	総会の案内	編集:杉浦嘉雄, 別冊付録実績大会記録	
安孫子島の博物館見学	愛教No. 34	参加10名	
		編集:岡本嶺子・杉浦嘉雄	
水族館見学/探鳥会17種	愛教No. 35	参加6名	
	愛教No. 36別冊付録, 私然No. 351	一席:神奈川県横浜市立雫子小学校	
	室内研修会の案内	編集:岡本嶺子・杉田優児	バカで杉田版下作成を始める
シボシボ(Shiboshibo)愛鳥教育	愛教No. 36	参加38名岐阜・栃木	
	総会・夏期研修会の案内	編集:岡本嶺子	別冊:25回実績大会記録
野鳥公園の見学/探鳥会:27種	愛教No. 37	参加15名, 滋賀県	
	夏期研修会案内	編集:岡本, 杉田, 平田	表紙を変更/紙面刷新/新編集体制
ウトナイ湖サンクチュアリ/野幌森林公園の観察/デ(カ)キョ	No. 38	参加者:30名	
			RSPB講座終了
	愛教No. 40付録/私然No. 363	一席:秦野市立西小学校	
			91年11月事務局新宿区早稲田に移転
意見交換会	No. 40/私然No. 363	参加者:100名余り	神奈川県愛鳥教育検討会報告書「鳥からの出発」を会員に無料配付
館内見学:案内:浜口哲一	No. 41	参加者:9名	
	秋期研修会10/10		
ネイチャーゲーム/プローチ作り/矢倉岳探鳥会	No. 42	参加者:15名	
	絵:松原巖		
	愛教No. 42付録/私然No. 375	一席:栃木県二宮町立長沼北小学校	
実習:翼を持った種	No. 44	付録:身近な野鳥/「鳥からの出発」 参加者:?	
			細谷副会長が連盟総裁賞の授賞
自然愛護集会/公開授業:きじっ子の森で/懇談会	No. 45	参加者20名	
	愛教No. 44付録/私然No. 387	一席:神奈川県藤沢市立大庭中学校	
	身近な野鳥の販売		
	冬期研修会の案内		添付:金井副会長の計報
	No. 46		

	年月日	場所	事業名	講演	実践報告
101	1994. 12. 12	環境庁	第29回全国野生生物実績保護大会		
102	1995. 05. 31		愛教No. 46. 32P		
103	1995. 08. 10		入会案内完成 (1万部)		
104	1995. 08. 18	千葉県市川市行徳野鳥観察舎	夏期研修会	蓮尾純子:私と行徳観察舎	
105	1995. 09. 30		愛教No. 47. 68P		
106	1995. 12. 04	環境庁	第30回全国野生生物保護実績大会		
107	1995. 12. 09	東京都世田谷区多摩川兵庫島中州	セクトラ探鳥会の後援 (冬期研修会)		
108	1996. 01. 10	10000部作成	野鳥ｼｰﾄ完成		
109	1996. 03. 31		愛教No. 48. 44P (役員改選)		
110	1996. 07. 31		愛教No. 49. 28P		
111	1996. 08. 16	千葉県習志野市谷津干潟	夏期研修会	野中:谷津干潟について (VTR)	
112	1996. 12. 31		愛教No. 50		

ワークショップ	報告・案内	その他	備考
	愛教No.46付録/私然No.399	一席:神奈川県横浜市長大道小学校	
	93年度決算報告/事業報告/夏期研修会の案内		95.6.26新宿に事務所を移転
保護区等の施設見学	報告No.48	参加者15名	
	94年度事業報告/収支決算報告/入会案内パンフレットの紹介		秋から箕輪多津男に担当が代わる
	愛教No.49付録/私然No.411	一席:神奈川県秦野市立本町小学校	
	No.49		
	絵:松原巖		1000部企画料/3000部販売/1/17
	役員名簿/役員改選/野鳥シートのモニター協力依頼		榎美守久・杉浦嘉雄:副会長になる
	95年度の事業報告と決算報告/夏期研修会の案内/仙台市科学館の特別展の紹介(岩淵常務理事)		
探鳥会:41種	No.50	参加者:17名	
	96年度事業計画、冬期研修会案内		

愛鳥教育総目録1-50号

	タイトル(サブタイトル)	執筆者	学校名
1	会長あいさつ	田村活三	
2	発会式(山階鳥類研究所)報告	下田澄子	
3	役員名簿	事務局	
4	愛研規約	事務局	
5	愛鳥モデル校の指定をうけたら	柴田敏隆	
6	愛鳥モデル校のあゆみ	梅本登	東京都五日市町立戸倉小学校
7	意見交換会の記録	事務局	
8	編集後記	柳沢紀夫	
9	入会案内	事務局	
10	研修会(目黒自然教育園)報告	事務局	
11	自然観察の方法について	矢野亮	
12	全国実績大会のお知らせ	事務局	
13	広げよう愛鳥の輪を	渥美守久・鈴木武一	愛知県蒲郡市立形原北小学校
14	意見交換会の記録	事務局	
15	巣箱づくりの注意	柳沢紀夫	
16	編集後記	柳沢紀夫	
17	二年目にむかって	田村活三	
18	台場小鳥の村	渡辺光子	北海道旭川市立台場小学校
19	土よう日早起き探鳥会	三浦二郎	北海道中標津町計根別中学校
20	ふるさと探鳥会	田中完一	宮城県志津川愛鳥会
21	擁護学級にて	佐藤寛次	宮城県立山元養護学校
22	愛鳥活動の歩み	山形県大高根中学校	山形県村山市立大高根中学校
23	野鳥と仲よく	片岡一郎	栃木県茂木町立千本小学校
24	野鳥のいる山と川	古田忠久	愛知県岡崎市立河合中学校
25	体験教育を通して	北川恒雄	滋賀県近江八幡市立島小学校
26	学区の野鳥と自然	滋賀県マキノ南小学校	滋賀県マキノ町立マキノ南小学校
27	愛鳥活動の第一歩	郷司信義	大分県杵築市立豊洋小学校
28	地域の特性を生かした豊かな人間性の育成	江袋島吉	東京都世田谷区立二子玉川小学校
29	発表大会に参加して	下田澄子	
30	巣箱作りの注意(2)	柳沢紀夫	
31	編集後記	柳沢紀夫	
32	第15回全国鳥獣保護実績発表大会	環境庁	
33	愛鳥教育第4号によせて	田村活三	
34	研修会(目黒自然教育園)報告	事務局	
35	自然教育園の鳥	千羽普二	
36	本校の愛鳥活動について	片岡一郎	栃木県茂木町立千本小学校
37	81年度総会(目黒自然教育園)報告	事務局	
38	意見交換会の記録	事務局	
39	夏期研修会(御岳山)のお知らせ	事務局	
40	研修会に参加して	渥美守久	
41	研修会に参加して	山本尚三	
42	バードバス作成の注意(1)	柳沢紀夫	
43	編集後記	事務局	
44	夏期研修会(御岳山)を終了して	下田澄子	
45	野鳥の見分け方	柳沢紀夫	
46	本校の愛鳥活動	栗田龍司	神奈川県秦野市立本町小学校

テーマ	発行年	No.	ページ	キーワード	備考
巻頭言	1980.07.31	01	01	発会式	
事業報告	1980.07.31	01	01-02	発会式	
事業報告	1980.07.31	01	03	発会式	
事業報告	1980.07.31	01	04	発会式	
講演	1980.07.31	01	05-06	発会式	
活動報告	1980.07.31	01	06-13	小学校、年間指導計画	
意見交換会	1980.07.31	01	14	発会式（渋谷山階鳥研）	
編集後記	1980.07.31	01	15		
案内	1980.07.31	01	16	入会案内	
事業報告	1980.11.20	02	01	研修会	
講演	1980.11.20	02	01-03	研修会	
案内	1980.11.20	02	02	実績大会	
活動報告	1980.11.20	02	03-08	小学校	
意見交換会	1980.11.20	02	09	研修会（目黒自然教育園）	
指導法	1980.11.20	02	10-11	巣箱	
編集後記	1980.11.20	02	12		
巻頭言	1981.03.31	03	01		
活動報告	1981.03.31	03	02	小学校	
活動報告	1981.03.31	03	03	中学校	
活動報告	1981.03.31	03	04	社会教育	
活動報告	1981.03.31	03	04	養護学校	
活動報告	1981.03.31	03	05	中学校	
活動報告	1981.03.31	03	06-07	小学校	
活動報告	1981.03.31	03	08	中学校	
活動報告	1981.03.31	03	09	小学校	
活動報告	1981.03.31	03	10-11	小学校	
活動報告	1981.03.31	03	12	小学校	
活動報告	1981.03.31	03	13-16	小学校	
視察報告	1981.03.31	03	16-17	実績大会	
教材	1981.03.31	03	17-19	巣箱	
編集後記	1981.03.31	03	20		
活動報告	1981.03.31	03	21-44	実績大会、小学校、中学校、高校	付録:24P合本
巻頭言	1981.07.01	04	01		
事業報告	1981.07.01	04	01	研修会	
講演	1981.07.01	04	02-03	研修会	
活動報告	1981.07.01	04	04-06	小学校、研修会	
事業報告	1981.07.01	04	06	総会	
意見交換会	1981.07.01	04	07	研修会（目黒自然教育園）	
案内	1981.07.01	04	07	夏期研修会	
行事報告	1981.07.01	04	08	研修会	
行事報告	1981.07.01	04	08	研修会	
指導法	1981.07.01	04	09-10	水場	
編集後記	1981.07.01	04	10		
事業報告	1981.10.01	05	01	夏期研修会	
講演	1981.10.01	05	01-03	夏期研修会	
活動報告	1981.10.01	05	04-05	小学校、夏期研修会	

	タイトル(サブタイトル)	執筆者	学校名
47	地域の自然をみつめる愛鳥指導	栗原仁	東京都福生市立福生第5小学校
48	意見交換会から	梅本登	
49	始めて参加しました	千葉芙美恵	
50	講演・映画会のお知らせ(広島・福岡)	事務局	
51	実績大会のお知らせ	事務局	
52	カモの見分け方	事務局	
53	バードバスの作成の注意	柳沢紀夫	
54	編集後記	事務局	
55	野鳥保護教育を重視した教科書改定と採択をしよう	田村活三	
56	みどりの学習	三浦二郎	北海道中標津町計根別中学校
57	愛鳥クラブの活動	志津川愛鳥会	宮城県志津川愛鳥会
58	野鳥日誌を続けて	片岡一郎	栃木県茂木町立千本小学校
59	野鳥観察いろはカルタ	町田たか子	埼玉県寄居町立男衾小学校
60	愛鳥活動に思う	下田澄子	東京都五日市町立戸倉小学校
61	愛鳥の像	青梅第4小	東京都青梅第4小学校
62	学校で「バード・カペン」講習会を	石橋寿春	東京都世田谷区立船橋小学校
63	モデル校の一つとして	早崎迅	東京都世田谷区立赤堤小学校
64	一年間の実行	飯田美枝子	神奈川県伊勢原市立高部屋小学校
65	野鳥と友達になろう	大石斎	静岡県小笠郡御前崎小学校
66	文化祭で展示	皿井信	愛知県豊橋市立青陵中学校
67	葦毛湿原保護活動をふり返って	豊岡中学	愛知県豊橋市立豊岡中学校
68	愛鳥活動この一年	マキノ南小	滋賀県マキノ町立マキノ南小学校
69	巣箱の観察を指導して	細谷賢明	鳥取県鹿野町立鹿野中学校
70	P.T.A活動にまで広がりを	郷司信義	大分県杵築市立豊洋小学校
71	情熱に支えられて	赤塚洋昭	北海道倶知安町立比羅夫小学校
72	離島の愛鳥活動	斎藤敏一	山形県酒田市立飛鳥小学校
73	あっ！先生、実験の豆が！！	江原政夫	群馬県太田市立鳥之郷小学校
74	地域父母の援助を受けて	梅本登	東京都五日市町立戸倉小学校
75	何も知らなくて・・・の活動	鈴木清	愛知県豊橋市立豊岡中学校
76	愛鳥活動を指導して	細谷賢明	鳥取県鹿野町立鹿野中学校
77	高い次元の愛鳥活動を求めて	天野文雄	広島県東城町立帝釈小学校
78	笠戸島の自然を守って	山口県江の浦小学校	山口県下松市立江の浦小学校
79	ぼくらの野鳥クラブ	安部大二郎	大分県玖珠町立北山田中学校
80	野鳥観察舎(行徳)で研修	大石斎	
81	連絡先の変更	事務局	
82	第16回全国鳥獣保護実績発表大会記録	環境庁	
83	いま、なぜ愛鳥教育なのか	松田道生	
84	街の中の鳥	赤城敏子	東京都世田谷区立二子玉川小学校
85	82年度総会(日光)報告	事務局	
86	愛鳥作品コンクールの募集	事務局	
87	意見交換会の記録	事務局	
88	6月・日光の鳥たち	事務局	
89	鳥のちぎり絵	事務局	大分県築後市立豊洋小学校
90	夏期研修会(御岳山)のご案内	事務局	
91	手弁当の時代	松田道生	
92	野鳥の宝庫・御岳山で(夏期研修会報告)	事務局	

テーマ	発行年	No.	ページ	キーワード	備考
活動報告	1981. 10. 01	05	06-07	小学校、夏期研修会	
意見交換会	1981. 10. 01	05	08	夏期研修会(東京都御岳山)	
行事報告	1981. 10. 01	05	09	夏期研修会	
案内	1981. 10. 01	05	10	講演・映画会	
案内	1981. 10. 01	05	10	実績大会	
案内	1981. 10. 01	05	10	小冊子	
指導法	1981. 10. 01	05	10-12	水場	
編集後記	1981. 10. 01	05	12		
提言	1982. 03. 31	06	01-02		
活動報告	1982. 03. 31	06	02-03	中学校	
活動報告	1982. 03. 31	06	03	社会教育	
活動報告	1982. 03. 31	06	04	小学校	
活動報告	1982. 03. 31	06	05	小学校	
活動報告	1982. 03. 31	06	05-06	小学校	
活動報告	1982. 03. 31	06	07	小学校	
活動報告	1982. 03. 31	06	07-08	小学校、バードカービング	
活動報告	1982. 03. 31	06	08-09	小学校	
活動報告	1982. 03. 31	06	09	小学校	
活動報告	1982. 03. 31	06	10	小学校	
活動報告	1982. 03. 31	06	10-12	中学校	
活動報告	1982. 03. 31	06	12-13	中学校	
活動報告	1982. 03. 31	06	13-14	小学校	
活動報告	1982. 03. 31	06	14-15	中学校	
活動報告	1982. 03. 31	06	15-16	小学校、PTA	
受賞校から	1982. 03. 31	06	17	小学校	
受賞校から	1982. 03. 31	06	17	中学校	
受賞校から	1982. 03. 31	06	17-18	小学校	
受賞校から	1982. 03. 31	06	18	小学校	
受賞校から	1982. 03. 31	06	18	中学校	
受賞校から	1982. 03. 31	06	18-19	中学校	
受賞校から	1982. 03. 31	06	19	小学校	
受賞校から	1982. 03. 31	06	19	小学校	
受賞校から	1982. 03. 31	06	19-20	中学校	
事業報告	1982. 03. 31	06	20	冬期研修会	
案内	1982. 03. 31	06	20	住所変更	事務局渋谷区宇田川町に移転
活動報告	1982. 03. 31	06	21-48	実績大会、小学校、中学校、高校	付録:28P分合本
論説	1982. 07. 01	07	01		
活動報告	1982. 07. 01	07	01-03	小学校	
事業報告	1982. 07. 01	07	04	総会	
案内	1982. 07. 01	07	04	愛鳥作品コンクール	
意見交換会	1982. 07. 01	07	05	研修会(日光)	
行事報告	1982. 07. 01	07	05-07	フィールド紹介	
活動報告	1982. 07. 01	07	08	小学校、図工	
案内	1982. 07. 01	07	08	夏期研修会	
論説	1982. 10. 10	08	02		
事業報告	1982. 10. 10	08	04	夏期研修会	

愛鳥教育総目録1-50号

	タイトル(サブタイトル)	執筆者	学校名
93	懇談会から	石橋寿春	
94	集音器の作り方	事務局	
95	御岳山の野鳥	田村活三	
96	まず25種の野鳥	柳沢紀夫	
97	愛鳥のはばたき	梅本登	東京都五日市町立戸倉小学校
98	葦毛の保護活動	豊田昌利	愛知県豊橋市立豊岡中学校
99	ツバメの調査	下田澄子	富山県の活動例
100	札幌会員の集い・開催	柳沢信雄	
101	ビルトップ・ついに完成	渡辺康輔	南陽市立小滝小学校
102	冬期研修会(不忍池)のお知らせ	事務局	
103	編集後記	松田道生	
104	愛鳥教育で校内暴力はなくなるか	松田道生	
105	国会巣箱かけ	事務局	
106	愛鳥活動の計画	下田澄子	愛知県宝飯郡音羽町立音羽中学校
107	愛鳥活動プログラム実践例	下田澄子	五日市町立戸倉小学校、世田谷区立船橋小学校
108	愛鳥活動のヒント・1	柴田敏隆	
109	つばめの子	ほうせんたまえ	
110	愛鳥資料の紹介(8点)	事務局	
111	不忍池カモ観察会報告	事務局	
112	4年目の会費のお願い	事務局	
113	編集後記	松田・宗形	
114	第17回全国鳥獣保護実績発表大会記録	環境庁	
115	今日の野鳥は、明日の人類であるとか	田村活三	
116	初夏の日光にて開催(83年度総会報告)	事務局	
117	日光に広がる愛鳥教育	大橋一成	栃木県日光市立中宮祠小学校
118	探鳥会の記録	石橋寿春	
119	意見交換会の記録	梅本登	
120	愛鳥教育の計画その1	下田澄子	北海道倶知安町立比羅布小学校
121	探鳥会とその計画	松田道生	
122	愛鳥モデル校指定数	事務局	
123	愛鳥活動のヒント・2	柴田敏隆	
124	皆んなで作ったマイホーム	事務局	
125	夏期研修会(御岳山)のお知らせ	事務局	
126	編集後記	松田道生・宗形康	
127	教育と自然保護の間で	松田道生	
128	御岳山研修会の報告	事務局	
129	愛鳥教育をどのようにすすめてきたか	渥美守久	愛知県蒲郡市立形原北小学校
130	鳥との接し方	中坪礼治	
131	御岳山研修会・意見交換会から	梅本登	
132	愛鳥活動のヒント・3	柴田敏隆	
133	愛鳥教育の計画その2	下田澄子	東京都世田谷区立二子玉川小学校
134	探鳥会の準備と実施	松田道生	
135	静岡県・愛鳥校のつどい	松田道生	
136	国会周辺に巣箱架け・その後	事務局	
137	編集後記	宗形康・松田道生	
138	あいさつ	田村活三	
139	第18回実績大会を審査して	柴田敏隆	
140	愛鳥のつどいで発表して	植原澄子	

テーマ	発行年	No.	ページ	キーワード	備考
意見交換会	1982.10.10	08	05	研修会（東京都御岳山）	
指導法	1982.10.10	08	05	A V	
講演	1982.10.10	08	06-07		
講演	1982.10.10	08	08-09	野鳥指導	
活動報告	1982.10.10	08	10	小学校	
活動報告	1982.10.10	08	11	中学校	
活動報告	1982.10.10	08	12-18	社会教育、富山県、ツバメ	事例紹介
支部関連	1982.10.10	08	18		
活動報告	1982.10.10	08	19	小学校	
案内	1982.10.10	08	19	冬期研修会	
編集後記	1982.10.10	08	19		表紙変更No.36まで
論説	1983.03.20	09	02		
事業報告	1983.03.20	09	04-05		
活動報告	1983.03.20	09	06-09	中学校	事例紹介
活動報告	1983.03.20	09	10-12	小学校	事例紹介
指導法	1983.03.20	09	13		
児童作品	1983.03.20	09	14-15		児童の作品
寄贈書籍	1983.03.20	09	16-17		
事業報告	1983.03.20	09	18	冬期研修会	
案内	1983.03.20	09	18	会費納入	
編集後記	1983.03.20	09	18		
活動報告	1983.03.20	09	19-58	実績大会、小学校、中学校、高校	付録:36P分合本
巻頭言	1983.07.01	10	02		
事業報告	1983.07.01	10	04	総会	
活動報告	1983.07.01	10	05	小学校	
行事報告	1983.07.01	10	06-07	探鳥会	
意見交換会	1983.07.01	10	08	研修会（日光）	
活動報告	1983.07.01	10	09-13	小学校、小規模校	事例紹介
指導法	1983.07.01	10	14-19	探鳥会	
資料	1983.07.01	10	20-21	愛鳥モデル校	
指導法	1983.07.01	10	22		
活動報告	1983.07.01	10	23	社会教育、青梅市役所、巣箱	
案内	1983.07.01	10	23	夏期研修会	
編集後記	1983.07.01	10	23		
論説	1983.11.01	11	02		
事業報告	1983.11.01	11	04	夏期研修会	
活動報告	1983.11.01	11	05-09	小学校、愛鳥活動	
講演	1983.11.01	11	10-12		
意見交換会	1983.11.01	11	13-14	夏期研修会（東京都御岳山）	
指導法	1983.11.01	11	15		
活動報告	1983.11.01	11	16-22	小学校、都市部	事例紹介
指導法	1983.11.01	11	23-28	探鳥会	
視察報告	1983.11.01	11	29	静岡県	
事業報告	1983.11.01	11	30		
編集後記	1983.11.01	11	30		
巻頭言	1984.04.01	12	02		
審査	1984.04.01	12	04-06	実績大会	
行事報告	1984.04.01	12	07-09	実績大会	

愛鳥教育総目録1-50号

	タイトル(サブタイトル)	執筆者	学校名
141	愛鳥教育の実践(中学校)	下田澄子	愛知県豊橋市立豊岡中学校
142	第18回全国鳥獣保護実績発表大会記録	環境庁	
143	愛鳥教育13号によせて	田村活三	
144	84年度総会(野辺山)報告	石橋寿春	
145	八ヶ岳研修会に参加して	村口末弘	
146	愛鳥モデル校の質の向上を目指して	柴田敏隆	
147	愛鳥教育の充実発展のために	下田澄子	
148	愛鳥教育研究会会員名簿	事務局	
149	ごあいさつ	田村活三	
150	夏期研修会報告(箱根)	事務局	
151	箱根仙石原の研修会に参加して	桑原俊雄	
152	夏期研修会に参加して	杉田優児	
153	鳥から学ぶこと	長谷川昭雄	
154	研修会の内容について	下田澄子	
155	イカルチドリの観察	下田澄子	鳥取県気高郡鹿野中学校野鳥クラブ
156	冬期研修会(明治神宮)のご案内	事務局	
157	会費納入のお願い	事務局	
158	No.13の会員名簿のおわびと訂正	事務局	
159	愛鳥教育のねがい	田村活三	
160	第19回全国鳥獣保護実績発表大会愛鳥のつどい	事務局	
161	第19回実績発表大会を審査して	竹下信雄	
162	思いやりの心を持って行動できる子どもを育てる	石橋寿春	
163	PAULOWNIA(パウロニア)から愛鳥活動について紹介	下田澄子	青森県立三戸高等学校自然科学部
164	陳情書の提出について	事務局	
165	常務理事会報告	事務局	
166	冬期研修会(明治神宮)報告	事務局	
167	愛研北海道支部誕生	事務局	
168	夏期研修会(山中湖)のお知らせ	事務局	
169	愛鳥週間用ポスター募集	事務局	
170	第19回全国鳥獣保護実績発表大会記録	環境庁	
171	教科書と愛鳥教育	下田澄子	
172	夏期研修会報告(山中湖)	村口末弘	
173	研修会に参加して	石塚主計	
174	研修会に参加して	徳竹力男	
175	はじめてバードウォッチングに参加して	黒沢正	
176	自然と野鳥と人間と	渡辺淳一	
177	野生との出会い、充実の2日間	高橋英昭	
178	理科教科書(小・中)及び学習指導要領(理科)に於ける鳥類の扱いに関する調査	杉田優児・杉浦嘉男	
179	愛鳥活動紹介	下田澄子	
180	身近でできる野鳥の観察	柳沢紀夫	

テーマ	発行年	No.	ページ	キーワード	備考
活動報告	1984.04.01	12	09-13	中学校	事例紹介
活動報告	1984.04.01	12	14-28	実績大会、小学校、中学校、高校	付録:14P分合本
巻頭言	1984.08.20	13	03		
事業報告	1984.08.20	13	06-08	総会	
行事報告	1984.08.20	13	09-10	総会	
指導法	1984.08.20	13	11-12	愛鳥活動、運営	
論説	1984.08.20	13	13-14		
事業報告	1984.08.20	13	15-26		
巻頭言	1984.12.15	14	02		
事業報告	1984.12.15	14	04	夏期研修会	
行事報告	1984.12.15	14	05	夏期研修会	
行事報告	1984.12.15	14	06	夏期研修会	
行事報告	1984.12.15	14	07	夏期研修会	
論説	1984.12.15	14	08		
活動報告	1984.12.15	14	09-13	イカルチドリ、中学校、クラブ	事例紹介
案内	1984.12.15	14	14	冬期研修会	
案内	1984.12.15	14	14	会費納入	
雑件	1984.12.15	14	14-15		
巻頭言	1985.04.20	15	03		
視察報告	1985.04.20	15	04	実績大会	
審査	1985.04.20	15	05	実績大会	私然No.279より転載
活動報告	1985.04.20	15	06-09	小学校、学校研究	
活動報告	1985.04.20	15	10-17	高等学校、クラブ	事例紹介
雑件	1985.04.20	15	18-19		
事業報告	1985.04.20	15	20	常務理事会	
事業報告	1985.04.20	15	20	冬期研修会	
支部関連	1985.04.20	15	21		
案内	1985.04.20	15	22	夏期研修会	
案内	1985.04.20	15	22	愛鳥週間ポスター	
活動報告	1985.04.20	15	23-48	実績大会、小学校、中学校、高校	付録:24Pの第19回実績大会の記録が合本されている
巻頭言	1985.07.15	16	02		
事業報告	1985.07.15	16	04-05	夏期研修会	
行事報告	1985.07.15	16	05	夏期研修会	
行事報告	1985.07.15	16	06	夏期研修会	
行事報告	1985.07.15	16	07	夏期研修会	
行事報告	1985.07.15	16	08	夏期研修会	
行事報告	1985.07.15	16	09	夏期研修会	
研究論文	1985.07.15	16	10-14	教科書、理科	夏期研修会発表要旨
	1985.07.15	16	15		
調査方法	1985.07.15	16	16-19	野鳥観察、調査	1981科学博物館後援会刊「自然科学と博物館」より転載

愛鳥教育総目録1-50号

	タイトル(サブタイトル)	執筆者	学校名
181	神奈川県「愛鳥モデル校」研修会に出席して	平田寛重	
182	常務理事会報告	事務局	
183	85年度総会(山階鳥研)のお知らせ	事務局	
184	静岡支部発会式のお知らせ	事務局	
185	東京都世田谷区立船橋小学校研究発表会	事務局	
186	編集後記	杉浦嘉雄	
187	盟友田中完一先生を悼む	田村活三	
188	85年度総会(山階鳥研)報告	事務局	
189	愛情豊かな子どもを育てる愛鳥活動	板垣貞俊・栗原仁	東京都福生市立第5小学校
190	山階鳥類研究所の施設見学(書庫・標本室他)メモ	事務局	
191	より多くの交流の場を	長屋昌治	
192	ますます必要となる愛鳥教育	中山辰夫	
193	中国遼寧省の愛鳥教育2,3の見聞	飯村武	
194	民間愛鳥教育の行方	田中完一・小塊雅之	宮城県志津川愛鳥会
195	静岡県支部結成のお知らせ	事務局	
196	北海道支部総会開かれる	事務局	
197	常務理事会報告	事務局	
198	声のブッポウソウと姿のブッポウソウ	岡董高	
199	冬期研修会(二子多摩川)	事務局	
200	第20回実績発表大会	事務局	
201	編集後記	杉浦嘉雄	
202	6年前の当会発足時をかえりみて	下田澄子	
203	愛鳥教育に想う	佐野弘	
204	第20回実績発表大会を審査して	竹下信雄	
205	冬期研修会の報告	事務局	
206	多摩川の野鳥を観る会に参加して	増田孝士	
207	今日の主役は小学生	岩田晴夫	
208	声のブッポウソウと姿のブッポウソウ(続)	岡董高	
209	1985年度「愛鳥教育」総目次	事務局	
210	第20回全国鳥獣保護実績発表大会記録	環境庁	
211	編集後記	杉浦嘉雄	
212	愛鳥教育のすすめ	下田澄子	
213	夏期研修会の報告	杉田優児	
214	さらに多くの討論を	渡辺研造	
215	コルリの姿に感激	杉村千恵子	
216	身近になった野鳥	桑原とし子	
217	大自然の中でこそ優しさが育つ	渡辺淳一	
218	中野の自然と愛鳥活動について	下田澄子	宮城県仙台市立中野小学校
219	イギリスにおける愛鳥教育(ヨーロッパの愛鳥教育①)	杉浦嘉雄	
220	エール大学の自然保護の意識調査について	杉浦嘉雄	
221	編集後記	杉浦嘉雄	
222	全国愛鳥教育研究会よりのご案内	田村活三	
223	新会長挨拶	下田澄子	

テーマ	発行年	No.	ページ	キーワード	備考
視察報告	1985.07.15	16	20	研修会、神奈川県	
事業報告	1985.07.15	16	21		
案内	1985.07.15	16	22	総会	
支部関連	1985.07.15	16	23		
案内	1985.07.15	16	23	小学校、研究発表会	
編集後記	1985.07.15	16	23		
巻頭言	1985.11.15	17	02		
事業報告	1985.11.15	17	04-05	総会	
活動報告	1985.11.15	17	06	小学校	
行事報告	1985.11.15	17	07		
行事報告	1985.11.15	17	07		
行事報告	1985.11.15	17	08		
視察報告	1985.11.15	17	09-11	中国、海外、愛鳥教育	
活動報告	1985.11.15	17	12-14	社会教育	
支部関連	1985.11.15	17	15		
支部関連	1985.11.15	17	16		
事業報告	1985.11.15	17	16		
	1985.11.15	17	17	ブッポウソウ、コノハズク	下田澄子記
案内	1985.11.15	17	18	冬期研修会	
案内	1985.11.15	17	18	実績大会	
編集後記	1985.11.15	17	19		
巻頭言	1986.03.20	18	02		
	1986.03.20	18	04	愛鳥教育	
審査	1986.03.20	18	05	実績大会	私然No.291より転載
事業報告	1986.03.20	18	06	冬期研修会	
行事報告	1986.03.20	18	07	冬期研修会	
行事報告	1986.03.20	18	08	冬期研修会	
	1986.03.20	18	09-10	ブッポウソウ、コノハズク	下田澄子記
雑件	1986.03.20	18	10		
活動報告	1986.03.20	18	11-34	実績大会、小学校、中学校、高校	付録:24P合本
編集後記	1986.03.20	18	35		
巻頭言	1986.07.20	19	03		
事業報告	1986.07.20	19	04-05	夏期研修会	
行事報告	1986.07.20	19	06	夏期研修会	
行事報告	1986.07.20	19	07	夏期研修会	
行事報告	1986.07.20	19	07	夏期研修会	
行事報告	1986.07.20	19	08	夏期研修会	
活動報告	1986.07.20	19	09-12	小学校、愛鳥活動	事例紹介
視察報告	1986.07.20	19	13-18	海外、愛鳥教育、イギリス	
雑件	1986.07.20	19	19	自然保護、アンケート	
編集後記	1986.07.20	19	19		
巻頭言	1986.11.10	20	03		
事業報告	1986.11.10	20	04		

愛鳥教育総目録1-50号

	タイトル(サブタイトル)	執筆者	学校名
224	新役員名簿	事務局	
225	86年度総会(学習院)報告	杉浦嘉雄	
226	「規約改正点」のご報告	下田澄子	
227	蒲生千潟・海岸の自然と愛鳥教育	岩淵成紀	宮城県仙台市立中野小学校
228	野鳥のオーディオ・ビデオ(こうもり傘式集音器他)	中坪礼治	
229	ヤジウマ精神で‘自然’と付き合おう(新役員のページ)	金井郁夫	
230	全国実績大会のお知らせ	事務局	
231	愛鳥作品コンクール募集	事務局	
232	愛鳥週間ポスター受賞作品展示会	事務局	
233	愛鳥作文と愛鳥教育	阿部英雄	
234	テグス回収活動と愛鳥教育	長屋昌治	東京都世田谷区立松ヶ丘小学校
235	テグス回収・調査活動をぜひあなたの学校・地域の愛鳥教育に取り入れてください	事務局	
236	冬期研修会(多摩川関戸橋)のお知らせ	事務局	
237	編集後記	杉浦嘉雄	
238	巣箱の作り方(6種)図面	編集部	
239	読者のこえ(とじ込みはがき)	編集部	
240	愛鳥教育の教材化	下田澄子	
241	北海道の愛鳥教育	杉浦嘉雄	
242	愛研北海道支部紹介	柳沢信雄	
243	幼稚園の愛鳥活動	古川和多留	北海道札幌いしやま中央幼稚園
244	中学校における愛鳥(自然)教育の実践	三浦二郎	
245	鳥獣保護法Q&A30	江原秀典	
246	自然と関わる(役員のページ)	梅本登	
247	日本鳥類保護連盟「子ども鳥博士」募集	事務局	
248	日本の愛鳥モデル校とイギリスの愛鳥活動校との交流	事務局	宮城県仙台市立中野小学校
249	冬期研修会(多摩川関戸橋)報告	徳竹力男	
250	夏期研究会(三宅島)のお知らせ	事務局	
251	87年度総会(高尾山)のお知らせ	事務局	
252	第21回実績発表大会を審査して	竹下信雄	
253	巣箱の作り方(3種)	事務局	
254	編集後記	杉浦嘉雄	
255	第21回全国鳥獣保護実績発表大会記録	環境庁	
256	田村前会長の環境庁長官賞受賞・日中愛鳥教育交流	下田澄子	
257	夏期研修会報告「三宅島の自然」	杉田優児	
258	ヨーロッパの愛鳥教育②イギリス愛鳥教育その2、取材旅行日記から	杉浦嘉雄	
259	鳥の飛翔(RSPBプロジェクト)	今井宗丸・杉浦嘉雄共訳	
260	朝鮮の野鳥	江原秀典	

テーマ	発行年	No.	ページ	キーワード	備考
事業報告	1986.11.10	20	05		
事業報告	1986.11.10	20	06-07	総会	
事業報告	1986.11.10	20	08-09	規約	
活動報告	1986.11.10	20	10-13	小学校、愛鳥教育	
講演	1986.11.10	20	14-15	A V	
指導法	1986.11.10	20	16		
案内	1986.11.10	20	17	実績大会	
案内	1986.11.10	20	17	愛鳥作品コンクール	
案内	1986.11.10	20	17	愛鳥週間ポスター	
活動報告	1986.11.10	20	18-19	作文	
活動報告	1986.11.10	20	20-21	テグス	
案内	1986.11.10	20	21-22	テグス拾い	
案内	1986.11.10	20	23	冬期研修会	
編集後記	1986.11.10	20	23		
教材	1986.11.10	20	24	巣箱	
案内	1986.11.10	20	24	読者の声	
巻頭言	1987.03.10	21-22	03		
支部関連	1987.03.10	21-22	04	支部	
活動報告	1987.03.10	21-22	04-05	支部	
活動報告	1987.03.10	21-22	06-10	幼稚園	
活動報告	1987.03.10	21-22	11-12	中学校	
?愛鳥教育講座	1987.03.10	21-22	13-16	法律、保護	
指導法	1987.03.10	21-22	17		
案内	1987.03.10	21-22	18	子ども鳥博士	
活動報告	1987.03.10	21-22	18	国際交流	
事業報告	1987.03.10	21-22	19	冬期研修会	
案内	1987.03.10	21-22	20	夏期研修会	
案内	1987.03.10	21-22	20	総会	
審査	1987.03.10	21-22	21	実績大会	私然No.303より転載
教材	1987.03.10	21-22	22	巣箱	
編集後記	1987.03.10	21-22	22		
活動報告	1987.03.10	21-22		実績大会、小学校、中学校、高校	別冊付録:24P
巻頭言	1987.08.31	23	03	国際交流	
事業報告	1987.08.31	23	04-09	夏期研修会	
視察報告	1987.08.31	23	10-12	海外、愛鳥教育、イギリス	
指導書	1987.08.31	23	13-30	飛翔、行動	
視察報告	1987.08.31	23	31	朝鮮、野鳥	

愛鳥教育総目録1-50号

	タイトル(サブタイトル)	執筆者	学校名
261	夏休みの課題あれこれ(役員のページ)	平田寛重	
262	編集後記	杉浦嘉雄	
263	全国愛鳥教育研究会入会案内	事務局	
264	日本鳥類保護連盟入会案内	事務局	
265	日中愛鳥教育交流会議における愛研の説明	下田澄子	
266	87年度総会報告(高尾山)	杉村千恵子	
267	高尾の自然	金井郁夫	
268	日中愛鳥教育交流事業	江原秀典	
269	船橋小学校日中愛鳥交流記	杉村千恵子	東京都世田谷区立船橋小学校
270	二子玉川小学校日中愛鳥交流記	赤城敏子	東京都世田谷区立二子玉川小学校
271	日中愛鳥交流会議報告	下田澄子	
272	世田谷区の巣箱展	杉浦嘉雄	
273	「愛鳥モデル校巣箱展」について	中田裕敬	
274	RSPBの紹介	杉浦嘉雄	
275	鳥の渡り(RSPB7°プロジェクト)	今井宗丸・杉浦嘉雄共訳	
276	冬期研修会(多摩川関戸橋)のお知らせ	事務局	
277	編集後記	杉浦嘉雄	
278	下田会長訃報	金井郁夫	
279	日本愛鳥教育視察団の中国訪問報告	下田澄子	
280	下田澄子先生御逝去	杉浦嘉雄	
281	追悼文青梅育ち	金井郁夫	
282	追悼文下田会長のご逝去を悼む	栗原仁	
283	追悼文下田澄子先生を悼んで	梅本登	
284	追悼文下田先生のご逝去を悼んで	杉村千恵子	
285	常務理事会報告	金井郁夫	
286	夏期研修会のお知らせ	事務局	
287	北海道支部愛鳥教育実践記録集の紹介	事務局	
288	愛鳥教育実践記録集のお知らせ(三浦二郎著「根室その水の青森の緑を」)	事務局	
289	第22回実績発表大会を審査して	竹下信雄	
290	編集後記	杉浦嘉雄	
291	第22回全国鳥獣保護実績発表大会記録	環境庁	
292	夏休みをむかえて	金井郁夫	
293	小学校における愛鳥教育の効果	堤達俊	
294	夏期研修会報告(国際愛鳥交流の報告及び探鳥会)	事務局	
295	88年度総会(我孫子山階鳥研)のお知らせ	事務局	
296	鳥と図画工作(RSPB7°プロジェクト)	杉田優児・杉浦嘉雄・田代まどか共訳	
297	ヒガンバナ咲いたか(村の理科ことはじめ1)	金井郁夫	
298	編集後記	杉田・杉浦	
299	会長就任にあたって	江袋島吉	
300	愛鳥教育日中交流派遣団に参加して	岡本治子	

テーマ	発行年	No.	ページ	キーワード	備考
指導法	1987.08.31	23	32-33	夏休み	
編集後記	1987.08.31	23	34		
案内	1987.08.31	23	35	入会案内	
案内	1987.08.31	23	36	入会案内	
巻頭言	1988.01.20	24	03	国際交流	
事業報告	1988.01.20	24	04-05	総会	
講演	1988.01.20	24	06	高尾山	杉村千恵子記録
事業報告	1988.01.20	24	07	国際交流、中国	
活動報告	1988.01.20	24	08-09	国際交流、中国	
活動報告	1988.01.20	24	10-11	国際交流、中国	
事業報告	1988.01.20	24	12-13	国際交流、中国	
視察報告	1988.01.20	24	14	巣箱、行政	
活動報告	1988.01.20	24	14-15	巣箱、行政、世田谷区	
視察報告	1988.01.20	24	16-18	海外、愛鳥教育、イギリス	
指導書	1988.01.20	24	19-35	渡り、生態	
案内	1988.01.20	24	36	冬期研修会	
編集後記	1988.01.20	24	36		
巻頭言	1988.03.31	25-26	03	下田澄子	
視察報告	1988.03.31	25-26	04-07	国際交流	
雑件	1988.03.31	25-26	07	下田澄子	
雑件	1988.03.31	25-26	08	下田澄子	
雑件	1988.03.31	25-26	08	下田澄子	
雑件	1988.03.31	25-26	09	下田澄子	
雑件	1988.03.31	25-26	09	下田澄子	
事業報告	1988.03.31	25-26	10	常務理事会	
案内	1988.03.31	25-26	11	夏期研修会	
案内	1988.03.31	25-26	12	支部	
案内	1988.03.31	25-26	13	実践記録集頒布要項	
審査	1988.03.31	25-26	14	実績大会	私然No.315の転載
編集後記	1988.03.31	25-26	15		
活動報告	1988.03.31	25-26		実績大会、小学校、中学校、高校	別冊付録:24P
巻頭言	1988.07.25	27	03	夏休み	会長代行
研究論文	1988.07.25	27	04-15	小学校、遠足	
事業報告	1988.07.25	27	16-17	夏期研修会、国際交流	
案内	1988.07.25	27	18	総会	
指導書	1988.07.25	27	19-42	図画工作	
読み物	1988.07.25	27	43	ヒガンバナ	
編集後記	1988.07.25	27	44		
巻頭言	1988.11.30	28	03		
視察報告	1988.11.30	28	04-05	国際交流	児童の感想文有り

愛鳥教育総目録1-50号

	タイトル(サブタイトル)	執筆者	学校名
301	88年度総会(我孫子山階鳥研)報告	事務局	
302	モズのはやにえみつけよう(村の理科ことはじめ2)	金井郁夫	
303	高尾だより	金井郁夫	
304	学校のできる野鳥の研究(RSPBプロジェクト)	杉田優児・真紀子・杉浦嘉雄共訳	
305	冬期室内研修会(世田谷)のお知らせ	事務局	
306	冬期野外研修会(多摩川昭和用水)のお知らせ	事務局	
307	編集後記	杉浦嘉雄	
308	山階芳磨先生のご逝去を悼む	江袋島吉	
309	Sawtry County Junior Schoolとの交流活動を中心に(全校で取り組む自然保護活動の記録)	岩淵成紀	宮城県仙台市立中野小学校
310	ヤマカガシの逆襲(村の理科ことはじめ3)	金井郁夫	
311	学校のできる野鳥の研究<続>(RSPBプロジェクト)	杉田優児・真紀子・杉浦嘉雄共訳	
312	編集後記	杉浦嘉雄	
313	会費納入	事務局	
314	第23回全国鳥獣保護実績発表大会記録	環境庁	
315	平成元年度初頭にあたって	江袋島吉	
316	鳥カードによる生態のゲーム	村杉幸子・市石博	
317	多摩川水系中流域の野鳥(愛鳥教材の基礎資料作りの一試みとして)	金井郁夫	
318	学校のできる野鳥の研究<続々>(RSPBプロジェクト)	杉田優児・真紀子・杉浦嘉雄・佐久間昭子・牧野晃明共訳	
319	自由研究やめてくれ!(村の理科ことはじめ4)	金井郁夫	
320	幼稚園、小学校、公民館の連係プレーで(会員のひろば)	島田利子	
321	会員より寄贈いただいた本・実践集の紹介(4冊)	事務局	
322	編集後記	杉浦嘉雄	
323	会費納入	事務局	
324	“地球の緑を守れ”の声にこたえて	江袋島吉	
325	日本の大学における鳥類保護・自然保護講座の概要について	宇田川龍男	
326	89年度総会・夏期研修会(清里)報告	島田利子	
327	鳥と算数(RSPBプロジェクト)	堤達俊・森谷志津子・藤本和久・杉浦嘉雄共訳	
328	丸石はどうしてできた(村の理科ことはじめ5)	金井郁夫	
329	冬期研修会(荒川下流)のお知らせ	事務局	
330	会費納入	事務局	

テーマ	発行年	No.	ページ	キーワード	備考
事業報告	1988.11.30	28	06-07	総会	講演・施設見学の報告は無し
読み物	1988.11.30	28	08-09	モズ	
?	1988.11.30	28	10	高尾山	
指導書	1988.11.30	28	11-23	校庭、調査	
案内	1988.11.30	28	24	室内研修会	
案内	1988.11.30	28	24	冬期研修会	
編集後記	1988.11.30	28	24		
巻頭言	1989.03.15	29-30	03		
活動報告	1989.03.15	29-30	04-11	国際交流、小学校、愛鳥活動	
読み物	1989.03.15	29-30	12	ヤマカガシ	
指導書	1989.03.15	29-30	13-19	校庭、調査	
編集後記	1989.03.15	29-30	20		
案内	1989.03.15	29-30	21	会費納入	
活動報告	1989.03.15	29-30		実績大会、小学校、中学校、高校	別冊付録:24P
巻頭言	1989.07.31	31	03	国際交流	
教材	1989.07.31	31	04-08	ゲーム、カード	「遺伝」42巻10号より転載
調査方法	1989.07.31	31	09-12	多摩川、鳥、分布	
指導書	1989.07.31	31	13-32	校庭、野鳥調査	
読み物	1989.07.31	31	33	自由研究	
活動報告	1989.07.31	31	34	公民館、幼稚園、小学校	
寄贈本紹介	1989.07.31	31	34		
編集後記	1989.07.31	31	34		
案内	1989.07.31	31	34	会費納入	
巻頭言	1989.11.30	32	03	夏期研修会	
?	1989.11.30	32	04-05	自然保護	
事業報告	1989.11.30	32	06-10	総会、研修会	研修会報告含む
指導書	1989.11.30	32	11-26	算数	
読み物	1989.11.30	32	27	石	
案内	1989.11.30	32	28	冬期研修会	
案内	1989.11.30	32	28	会費納入	

	タイトル(サブタイトル)	執筆者	学校名
331	清里の研修を生かして教室でもバター作り(会員の広場)	高橋令子	
332	編集後記	杉浦・藤本	
333	実績発表大会に思う	江袋島吉	
334	身近な野鳥ウォッチング「ジョウビタキ」	佐藤誠三・杉浦嘉雄	
335	鳥と算数<続>(RSPBプロジェクト)	堤達俊・森谷志津子・杉浦嘉雄共訳	
336	タンポポは踏んで調べよう(村の理科ことはじめ)	金井郁夫	
337	90年度総会(我孫子山階鳥研)のお知らせ	事務局	
338	編集後記	杉浦嘉雄	
339	第24回全国鳥獣保護実績発表大会記録	環境庁	
340	続実績発表大会に思う	江袋島吉	
341	学校現場へ愛鳥教育を(愛鳥教育を取り入れるための一例)	島田利子	
342	90年度総会(我孫子山階鳥研)報告	岡本嶺子	
343	むらのネズミとまちのネズミ(村の理科ことはじめ7)	金井郁夫	
344	野鳥の行動(RSPBプロジェクト)	佐久間昭子・杉浦嘉雄共訳	
345	編集後記	岡本嶺子	
346	友あり遠方より来たる	江袋島吉	
347	野鳥との出会いをつくる巣箱活動	平田寛重	
348	巣箱の作り方(6種)	編集部	
349	冬期研修会(葛西臨海公園)報告	杉田優児	
350	室内研修会(世田谷)の御案内	事務局	
351	宇宙人はいるか(村の理科ことはじめ8)	金井郁夫	
352	編集後記	岡本・杉田	
353	愛鳥歳時記	江袋島吉	
354	第2回室内研修会(世田谷)報告	岡本嶺子	
355	都会における愛鳥活動	長屋昌治	東京都世田谷区立松ヶ丘小学校
356	世田谷らしい愛鳥活動をめざして	中田裕敬	東京都世田谷区生活環境部みどりの課
357	秦野市における愛鳥教育の推進	小林徳博	神奈川県秦野市教育委員会
358	鳥との出会い	江原広美	神奈川県秦野市立北小学校
359	埼玉県での活動報告	平田寛重	埼玉県越谷市立鷺後小学校(沢田昌江) / 埼玉県野鳥の会(岩木晃三)
360	愛鳥教育研修会に参加して	藤井雅二	
361	愛鳥教育研修会に参加して	飯沼慶一	
362	シンポジウム「ステップアップ愛鳥教育」より	杉田優児	
363	鳥類保護と保全(RSPBプロジェクト)	杉浦嘉雄・堤達俊・堤志津子共	
364	おれんちにカタクリがあるぞ(村の理科ことはじめ9)	金井郁夫	
365	総会(東京港野鳥公園)と夏期研修会(ウトナイ湖)のお知らせ	事務局	

テーマ	発行年	No.	ページ	キーワード	備考
活動報告	1989.11.30	32	28	バター、小学校	
編集後記	1989.11.30	32	28		
巻頭言	1990.03.31	33	03	実績大会	
調査方法	1990.03.31	33	04-08	野鳥観察、ジョウビタキ、行動、生態	
指導書	1990.03.31	33	09-25	算数	
読み物	1990.03.31	33	26	タンポポ	
案内	1990.03.31	33	27	総会	
編集後記	1990.03.31	33	28		
活動報告	1990.03.31	33		実績大会、小学校、中学校、高校	別冊付録:24P
巻頭言	1990.09.30	34	03	実績大会	
実践講座	1990.09.30	34	04-08	愛鳥活動、小学校	
事業報告	1990.09.30	34	09-10	総会	
読み物	1990.09.30	34	11	ネズミ	
指導書	1990.09.30	34	12-26	行動、生態	
編集後記	1990.09.30	34	27		
巻頭言	1990.12.28	35	05	国際交流、	
実践講座	1990.12.28	35	06-16	巣箱、小学校、愛鳥教育	
教材	1990.12.28	35	17	巣箱	
事業報告	1990.12.28	35	18-20		
案内	1990.12.28	35	21	室内研修会	
読み物	1990.12.28	35	22	宇宙	
編集後記	1990.12.28	35	23		
巻頭言	1991.03.31	36	03		
事業報告	1991.03.31	36	04		
活動報告	1991.03.31	36	05-06	小学校、愛鳥活動	
活動報告	1991.03.31	36	07-08	行政、愛鳥活動	
活動報告	1991.03.31	36	09	教育委員会、愛鳥活動	
活動報告	1991.03.31	36	10-11	小学校、愛鳥活動	
活動報告	1991.03.31	36	12-13	NGO、小学校、愛鳥活動	
行事報告	1991.03.31	36	14		
行事報告	1991.03.31	36	14		
意見交換会	1991.03.31	36	15-16	愛鳥活動(第2回室内研修会:東京)	
指導書	1991.03.31	36	17-38	鳥類保護、環境保全	
読み物	1991.03.31	36	39	カタクリ	
案内	1991.03.31	36	40	総会	

愛鳥教育総目録1-50号

	タイトル(サブタイトル)	執筆者	学校名
366	編集後記	岡本嶺子	
367	第25回全国野生生物保護実績大会記録	環境庁	
368	ウトナイ湖が危い	江袋島吉	
369	91年度総会(東京港野鳥公園)報告	平田寛重	
370	新役員名簿	事務局	
371	環境教育を意識した遠足のモデルプランー東京港野鳥公園をフィールドとしてー	堤達俊	
372	野鳥公園に思う	平田寛重	
373	全国愛鳥教育研究会に参加して	原一成	
374	キマムシがいた(村の理科ことはじめ10)	金井郁夫	
375	ファーストレスンツバメウォッチング	島田利子	
376	愛鳥教育がめざすもの	平田寛重	
377	OHPを使ったぬりえの指導	平田寛重	
378	神奈川県愛鳥モデル校指導者研修会に参加して	谷淳司	
379	神奈川県愛鳥モデル校指導者研修会に参加して	小山ひより	
380	愛鳥教育・環境教育に参考になる雑誌「野鳥」	杉浦嘉雄	
381	都市鳥関係についての文献	平田寛重	
382	野鳥、自然観察、環境教育についての文献	平田寛重	
383	野鳥関係のビデオテープ	平田寛重	
384	1991年夏期研修会(北海道ウトナイ湖)のご案内	事務局	
385	表紙の紹介	平田寛重	
386	表紙の紹介(うれしい春)	小泉和江	
387	事務局日誌	岡本嶺子	
388	バックナンバーの紹介	事務局	
389	編集後記	KANJUH・岡本嶺子・杉田優児	
390	No.40活動記録の投稿について	事務局	
391	愛鳥クイズ	平田寛重	
392	ウトナイ湖に学ぶ	江袋島吉	
393	ウトナイ湖・野幌森林公園夏期研修会報告	岡本嶺子	
394	豊かな心を育み実践力を培う体験学習	石山博之	北海道根室市立厚床小学校
395	野鳥に学ぶ自然保護の実践	長谷川順一・梶浦孝純	北海道札幌市藤の沢小学校
396	小鳥さんがプレゼントしてくれた自然との出会い	広瀬恵子	北海道札幌いしやま幼稚園
397	私の愛鳥教育	三浦二郎	
398	巨視でみる北海道の動物相	金井郁夫	
399	夏期研修会「レベルアップ愛鳥教育活動」より	杉浦嘉雄	
400	野幌森林公園とウトナイ湖	杉浦嘉雄	

テーマ	発行年	No.	ページ	キーワード	備考
編集後記	1991.03.31	36	40		
活動報告	1991.03.31	36		実績大会、小学校、中学校、高校	別冊付録:24P
巻頭言	1991.06.30	37	03	ウトナイ湖	
事業報告	1991.06.30	37	04-06	総会	
事業報告	1991.06.30	37	07	役員	
実践講座	1991.06.30	37	08-10	遠足、環境教育	
行事報告	1991.06.30	37	11		
行事報告	1991.06.30	37	12		
読み物	1991.06.30	37	13	キマムシ	
実践講座	1991.06.30	37	14-17	ツバメ	
論説	1991.06.30	37	18-19	愛鳥教育	
指導法	1991.06.30	37	20-21	ぬり絵、OHP	
視察報告	1991.06.30	37	22	神奈川県	
視察報告	1991.06.30	37	22	神奈川県	
書籍紹介	1991.06.30	37	23		
書籍紹介	1991.06.30	37	24		
書籍紹介	1991.06.30	37	24		
A Vソフト紹介	1991.06.30	37	25	ビデオ	
案内	1991.06.30	37	25	夏期研修会	
案内	1991.06.30	37	26	表紙	表紙デザイン変更
案内	1991.06.30	37	26	表紙	
事務局日誌	1991.06.30	37	26		
案内	1991.06.30	37	26	バックナンバー	
編集後記	1991.06.30	37	27		
案内	1991.06.30	37	27	投稿	
クイズ	1991.06.30	37	28	クイズ、形態	
巻頭言	1991.10.31	38	03	研修会	
事業報告	1991.10.31	38	04	夏期研修会	
活動報告	1991.10.31	38	05-07	愛鳥活動、小学校	
活動報告	1991.10.31	38	08-11	愛鳥活動、小学校	
活動報告	1991.10.31	38	12-13	愛鳥活動、幼稚園	
講演	1991.10.31	38	14-16		
講演	1991.10.31	38	17-20	北海道、哺乳類	
意見交換会	1991.10.31	38	21	夏期研修会(北海道苫小牧)	
事業報告	1991.10.31	38	22-23	フィールド紹介	

	タイトル(サブタイトル)	執筆者	学校名
401	子どもたちの愛鳥活動を支えるもの	渥美守久	
402	学校教育で何ができるか。何をやるのか。	平田寛重	
403	台風ものしり帳(村の理科ことはじめ11)	金井郁夫	
404	神奈川県野生生物保護実績発表大会を見て	平田寛重	
405	グリーン・マークを活用しましょう	平田寛重	
406	愛鳥教育・環境教育に参考になる雑誌「日本の生物・バーダー」	杉浦嘉雄	
407	事務局日誌	岡本嶺子	
408	編集後記	杉田優児	
409	No.40への活動記録の投稿	事務局	
410	愛鳥クイズ	平田寛重	
411	環境教育指導資料寸見記	江袋島吉	
412	北海道余市川のヤマセミ	赤石誠二	
413	学校教育で取り組むべき愛鳥教育の課題	平田寛重	
414	なあんだ、カラス、かあ(村の理科ことはじめ12)	金井郁夫	
415	子どもたちの愛鳥活動を支えるもの(Ⅱ)	渥美守久	
416	愛鳥教育・環境教育に参考になる雑誌「私たちの自然」	杉浦嘉雄	
417	みる野鳥記	平田寛重	
418	センス・オブ・ワンダー	平田寛重	
419	身近な自然観察のすすめ	平田寛重	
420	「昼休みウォッチング」について	平田寛重	
421	ぬり絵	磯部道枝	
422	事務局日誌	岡本嶺子	
423	編集後記	杉田優児	
424	事務所移転のお知らせ	事務局	
425	愛鳥クイズ	平田寛重	
426	愛鳥教育指導者交流会について	江袋島吉	
427	学校野鳥愛護教育の推進	池田武	静岡県
428	環境教育の充実を目指して	梅本登	東京都五日市町立戸倉小学校
429	自然体験学習の歩み(地域の自然にふれて自ら学ぶ子ども)	伊達佐重	北海道栗山町立雨煙別小学校
430	西美唄に学ぶ	近野恭一	北海道美唄市立西美唄小学校
431	自然を生かし、自然を愛する教育活動	中嶋穰司	滋賀県甲賀郡甲南町立第三小学校
432	鳥のおとしものをさがそう	原一成	神奈川県秦野市立東小学校
433	田舎の片隅で	細谷賢明	鳥取県
434	豊かな心と表現力を育てる愛鳥教育	杉浦賢一	愛知県豊田市立滝脇小学校
435	行政・学校・NGOで進める自然保護教育	岩木晃三	埼玉県
436	ノグチゲラをさがせ!	山田義紀	沖縄県国頭村立安波小中学校
437	住吉さまはすばらしい(村の理科ことはじめ13)	金井郁夫	

テーマ	発行年	No.	ページ	キーワード	備考
実践講座	1991.10.31	38	24-29	愛鳥活動	
論説	1991.10.31	38	30	学校教育、愛鳥教育	
読み物	1991.10.31	38	31	台風	
視察報告	1991.10.31	38	32	実績大会、神奈川県	
指導法	1991.10.31	38	33	グリーンマーク	
書籍紹介	1991.10.31	38	34		
事務局日誌	1991.10.31	38	35		
編集後記	1991.10.31	38	35		
案内	1991.10.31	38	35	投稿	
クイズ	1991.10.31	38	36	クイズ、形態、翼帯	
巻頭言	1991.12.20	39	03	環境教育	
	1991.12.20	39	04-07	ヤマセミ、野鳥観察	
論説	1991.12.20	39	08-09	愛鳥教育、学校教育	
読み物	1991.12.20	39	10	カラス	
実践講座	1991.12.20	39	11-15	校庭、教育園	
書籍紹介	1991.12.20	39	16-17		
書籍紹介	1991.12.20	39	18		
書籍紹介	1991.12.20	39	18		
書籍紹介	1991.12.20	39	19		
実践講座	1991.12.20	39	20-24		
教材	1991.12.20	39	25-26	ぬり絵、スズメ、ムクドリ、ヒヨドリ、キジバト	
事務局日誌	1991.12.20	39	27		
編集後記	1991.12.20	39	27		
案内	1991.12.20	39	27	事務所移転	渋谷から高田馬場へ移転
クイズ	1991.12.20	39	28	クイズ、翼帯、形態、雌雄	
巻頭言	1992.07.31	40	03	指導者交流会	
活動報告	1992.07.31	40	04-07		
活動報告	1992.07.31	40	08-11	小学校、環境教育、年間計画	
活動報告	1992.07.31	40	12-14	小学校	
活動報告	1992.07.31	40	15-16	小学校	
活動報告	1992.07.31	40	17-19	小学校	
活動報告	1992.07.31	40	20-21	小学校	
活動報告	1992.07.31	40	22-24	地域教育、愛鳥活動	
活動報告	1992.07.31	40	25	小学校、愛鳥活動	
活動報告	1992.07.31	40	26-27	NGO	
活動報告	1992.07.31	40	28-29	小学校、中学校	
読み物	1992.07.31	40	30	アオバズク	

	タイトル(サブタイトル)	執筆者	学校名
438	神奈川県環境教育研究発表会報告	平田寛重	
439	第26回全国野生生物保護実績発表大会 参観記	長屋昌治	
440	ネオン街に眠る鳥たち	平田寛重	
441	手作りポケット図鑑	島田利子	
442	1992年度版国語教科書と愛鳥教育	編集部	
443	ぬり絵	磯部道枝	
444	国際環境教育シンポジウム	事務局	
445	全国愛鳥教育指導者交流会	事務局	
446	全国愛鳥教育研究会総会のお知らせ	事務局	
447	秋期研修会(神奈川県南足柄市)のお 知らせ	事務局	
448	事務局日誌	岡本嶺子	
449	編集後記	杉田優児	
450	愛鳥クイズ	平田寛重	
451	第26回全国野生生物保護実績大会記録	環境庁	
452	全国愛鳥教育指導者交流会より	江袋島吉	
453	鳥からの出発(愛鳥教育強化事業報告 書)	杉田優児	
454	92年度総会(平塚市博物館)報告	岡本嶺子	
455	カードを使った観察記録の蓄積	浜口哲一	
456	野生生物保護実績発表大会神奈川大会 及び、神奈川愛鳥モデル校研修会	島田利子	
457	1992年度版小学校理科教科書における 鳥類の扱いについて	平田寛重	
458	オープンクレイを使った野鳥のプロ チ作り	杉田優児	
459	鳥類目録を学校現場で活かそう	島田利子	
460	都市鳥研究会	杉浦嘉雄	
461	かながわの鳥図鑑	平田寛重	
462	愛鳥教育と環境保全	平田寛重	
463	新作ビデオ・CDの紹介	平田寛重	
464	サルがでたぞ(村の理科ことはじめ14)	金井郁夫	
465	事務局日誌	島崎直子	
466	投稿案内	事務局	
467	編集後記	杉田優児	
468	愛鳥クイズ	平田寛重	
469	珍禽と四不像の保護区を尋ねて(第3 次中国施設団の一員に加わって)	江袋島吉	
470	秋期研修会報告	増田友紀子	
471	第27回全国野生生物保護実績発表大会	島田利子	
472	野鳥観察と愛鳥教育(より深く鳥とか かわるために)	平田寛重	
473	野鳥観察チェックポイント	平田寛重	

テーマ	発行年	No.	ページ	キーワード	備考
視察報告	1992.07.31	40	31	環境教育、神奈川県	
視察報告	1992.07.31	40	32-33	実績大会	
書籍紹介	1992.07.31	40	33		
指導法	1992.07.31	40	34-41	ポケット図鑑	
座談会	1992.07.31	40	42-50	小学校、国語、教科書	
教材	1992.07.31	40	51-52	ぬり絵、ツバメ、イカル、ホオジロ、ハシブトガラス	
案内	1992.07.31	40	53	国際環境教育シンポジウム	記録のため再掲載
案内	1992.07.31	40	54	全国愛鳥教育指導者交流会	記録のため再掲載
案内	1992.07.31	40	55	総会	記録のため再掲載
案内	1992.07.31	40	56	秋期研修会	
事務局日誌	1992.07.31	40	57		
編集後記	1992.07.31	40	57		
クイズ	1992.07.31	40	58	クイズ、鳥名、雌雄	
活動報告	1992.07.31	40		実績大会、小学校、中学校、高校	別冊付録:24P
巻頭言	1993.01.31	41	03	指導者交流会	
書籍紹介	1993.01.31	41	04	愛鳥活動	後日、会員に無料配付
事業報告	1993.01.31	41	05-07	総会	
講演	1993.01.31	41	08-10	野鳥観察、愛鳥活動	総会の講演
視察報告	1993.01.31	41	11-12	実績大会	
研究論文	1993.01.31	41	13-39	小学校、理科、教科書	
クラフト	1993.01.31	41	40-43	クラフト、ブローチ、オープンクレイ	
書籍紹介	1993.01.31	41	44-45	鳥類目録、愛鳥活動、野鳥観察	
研究団体紹介	1993.01.31	41	45	都市鳥	
書籍紹介	1993.01.31	41	46	図鑑、	
論説	1993.01.31	41	47-48	愛鳥教育、環境保全	
A Vソフト紹介	1993.01.31	41	48	ビデオ、CD	
読み物	1993.01.31	41	49	サル	
事務局日誌	1993.01.31	41	50		
案内	1993.01.31	41	50	投稿	
編集後記	1993.01.31	41	50		
クイズ	1993.01.31	41	51	クイズ、鳥名、カラ類、形態	
巻頭言	1993.03.31	42	03	中国視察	
事業報告	1993.03.31	42	04-05	秋期研修会	ネイチャーゲーム (No.46)、ブローチ作り (No.41)、探鳥会
視察報告	1993.03.31	42	06-09	実績大会	
論説	1993.03.31	42	10-11	野鳥観察、愛鳥教育	
指導法	1993.03.31	42	11-15	野鳥観察	

愛鳥教育総目録1-50号

	タイトル(サブタイトル)	執筆者	学校名
474	「谷津干潟の生き物たち」(学校図書5年下)の授業から	島田利子	
475	「谷津干潟の生き物たち」の授業に参加して	国松俊英	
476	サクラの花びらは散る(村の理科ことはじめ15)	金井郁夫	
477	編集後記	杉田優児	
478	愛鳥クイズ	平田寛重	
479	身近な野鳥	松原巖	
480	第27回全国野生生物保護実績大会記録	環境庁	
481	環境教育の周辺から	江袋島吉	
482	熊本市愛鳥教育のおいたちと活動	田中忠	熊本市愛鳥教育研究会
483	学級での愛鳥活動	森田真由美	熊本県熊本市立向山小学校
484	さぁいらっしやい。愛鳥ブローチの実演販売	坂梨一也	熊本県熊本市立尾ノ上小学校
485	愛鳥活動を振り返って	鈴木武一	愛知県
486	1羽のカワセミから(今泉小学校の愛鳥活動と校庭環境整備)	菅間宏子	埼玉県上尾市立今泉小学校
487	愛鳥モデル校の活動を続けて	二子玉川小学校	東京都世田谷区立二子玉川小学校
488	自然界の一員としての鳥(身近な自然を活かした環境教育)	片岡久美子	神奈川県カリタス女子中学高等学校
489	渋小ふれあいの里	野尻一郎	神奈川県秦野市立渋沢小学校
490	クラブ活動と野鳥との出会い	清田吉晴	北海道
491	愛媛の野鳥観察ハンドブックはばたき	平田寛重	
492	「矢ガモ」事件で考えたこと	平田寛重	
493	ツバメが自殺した(村の理科ことはじめ16)	金井郁夫	
494	祝:細谷副会長連盟総裁賞を受賞	江袋島吉	
495	物品販売のお知らせ	増田友紀子	
496	愛鳥クイズ	平田寛重	
497	スーパーネイチャリングセンター構想について(環境教育の周辺・自然教育の試み)	江袋島吉	
498	93年度総会(目黒自然教育園)〈規約改正〉報告	増田友紀子	
499	愛鳥教育とツバメ	平田寛重	
500	ツバメに足輪を付けたら	金井郁夫	
501	ツバメのなかまとその特徴	杉浦嘉雄	
502	ツバメセカンドレッスン(小学生中学生でツバメ調査を)	島田利子	
503	ツバメの生息県下一斉調査(石川県の活動調査報告より)	島田利子	
504	ツバメの子育て(1)〈巣作りから巣立ちまで〉	内田康夫	
505	高校生のためのツバメ観察入門	藤田剛	
506	ぬり絵	磯部道枝	
507	かわいそうな鳥にまつわるいくつかの話	平田寛重	
508	わたしとあそんで	平田寛重	

テーマ	発行年	No.	ページ	キーワード	備考
活動報告	1993.03.31	42	16-19	国語、干潟、授業研究	
視察報告	1993.03.31	42	20	国語、干潟	
読み物	1993.03.31	42	21	サクラ	
編集後記	1993.03.31	42	22		
クイズ	1993.03.31	42	23	クイズ、雑学、形態、カラ類	
教材	1993.03.31	42		図鑑	付録
活動報告	1993.03.31	42		実績大会、小学校、中学校、高校	別冊付録:24P
巻頭言	1993.07.31	43	03	環境教育	
活動報告	1993.07.31	43	04-05		
活動報告	1993.07.31	43	06-07	小学校、愛鳥活動	
活動報告	1993.07.31	43	08	小学校、愛鳥活動	
活動報告	1993.07.31	43	09	小学校、愛鳥活動、ボランティア、親子探鳥会	
活動報告	1993.07.31	43	10-11	小学校、愛鳥活動	
活動報告	1993.07.31	43	12-13	小学校、愛鳥活動	
活動報告	1993.07.31	43	14-15	中学校、愛鳥活動	
活動報告	1993.07.31	43	16-17	小学校、愛鳥活動	
活動報告	1993.07.31	43	18	中学校、クラブ	
書籍紹介	1993.07.31	43	19	図鑑	
論説	1993.07.31	43	20	狩猟、傷病	
読み物	1993.07.31	43	21	ツバメ	
案内	1993.07.31	43	22		
案内	1993.07.31	43	22	身近な野鳥	
クイズ	1993.07.31	43	23	クイズ、雑学、形態	
巻頭言	1994.02.28	44	03	スーパーネイチャリングセンター、環境教育	
事業報告	1994.02.28	44	04-07	総会、事業報告、決算報告、事業計画、役員	
論説	1994.02.28	44	08	愛鳥教育、ツバメ	
研究報告	1994.02.28	44	09	ツバメ、バンディング	
鳥類学	1994.02.28	44	10-11	ツバメ	
実践講座	1994.02.28	44	12-13	ツバメ、小学校、中学校	
活動報告	1994.02.28	44	14-15	ツバメ、小学校	事例紹介
調査方法	1994.02.28	44	16-22	ツバメ、繁殖	
調査方法	1994.02.28	44	23-25	ツバメ、採餌、調査、高校生	
教材	1994.02.28	44	25	ぬり絵、ジョウビタキ、モズ	
論説	1994.02.28	44	26-27	雛	
書籍紹介	1994.02.28	44	28		

愛鳥教育総目録1-50号

	タイトル(サブタイトル)	執筆者	学校名
509	学校で自然かんさつ	平田寛重	
510	増え過ぎたぞ、アオマツムシ(村の理科ことはじめ17完)	金井郁夫	
511	身近な野鳥の販売	事務局	
512	編集後記	杉田優児	
513	愛鳥クイズ	平田寛重	
514	“きじっ子の森”で学んだ研修会	江袋島吉	
515	金井郁夫先生逝去	編集部	
516	93年度冬期研修会(愛知県蒲郡市)報告	杉田優児・島田利子	
517	鳥から始める環境教育・鳥につなげる環境教育	植原彰	山梨県牧丘町立牧丘第三小学校
518	「愛鳥教育ing!」	田中忠	熊本県熊本市立出水南中学校
519	野鳥の観察を通して自然の神秘を探る(自然から学び、たくましさ豊かな心を培う愛鳥活動)	岸本勉	鳥取県東伯郡三朝町立東小学校
520	地域の環境に根づいた自然教育	大嶋茂子	愛知県犬山市立今井小学校
521	自然体験活動の一環としての野鳥観察(自然愛護少年団を通して)	鈴木哲夫	北海道斜里町立峰浜小学校
522	都会のオアシス帷子川(よみがえる水辺で野鳥や魚や水質を調べて)	松下希一	神奈川県横浜市立帷子小学校
523	街中の校庭でもできる面白い自然観察ビンゴ	平田寛重	
524	ぬり絵	磯部道枝	
525	バード&ネイチャーウォッチング~入門編~	事務局	
526	愛鳥モデル校の保護活動とは	平田寛重	
527	編集後記	杉田優児	
528	愛鳥クイズ	平田寛重	
529	第28回全国野生生物保護実績大会記録	環境庁	
530	圏央道建設に揺らぐ関東唯一の越冬地江戸崎	江袋島吉	
531	バード&ネイチャーウォッチングin多摩川(冬期研修会報告)	小野紀之	
532	鳥・自然とのふれあい	谷淳司	神奈川県秦野市立南小学校
533	ネイチャーゲームとバードウォッチング	杉浦嘉雄	
534	自然教材の工夫スライドボックス	渥美守久	
535	1992年度版小学校理科教科書と愛鳥教育	編集部	
536	都鳥のもうひとつの顔は「白カラス」(鳥たちの街ものがたり1)	佐々木晶子・杉浦嘉雄	
537	野生生物保護実績発表大会について思うこと	平田寛重	
538	93年度決算報告・事業報告	事務局	
539	夏期研修会(千葉県行徳野鳥観察舎)の御案内	事務局	
540	編集後記	杉田優児	
541	愛鳥クイズ	平田寛重	

テーマ	発行年	No.	ページ	キーワード	備考
書籍紹介	1994.02.28	44	28		
読み物	1994.02.28	44	29	アオマツムシ	
案内	1994.02.28	44	30	身近な野鳥	
編集後記	1994.02.28	44	30		
クイズ	1994.02.28	44	31	クイズ、形態、ツバメ	
巻頭言	1994.10.31	45	03	冬期研修会、テグス公害	
雑件	1994.10.31	45	00	金井郁夫	
事業報告	1994.10.31	45	04-08	冬期研修会、小学校、環境教育、公開授業	
実践講座	1994.10.31	45	09-13	小学校、環境教育、羽	
活動報告	1994.10.31	45	14-17	中学校、愛鳥活動	
活動報告	1994.10.31	45	18-19	小学校、愛鳥活動	
活動報告	1994.10.31	45	20-21	小学校、愛鳥活動、ツバメ	
活動報告	1994.10.31	45	22-23	小学校、愛鳥活動、ツバメ	
活動報告	1994.10.31	45	24	小学校	
指導法	1994.10.31	45	25-29	自然観察、ビンゴ	
教材	1994.10.31	45	30	ぬり絵、ジョウビタキ、ヒヨドリ、セグロセキレイ、キセキレイ	
案内	1994.10.31	45	31	冬期研修会	
論説	1994.10.31	45	32-34	愛鳥モデル校、保護、実績大会	
編集後記	1994.10.31	45	34		
クイズ	1994.10.31	45	35	クイズ、ツバメ、鳥名	
活動報告	1994.10.31	45		実績大会、小学校、中学校、高校	別冊付録:24P
巻頭言	1995.05.31	46	03	ヒシクイ	
事業報告	1995.05.31	46	04-10	冬期研修会、ネイチャービンゴ	
活動報告	1995.05.31	46	11-17	小学校、愛鳥活動	
指導法	1995.05.31	46	18-19	ネイチャーゲーム	
教材	1995.05.31	46	20-21	写真、教材	
座談会	1995.05.31	46	22-25	小学校、理科、教科書	
読み物	1995.05.31	46	26-27	ユリカモメ	
論説	1995.05.31	46	28	実績大会	
事業報告	1995.05.31	46	29-30	事業報告	
案内	1995.05.31	46	30-31	夏期研修会	
編集後記	1995.05.31	46	31		
クイズ	1995.05.31	46	32	クイズ、鳥名	

愛鳥教育総目録1-50号

	タイトル(サブタイトル)	執筆者	学校名
542	第29回全国野生生物保護実績大会記録	環境庁	
543	金井郁夫副会長の死を悼む	江袋島吉	
544	金井郁夫先生逝去(毎日・朝日各新聞)	編集部	
545	金井郁夫先生略歴	編集部	
546	故金井郁夫先生の著作物について	平田寛重	
547	金井先生のこと	柳澤紀夫	
548	金井郁夫先生奥様御礼の言葉	金井ゆき子	
549	ツバメの生活史	金井郁夫	
550	私たちの「ツバメの巣」調査	一寸木肇	神奈川県大井町立大井小学校
551	ツバメ用人工巣の製作と7年間の繁殖状況	井口豊重	東京都杉並区立松ノ木中学校
552	大和市近辺のツバメの巣の分布調査	沼里和幸	神奈川県立大和高等学校
553	ツバメの巣を調べる(子ども向け)	山根茂生	
554	ツバメの巣を調べる(指導者向け)	山根茂生	
555	鳥たちの「集団ねぐら」を調べよう	藤田 剛	
556	ツバメ関係の文献	平田寛重	
557	商売繁盛の鳥ツバメ(鳥たちの街ものがたり2)	佐々木晶子・杉浦嘉雄	
558	ツバメ観察チェックポイント	平田寛重	
559	ツバメウォッチングピンゴ	平田寛重	
560	ツバメの巣観察用「柄付きミラー」	平田寛重	
561	ツバメ類のぬり絵	箕輪義隆	
562	ツバメの折り紙	原 久男	
563	学校での探鳥会の在り方	平田寛重	
564	野鳥生態観察のすすめ「ウイングー野鳥生活記ー」	平田寛重	
565	野鳥生態観察のすすめ「鳥の生態図鑑」	平田寛重	
566	野鳥生態観察のすすめ「狛江の自然・野鳥と多摩川」	平田寛重	
567	野鳥生態観察のすすめ「野鳥の観察ー鳥は何をしているか?ー」	平田寛重	
568	野鳥生態観察のすすめ「世界の鳥 行動の秘密」	平田寛重	
569	1994年度事業報告	事務局	
570	1994年度収支決算報告	事務局	
571	入会案内パンフレットの作成	事務局	
572	故金井郁夫福会長の一週忌に想う	江袋島吉	
573	冬期研修会(多摩川兵庫島)のお知らせ	事務局	
574	編集後記	杉田優児	
575	愛鳥クイズ	平田寛重・渥美守久	
576	入会案内パンフレット	事務局	
577	新浜よ永遠に(夏期研修会から)	江袋島吉	

テーマ	発行年	No.	ページ	キーワード	備考
活動報告	1995.05.31	46		実績大会、小学校、中学校、高校	別冊付録:24P
巻頭言	1995.09.30	47	03	金井郁夫	
雑件	1995.09.30	47	04	金井郁夫	新聞記事転載
雑件	1995.09.30	47	05	金井郁夫	
書籍紹介	1995.09.30	47	06-7	金井郁夫	
雑件	1995.09.30	47	08	金井郁夫	
雑件	1995.09.30	47	08	金井郁夫	
講演	1995.09.30	47	09-22	ツバメ、生活史	
活動報告	1995.09.30	47	23-25	小学校、ツバメ、調査	
活動報告	1995.09.30	47	26-31	中学校、クラブ活動、ツバメ、調査	
活動報告	1995.09.30	47	32-39	高校、ツバメ、調査	
調査方法	1995.09.30	47	40-41	ツバメ、調査、子ども	
調査方法	1995.09.30	47	42-43	ツバメ、調査、指導者	
調査方法	1995.09.30	47	44	ツバメ、調査、ねぐら	
書籍紹介	1995.09.30	47	45-47	ツバメ、文献	
読み物	1995.09.30	47	48-50	ツバメ	
指導法	1995.09.30	47	51-53	ツバメ、観察チェックポイント、教材	
指導法	1995.09.30	47	54-56	ツバメ、ウォッチングビンゴ、ビンゴ、教材	
教材	1995.09.30	47	56	グッズ、柄付き鏡	
教材	1995.09.30	47	57	ツバメ、ぬり絵、ツバメ、イワツバメ、コシアカツバメ	
教材	1995.09.30	47	58	ツバメ、折り紙	
論説	1995.09.30	47	59-60	探鳥会	
書籍紹介	1995.09.30	47	60	生態観察	
書籍紹介	1995.09.30	47	60-61	生態観察	
書籍紹介	1995.09.30	47	61	生態観察	
書籍紹介	1995.09.30	47	61	生態観察	
書籍紹介	1995.09.30	47	61	生態観察	
事業報告	1995.09.30	47	62	事業報告	
事業報告	1995.09.30	47	62	決算報告	
案内	1995.09.30	47	63-65	入会案内	
雑件	1995.09.30	47	66	金井郁夫	
案内	1995.09.30	47	67	冬期研修会	
編集後記	1995.09.30	47	67		
クイズ	1995.09.30	47	66・68	クイズ、ツバメ、囀り、繁殖	
案内	1995.09.30	47		入会案内	付録
巻頭言	1996.03.31	48	03	新浜	

	タイトル(サブタイトル)	執筆者	学校名
578	千葉県行徳野鳥観察舎にて(研修会報告)	杉田優児	
579	行徳野鳥観察舎と私	蓮尾純子	
580	地域に学ぶ環境教育	原久男	神奈川県秦野市立末広小学校
581	秦野市立西小学校の愛鳥活動-学級活動「愛鳥の時間」	桐生幸子	神奈川県秦野市立西小学校
582	校外学習での自然観察ビンゴ	平田寛重	
583	野鳥シートの解説	平田寛重	
584	野鳥シートの販売案内	小野紀之	
585	冬の使者カモ軍団の隠された秘密(鳥たちの街ものがたり3)	佐々木晶子・杉浦嘉雄	
586	環境教育と愛鳥教育	平田寛重	
587	役員名簿1996	事務局	
588	役員改選1996	事務局	
589	編集後記	杉田優児	
590	愛鳥クイズ	平田寛重	
591	野鳥シート水辺の鳥-秋冬編-	松原巖	
592	野鳥をまもるために	日本鳥類保護連盟	
593	96年度バードウィークポスター	日本鳥類保護連盟	
594	実績大会について(1)その由来と背景	江袋島吉	
595	バードウォッチング in 多摩川(冬期研修会報告)	小野紀之	
596	「野鳥かみしばい」のすすめ	安西英明	
597	「野鳥かみしばい」についての補足説明	平田寛重	
598	環境教育のすすめ方	平田寛重	
599	「アニマルレスキュー教本」	平田寛重	
600	「野生動物救護ハンドブック」	平田寛重	
601	“お濠のカルガモ”だけがカルガモじゃない!(鳥たちの街ものがたり4)	佐々木晶子・杉浦嘉雄	
602	1992年度版小学校理科6年教科書と愛鳥教育	編集部	
603	95年度収支決算報告	箕輪多津男	
604	95年度事業報告	箕輪多津男	
605	自己紹介	箕輪多津男	
606	「96年度夏期研修会」のお知らせ	事務局	
607	仙台市科学館「雁が渡る」	事務局	
608	編集後記	杉田優児	
609	愛鳥クイズ	平田寛重	
610	第30回全国野生生物保護実績大会記録	環境庁	
611	愛鳥週間50年のあゆみ	環境庁	

テーマ	発行年	No.	ページ	キーワード	備考
事業報告	1996.03.31	48	04-5	夏期研修会	
講演	1996.03.31	48	06-9	行徳野鳥観察舎	
活動報告	1996.03.31	48	10-14	小学校	
活動報告	1996.03.31	48	15-21	小学校	
指導法	1996.03.31	48	22-29	自然観察、ビンゴ	
教材	1996.03.31	48	32-36	野鳥シート、図鑑	
案内	1996.03.31	48	30-31	野鳥シート	
読み物	1996.03.31	48	37-40	カモ	
論説	1996.03.31	48	41	環境教育、愛鳥教育	
事業報告	1996.03.31	48	42	役員	
事業報告	1996.03.31	48	43	役員	
編集後記	1996.03.31	48	43		
クイズ	1996.03.31	48	44	クイズ、カモ、ツバメ	
教材	1996.03.31	48		野鳥シート、図鑑	付録
教材	1996.03.31	48			別冊付録:小冊子34P
教材	1996.03.31	48		ポスター	付録
巻頭言	1996.07.31	49	03	実績大会	
事業報告	1996.07.31	49	04-7	冬期研修会	
教材	1996.07.31	49	08-9	紙しばい	
教材	1996.07.31	49	10-12	紙しばい	
論説	1996.07.31	49	13	環境教育	
書籍紹介	1996.07.31	49	14	傷病鳥	
書籍紹介	1996.07.31	49	15	傷病鳥・獣・亀	
読み物	1996.07.31	49	16-17	カルガモ	
座談会	1996.07.31	49	18-23	理科、教科書、6年	
事業報告	1996.07.31	49	23	決算	
事業報告	1996.07.31	49	24	事業報告	
雑件	1996.07.31	49	24		
案内	1996.07.31	49	25	夏期研修会	
案内	1996.07.31	49	26	行事案内	
編集後記	1996.07.31	49	26		
クイズ	1996.07.31	49	27	クイズ、巣、カモ	
活動報告	1996.07.31	49		実績大会、小学校、中学校、高校	別冊付録:24P
活動報告	1996.07.31	49		愛鳥週間	別冊付録:A4版12P

平成7年度 事業報告

事務局 箕輪 多津男

平成7年度 収支決算報告書

(単位：円)

1. 「愛鳥教育」の発行について

- (1) 47号(9月)、48号(平成8年4月)の発行
- (2) 内容
 - ① 「全国愛鳥教育研究会」元副会長の故金井郁夫先生の追悼特集を掲載した。
 - ② 愛鳥教育実践報告としてツバメの調査を特集した。
 - ③ 愛鳥活動のヒントを掲載した。
 - ④ 論説では「学校での探鳥会の在り方」および「環境教育と愛鳥教育」を掲載した。
 - ⑤ 愛鳥教育のための新しい教材である『野鳥シート』に関する解説を掲載した。

2. 研修会

- (1) 夏期研修会
 - 期日：平成7年8月18日(金)
 - 場所：行徳野鳥観察舎
 - 内容：① 観察舎と保護区の見学
 - ② 講演「行徳野鳥観察舎と私」
千葉県行徳野鳥観察舎・蓮尾純子氏

(2) 冬期研修会

- 期日：平成7年12月9日(土)
- 場所：兵庫島河川公園
- 内容：① 多摩川の冬鳥のバードウォッチング
 - ② 大規模バードウォッチングの指導法研究

3. 常務理事会(開催日)

- 平成7年4月18日(火)、5月25日(木)、
- 6月27日(火)、7月20日(木)、9月29日(金)、
- 10月20日(金)、11月13日(月)、12月14日(木)、
- 平成8年1月16日(火)、2月15日(木)、
- 3月28日(木)

4. 「野鳥シート」の企画・販売

愛鳥教育に役立つ教材として、「野鳥シート～水辺で楽しむバードウォッチング～」を企画・販売し、各方面から好評を得た。

【収入の部】

項目	決算額
会費	489,000
売上	512,628
寄付金	2,000
連盟・補助金	917,730
受取利息	219
前期繰越収支差額	75,190
収入合計	2,396,767

5. その他の行事・審査会への参加

<審査>

- (1) 第49回愛鳥週間全国野鳥保護のつどい(長崎県)
平成7年5月14日(日) 江袋会長
- (2) 愛鳥週間ポスターコンクール及び全国野生生物保護実績発表大会審査会(環境庁)
平成7年10月20日(金) 江袋会長
- (3) 全国野生生物保護実績発表大会(環境庁講堂)
平成7年12月4日(月) 江袋会長
- (4) 愛鳥週間野生生物保護功労者選考会(環境庁)
平成8年3月15日(金) 江袋会長

<行事参加>

- (1) 財団法人鳥類保護連盟主催 テグス拾い
平成7年10月29日(日) 河口湖 江袋会長
- (2) 国会議事堂周辺巣箱かけ
平成8年3月6日(水) 江袋会長
- (3) 神奈川県野生生物保護実績発表大会
平成7年8月23日(水) 江袋会長、常務理事2名
(平田、島田)

【支出の部】

項目	決算額
会誌発行費	797,220
入会案内印刷費	355,350
通信運搬費	117,920
会議費	68,013
交際費	31,900
交通費	1,580
事務消耗品費	1,045
支払手数料	1,390
雑費	110,340
次期繰越収支差額	912,009
支出合計	2,396,767
前期繰越収支差額	475,190
当期収支差額	436,819
次期繰越収支差額	912,009

上記の通り報告いたします。

平成8年3月31日

会長 江袋島吉
 会計 杉浦嘉雄
 事務局 箕輪多津男

監査の結果上記の通り相違ないことを認めます。

監事 徳竹力男
 監事 村口末広

平成8年度 事業計画

事務局 箕輪多津男

1. 「愛鳥教育」の発行

(1) 49号(7月)、50号(12月)、51号(平成9年3月)発行予定

(2) 内容

①「愛鳥教育」の50号の発行を記念して、これまでの全国愛鳥教育研究会の歩みを振り返り、当研究会にゆかりのある方々にご執筆いただく。

②愛鳥教育実践報告として校庭改造を特集。

③愛鳥活動のヒントを掲載。

④論説では「環境教育のすすめ方」、「環境教育と

校庭改造と教育園造り」等を掲載。

⑤愛鳥教育のための教材として『野鳥かみしばい』に関する解説を掲載。

⑥「子どものためのバードカービング教室」を掲載。

2. 研修会

(1)夏期研修会

期日：平成8年8月16日(金)

場所：谷津干潟自然観察センター

内容：①施設および谷津干潟の観察

②講演

谷津干潟自然観察センター・野中志朗氏

(2)冬期研修会

期日：平成9年2月8日(土)

場所：江東区中央防波堤最終処分地

内容：①中央防波堤付近と夢の島植物園での観察

②ゴミ問題や都市鳥問題の検討

3. 常務理事会(開催予定)

平成8年4月、5月、6月、7月、9月、10月、12月、平成9年1月、2月、3月

4. その他の行事・審査会への参加

<審査会等>

(1)第50回愛鳥週間全国野鳥保護のつどい(福島県)

平成8年5月12日(日)

(2)愛鳥週間ポスターコンクール及び全国野生生物保護実績発表大会審査会(環境庁)

平成8年10月18日(金)

(3)全国野生生物保護実績発表大会(環境庁講堂)

平成8年12月2日(月)

(4)愛鳥週間野生生物保護功労者選考会(環境庁)

平成8年3月14日(金)

<後援行事>

(5)助せたがやトラスト協会

「トラストバードウォッチング・入門編」

平成8年12月14日(土)兵庫島河川公園

※ 以下は、葉書で通知済みの冬期研修会の案内です。記録のために掲載しました。

冬期研修会の御案内

平成9年1月

下記の通り、冬期研修会を行います。

中央防波堤埋立処分場は、一般の方の日常立ち入りが禁止されている場所でもありますので、この機会に“ごみ”という都市環境の問題が自然環境にどのように関わっているかをこの研修会で見学し、考えてみてください。後半は、夢の島熱帯植物館の温室で熱帯体験をしていただく予定です。

記

日時 平成9年2月8日(土)

9:15~15:30

場所 東京港中央防波堤埋立処分場および
夢の島熱帯植物館

日程 9:15 新木場駅前集合

※ 時間厳守をお願いします。

一般車での入場は出来ませんので、遅刻された方は直接、熱帯植物館で12時までお待ちいただくこととなります。

9:45 バスにて出発

中央防波堤埋立処分場見学

12:00 夢の島熱帯植物館到着 昼食

13:00 館内見学および周辺で野鳥観察

15:30 解散

交通 JR京葉線・営団地下鉄有楽町線・
臨海副都心線

『新木場』駅(集合場所は地図参照)

熱帯植物館へは徒歩約15分

持ち物 観察用具、弁当(水筒)

※ 昼食は、近くのマリーナのレストランでも出来ます。

参加費 無料

(熱帯植物館の入館料250円は各自負担)

※ 今回の研修会は定員に限りがありますので、事務局まで必ずお申込みの上、ご参加ください。

定員20名になり次第、締め切らせていただきますのでご了承ください。

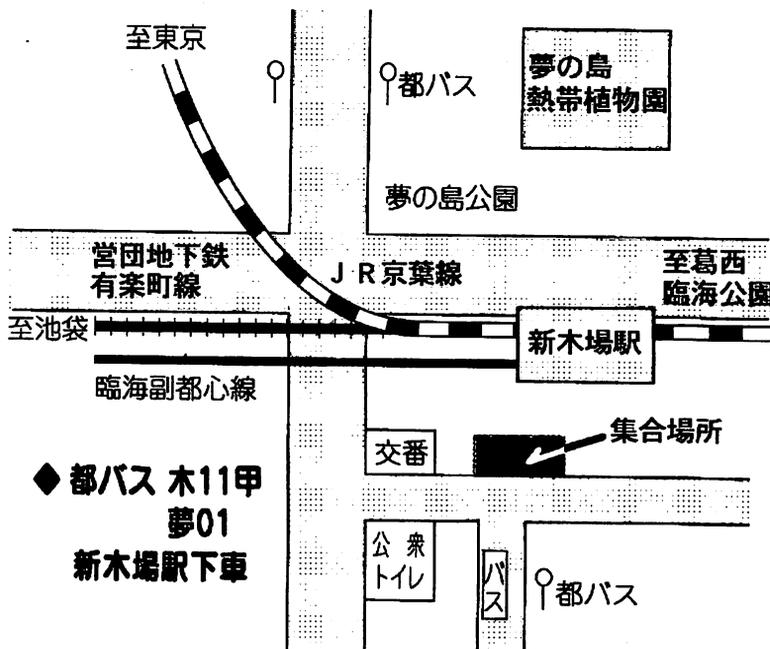
[申し込み、問い合わせ先]

全国愛鳥教育研究会事務局

担当 箕輪多津男

TEL. 03-3225-3590

FAX. 03-3225-3593



'97 身近な生きもの調査に参加しよう

常務理事 平田 寛重

環境庁の行っているテーマ別の身近な生きもの調査は始めて3年目になります。セミのぬけがら・ひっつき虫と続き、今回は待望のツバメです。

「調査のてびき」を環境庁自然保護局自然環境調査室 (TEL.03-3591-3228) に問い合わせると、送料代負担で送ってもらうことができます。

調査の目的は、建物等に巣を造るツバメ・イワツバメ・コシアカツバメ・リュキュウツバメ・ヒメアマツバメの全国的な分布、ツバメ類の営巣環境の地域的な差異、繁殖の途中での失敗の理由、ツバメに対する人の気持ちなどが対象になります。

調査の正確さを期すために、巣や営巣環境の写真を撮影して調査用紙に貼るシステムになっています。

一人で参加しても、グループやクラス単位で参加しても構いません。一人一つ以上の巣を調べて調査用紙に記入して報告すれば完了です。期間は、これから8月末日までです。調査票の返送期限は8月31日(当日消印有効)ですから、まだまだ余裕があ

ります。ツバメの中には、2度3度子育てをする個体もいますからあわてなくても大丈夫です。

調査結果は、分布状況などを整理した報告書として参加者に配布されますので、それを励みに頑張ってください。

なお、身近な生き物調査に関する情報は以下の方法でも得られます(『調査のてびき』から引用)。

- (1) F A X サービス (NTT World Nature Network)
F A X 番号 03-5353-7460 (4301 #)
※ダイヤル回線の場合は、ガイダンスが聞こえたら電話機のスイッチを「PB」-または「トーン」に切り替えて下さい。
- (2) インターネット
<http://www.wnn.or.jp/wnn-n/>
<http://www.eic.or.jp/>
- (3) パソコン通信 (EIC ネット) 03-3595-3271
※NIFTY-Serve または PC-VAN から接続する場合は「他のネットワークへの接続」のメニューから「EIC ネット」を選択。



ひとりでいても迷子じゃないよ！

常務理事 平田 寛重

一昨年、昨年と、(財)日本鳥類保護連盟では、(財)日本野鳥の会と共催で「ひとりでいても迷子じゃないよ！」のキャンペーンを実施している。

野鳥のヒナを見ると、ついかわいくて、かわいそうだと、連れ帰ってしまいがちである。しかし、それは、人間の勝手な解釈にしかすぎず、自然のあるべき姿にまかせるのが賢明なのである。

巣から落ちたり、親とはぐれたりしても、親にまかせておくのがよい。自然界は厳しく、生き残るための試練は常にあり、一時的に人が援助しても、いずれは自分で餌を探って生きていかなくてはならない。その意味で、人が育てるよりも親にまかせるほうがよいのである。

もちろん、ネコがいて、襲われるのが心配といったこともある。そのような時には、ネコが手出しできない所に置いたり、籠をかぶせたりして、とりあえず安全を確保する等の必要はある。

ヒナとの出会いはケースバイケースでそれぞれに異なるが、何でもかんでも拾ってきてしまうのは、鳥にとってはたいへ

ん迷惑なことであるということを知ってもらい、野鳥とのつきあい方を考え直してもらうことが必要である。

ヒナを拾わないで!!



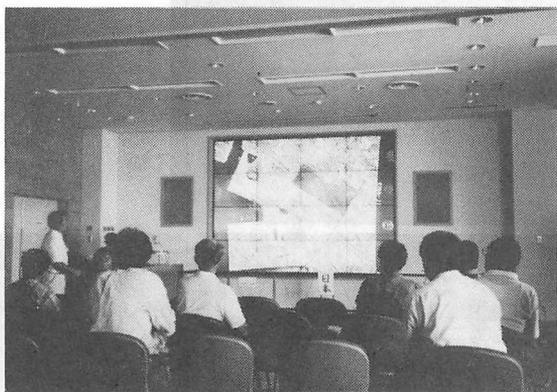
絵：水谷高英

平成8年度夏期研修会報告

常務理事 長屋昌治

平成8年8月16日(火)、夏期研修会を、千葉県習志野市にある「谷津干潟自然観察センター」において行いました。

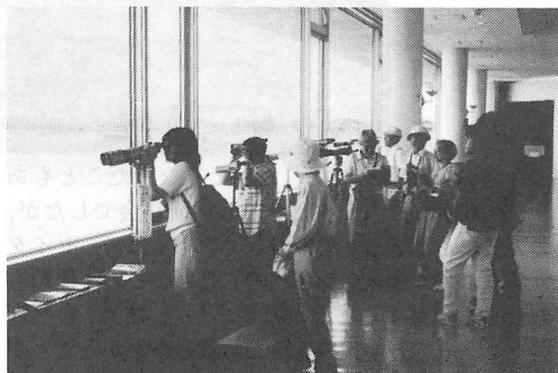
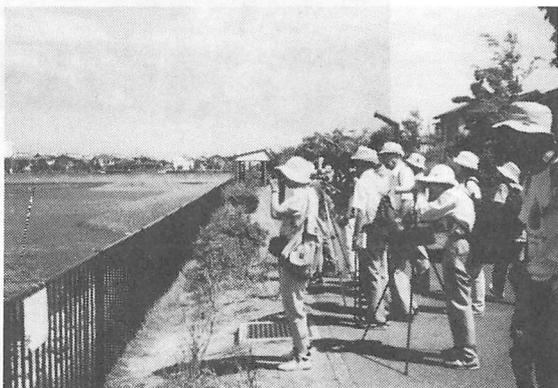
11時に開会し、午前中は、谷津干潟や水辺の野鳥のビデオを視聴した後、自然観察センターの野中志郎氏よりお話をうかがいました。午後は、野鳥観察を観察センター及び、その周辺で行いました。



谷津干潟は、東京湾の最終部に残された約40haの干潟で、ゴカイ、貝、カニ、魚、そして水鳥など、多くの生き物たちが生息しているところです。特に、水鳥では、シギやチドリ類が多く、シベリアなどの北の国と東南アジアやオーストラリアなど南の国との間を行き来する旅鳥にとって、谷津干潟は渡り途中の中継地として重要な場所になっています。1993年にはラムサール条約の登録干潟にも認定され、国際的にも重要な干潟とされています。

しかし、このような重要な干潟も、計画して残された訳ではなく、東京湾が年々埋立てられる中、この地が明治時代に塩田だったため、大蔵省の所有地として偶然埋立をまぬがれたのでした。その後、谷津干潟を守る会などの人々の努力の結果、習志野市等が谷津干潟全体を生態観察公園に整備しました。

野中氏によると、谷津干潟は泥質干潟で多くの栄養分を含んでいるため、たくさんの小動物が生息でき、それをエサとする水辺の鳥が多く集まるとのことです。年間を通して約100種類の野鳥が確認でき、東京湾周辺では谷津干潟が一番野鳥が観察できるということです。しかし、干潟を自然のまま放置しておくと、水の力で土が流されてしまい、栄養分の少ない、砂質干潟になってしまう可能性があり、さらには干潟でなくなってしまうこともありうるとのことでした。





今回の夏期研修会は、お盆と重なったこともあり、参加者が17人と少しさみしい研修会でしたが、お天気にも恵まれ、潮の引き具合もよく、セイタカシギ、ダイシャクシギ、ダイゼンなど、41種類もの野鳥を観察することができました。また、自然観察センターの野中氏の貴重なお話もうかがうことが

でき、大変勉強になりました。厚く御礼を申し上げます。と思います。

谷津干潟のような人工的に残された干潟は、常に人間が手を加えて管理していかないと自然本来の干潟にはならないということが深く印象に残った研修会でした。

論 説

環境教育と自然教育園

常務理事 平 田 寛 重

環境教育を実践していく上で最も重要な事は、自然を理解することである。自然を理解することによって、自然への対応の方法や生物との共存の道を見出すことができる。現在の所、栄華を極めている人類でさえ、自然界のたった一種の生物に過ぎない。その人類だけが思うがままの活動をしていたのでは、地球全体としてのバランスは崩れる一方である。その歯止めとして環境教育が脚光を浴びてきた成りゆきを考えれば、生物をはじめとする自然に対して謙虚に学ぶ姿勢が必要となる。そして、自然を学び、そのしくみを考え、自然とのつながり方を構築していくために、学習材としての自然環境を身近な場所に設置する必要性が出てくる。また、自然を学ぶこと以上に自然とかかわり自然への想いを高め、関心を沸き立たせることも重要な課題でもある。

とりあえず、上記の目的を達成する施設を自然教育園と称することにする。学習指導要領では、内容の取り扱いの中で教材園の設置を挙げているが、拘束力はない。学校設置基準や教育委員会通達の中に校庭の緑化率や野外自然教育園の設置を盛り込むというように法制化した方が確実で手っ取り早いのであるが、日本の教育関係者の中にはこのような考えはあまりなく、校庭は子どもの庭というよりも運動のためのグラウンドとして解釈されるのが一般的である。子どもの人権から考えるならば、子どもたちに自由な時間をどんな環境で過ごしたいか尋ね、子ども自らがその場の創造に思いをめぐらし、校庭の改造に関わっていくことを考えてもいい時代に来ていくように思われる。

話が横道にそれたが、自然とふれあい、学ぶための施設を校庭に造ることについては、まだまだコンセンサスが得にくい状況にある。それは、一つには、教師の誰もが十分に活用できるというわけでないことが考えられる。というよりも、教育園そのものの必要性があまり認識されていないと考えた方がよいかもかもしれない。その理由としては、教師が生物領域の学習をあまり得意としていないことが挙げられる。物理や化学に比べて一朝一夕にできるという

ものではなく、習熟し自分のものにするまでにかなりの時間と努力が必要であるためである。

私たちは、環境教育を意識した授業を行う時に、特に自然学習の部分では、教室内にいても思うように進展しないことが多い。当然のことながら、自然を学ぶのであれば、フィールドワークをしなければ、実際の知識や考えは身に付かない。学校の周辺が公園や農耕地や雑木林や湖沼や河川であれば、必要に応じて、それらの環境を活かすことができる。しかし、1クラス40人程度の子どもを引き連れたの、交通事故の心配をしながら安全面に気を使いながらの授業を行うことは、かなり労力のいることである。環境に恵まれている学校でさえ、このような状況にある。もし、何も無いような地域であれば、フィールドワークはできずに、ビデオや写真などを見せて代償体験を促して、わかったようなつもりにさせてしまいかねないのである。しかし、それでは、個々の想いで環境教育に取り組もうという雰囲気は出てこない。知識だけで、これは悪いこと、これはこうすればできるはず式の受け売りのパターンになってしまいかねないのである。

このようなことでは、十分な環境教育は実践できない。自然に対する熱き想いが、自分が環境とどうつきあっていこうかと考えるバックボーンとなる。そこに、また、学校にいる子どもたちにとって一番身近な校庭に自然学習のための施設を造る意味が出てくるのである。

では、どんな施設が効果的なのだろうか。これには、その学校の地域性や土地条件を踏まえて検討する必要がある。また、施設ができあがってからの学習プログラムをも含めて考えを進めていくべきである。

最も好ましいのは、湧水があり、それを活かした水環境の施設ができることである。水(池)があると生物相は格段と豊かになる。湧水がなければ、井戸を掘ったり、水道水を使ったりして、池を造ることを念頭において取り組むとよい。

池といっても石を組んで灯籠を置いて鯉を泳がし

てというような前時代的なものではなく、池の深さに応じて生息環境の異なる湿性植物を植え、学習用の散策路を付けるといったものにする。池の周辺には、解放面としての草地と雑木林を設定し、より多様な環境を創り出すように努める。すると、その環境を生活の場とする生物が集まり、彼らが絡まり合ってその環境の自然を構成していくのである。この時、植物の移植は、潜在植生を活かした構成で行うようにする。また、動物の移入は行わずに、彼らが移動してくるまで気長に待つのがよい。

教育園は、生態園として常に生きていなければ、学習材として適切とは言えない。生物相が変わっていくことも自然のしくみとして学んでいくことである。しかし、場合によっては、維持管理を行わないと、生物相が貧困になる場合もある。湿地が乾燥化したり、草木の背が伸びすぎたために日光がさえぎられて他の植物の成長のさまたげになったりすることで、多様な環境が単一化してしまうといったことがそれに当たる。これらについては、子どもたちに何を学ばせるかといったその学校の教育園の運営方針を明らかにした上で、維持管理の方法を考えていけばよい。

編集後記

機関誌「愛鳥教育」もようやく50号を迎えることができました。1980年7月に16ページの創刊号が生まれ、17年かかって一区切りとなりました。途中諸般の都合により3つの合併号を発行したため、正確には、50冊はなく、47冊になります。

初期の頃は、柳沢紀夫さん、その後、松田道生さん、斎藤一紀さんらにご指導いただき、日本鳥類保護連盟のバックアップのもとに何とか続けてくることができました。

現副会長の杉浦が日本鳥類保護連盟の愛鳥教育担当の頃に頑張って取り組んだイギリスRSPBのプロジェクトガイドの翻訳、各地の会員からの実践報告など内容もだんだん濃くなってきました。

37号からは、表紙を一新し、論説をいれ、従来とは異なる編集方針を取り入れ、質の高い内容をお届けしてきたと自負しています。しかし、編集作業が遅れ、予定通りに発行できず、皆様方にはご迷惑をおかけしており、申し訳なく思っております。

会では、入会案内や、野鳥観察シート等の教材の開発にも着手できるようになり、今後とも、野鳥保護思想を持つ人間を育てるための愛鳥教育の充実になお一層の努力を重ねていく所存ですので、皆様のお力添えをお願いします。

今回は、環境教育に不可欠な自然教育園の取り組みについて特集を組んで見ました。生態園、ビオトープやエコアップ、トンボ池、ミニサンクチュアリ...といろいろな試みが各地で行われています。教師が自然とのかかわりを敬遠しがちなこの時代であればこそ、学校内に自然環境を充実させ、遊びや授業の中で子どもたちの生きる力を育てる必要があると考えています。

<KANJU>

通算50号ということで、ページ数が通常に比べて膨大になりました。

当研究会の沿革や機関誌『愛鳥教育』の目次については、常務理事の平田寛重氏がとりまとめてくださいました。その労苦に感謝するものです。

編集に手間取り、発行が大幅に遅れましたことを深くお詫び申し上げます。発行の遅れを回避するための体制については、技術的な面も含めて、現在検討を進めております。

今後の当研究会の在り方については、座談会でも話題になりました。やや夢物語に近いとも思われることの無いわけではありませんが、会員各位からのご意見をいただけますようお願い申し上げます。

(杉田)

愛鳥教育 No.50

平成9(1997)年6月31日

発行人	江袋島吉
発行所	全国愛鳥教育研究会
住所	〒160 東京都新宿区新宿 2-5-5 新宿土地建物第11ビル5F (財)日本鳥類保護連盟内
電話	03-3225-3590
FAX	03-3225-3593
会費	3,000円
郵便振替	00180-7-12442
印刷所	祐文社

愛鳥クイズ

【前回の問題と解答】

《問題》

下記の番号に合う種をA～Lの中から選びなさい。

- ①自分で木の幹に穴を掘って、巣をつくる。
- ②巣をつくらなで、他の鳥の巣に自分の卵を産みつけて育ててもらっちゃっかり者。
- ③他の鳥がつくった巣を横取りしてしまう鳥。
- ④人家の壁等に泥と藁等で巣をつくるもの。
- ⑤水の上に巣をつくるもの。
- ⑥タカの巣の中に巣をつくってしまう、こわいもの知らずの鳥。
- ⑦木の洞を巣に使うもの。
- ⑧木の枝に皿形の巣をつくるもの。
- ⑨電柱に巣をつくるもの。
- ⑩他の鳥が木の幹に穴を開けてつくった巣に泥で壁をつくり、自分の体に合う大きさに小さくして巣に使うもの。
- ⑪巣箱を使うもの。
- ⑫土の壁に穴を開けて巣をつくるもの。

A：カササギ B：ゴジュウカラ C：ニューナイスズメ D：スズメ E：カッコウ F：キジバ

ト G：ショウドウツバメ H：ツバメ I：カイツブリ J：フクロウ K：カワガラス L：コガラ

《解答》

それぞれが重複しないようにすると、以下のようになります。

- ①L ②E ③C ④H ⑤I ⑥D
⑦J ⑧F ⑨E ⑩B ⑪K ⑫G

《補足説明》

鳥たちは、いつも上記の問題のように巣を使っているわけではありません。例えば、カワガラスは、普段は堰堤の水抜き穴や石垣の隙間などに巣を造りますが、橋の下に巣箱をかけておくとそれを利用することもあります。

《参考文献》

和田剛一：WING，小学館，1995……(③・⑫)
小学館：ビデオ「野鳥の観察」……(⑩)
日本野鳥の会山口県支部：山口県版鳥類繁殖地図調査報告書，1990……(⑪)
唐沢孝一：都市の鳥，保育社，1994……(⑥・⑧)
ビクター：ビデオ「日本の野鳥5：鳥たちの故郷」……(⑨)

【今回の問題】

今回は、鳥の名前の由来についての問題です。
それぞれの、条件に合う鳥の名前を考えてみましょう。

1. 鳴き声に由来するもの
2. 色に由来するもの
3. 模様由来するもの
4. 形に由来するもの
5. 性質（行動）に由来するもの
6. 食性に由来するもの
7. 大きさに由来するもの
8. 場所の名前に由来するもの
9. 生息環境に由来するもの
10. 体（一部及び全体）の形に由来するもの
11. 体の特徴に由来するもの